西海考古

第9号

2016年9月

西海考古同人会

題字　**兵働翠苑**（日展作家）

表紙デザイン　中村　幸

目　　次

西北九州における貝殻文円筒形土器と押型文土器の編年……大坪　芳典（１）

春日式土器の分類・変遷と長崎市深堀遺跡出土資料の検討……土岐　耕司（17）

長崎市深堀遺跡におけるフネガイ科製貝輪について……土岐　耕司（35）

五万長者遺跡出土の老司式軒瓦について……伊藤敬太郎（47）
　―肥前国高来郡における古代寺院造営の背景―

大村湾沿岸地域一帯における瓦器椀の再検討……柴田　　亮（63）
　―肥前南部型瓦器椀を中心として―

平戸領内における17世紀海外輸出陶磁器の一考察……溝上　隼弘（73）
　―雲竜文碗を中心として―

【資料紹介】伊古遺跡出土遺物について ……村子　晴奈（83）

【近況報告随筆】新生児と土偶 ……古澤　義久（89）

執筆要綱……（96）

執筆者一覧……（98）

西北九州における貝殻文円筒形土器と押型文土器の編年

大　坪　芳　典

はじめに

今回は，西北九州における縄文時代早期前・中葉の貝殻文円筒形土器と押型文土器とを対象とした約２千年に渡る時期の土器編年の研究成果を発表したい。本稿の目的は，大きく２つがある。１つ目は，本稿の土台となった論稿の発表を昨年（大坪 2015a）に宮崎考古学会で行ったが，その発表では，特に百花台Ⅰ～Ⅲ式土器について十分に書き足りていない事が多かったため，本稿では，その論文に加筆し発展させて，さらに縄文時代早期の貝殻文円筒形土器と押型文土器の各型式についての属性も詳しくまとめた。２つ目は，先の宮崎考古学会での発表で長崎・佐賀県についての内容を発表したが，南九州での発表であったこともあり，長崎県の研究者には目に留まりにくいことも考えられた。長崎県の縄文時代早期前・中葉の土器は，未だ時期の判別が難しいものや各型式の認識に誤解が見られる点もあり，そのため当該期の土器が出土した際に多いに活用して頂きたく，長崎の地を代表する考古学の研究誌の一つである『西海考古』で発表することにより周知したいと考えた。

また，1998年に水ノ江和同氏が長崎県は，大分編年が援用できない地域と述べられて，渡邊康行氏をはじめ長崎県の研究者も編年作成の必要性を強く言われてきた。この頃より私は，長崎県に新たな編年を確立する必要性を感じ，研究を重ねてきた。すでに15年以上が経過している今，ようやく長崎県の押型文土器の編年の骨子となるべき編年案を作るに至り，今回提示させて頂くこととした。

１．研究史

西北九州における縄文時代早期の貝殻文円筒形土器と押型文土器の編年を検討するにあたりまず，その研究史を整理したい。九州の貝殻文円筒形土器と押型文円筒形土器については，1977年に賀川光夫氏や高木正文氏らにより，具体的に論じられており，これが初見だと思われる（賀川 1977，高木 1977）。高木氏は，熊本県の貝殻文・押型文の円筒形土器を集成し，その特徴・分布・遺構との共伴遺物・時期についてまとめている。ただし，円筒形土器と塞ノ神式土器の共伴事例を理由に，平底押型文土器や円筒形土器を縄文時代早期後半と捉えていた。

1984年，多々良友博氏は，弘法原遺跡から円筒形押型文土器が出土していることに着目した。しかし，この段階でも「安定した平底をもつ土器は押型土器でも終末に位置付け」（多々良 1984）ており，具体的には，手向山式土器の時期あたりと考えられていた。

1986年，山崎純男氏と平川裕介氏は，円筒形押型文土器について「口縁部が直行し，円筒状あるいは底部に向かってすぼまる器形で底部は安定した平底をなす。長崎県弘法原遺跡～（略）～に好例がある。文様は一般に山形文が多く，全体に横走施文してあり，口縁内面は無文のままで，丁寧な磨き調整を行っているものも多い。この手の押型文土器は最近，円筒形押型文土器と仮称されている。この円筒形押型文土器は施文文様が押型文であるのを除けば九州南西部に広く分布する，いわゆる円筒土器となんら変わるところがない。最近南九州の貝殻文円筒土器の編年も大きく変化し，従来の編年的位置よりもさかのぼるとみられる。円筒土器の一部もさらに古くさかのぼるものが散見され，少なくとも押型文のある時期とは併行関係にあるものと思われる。このように考えてくると，平底の押型文土器の一部は，押型文土器がその分布範囲を拡大する過程の中で，円筒土器（貝殻文円筒土器）と

の接触，影響によって，円筒形押型文土器が発生したと考えられる。」（山崎・平川 1986）と述べており，円筒形押型文土器を時間的に古く遡らせて位置付けている。また，円筒形押型文土器の属性まで詳細に記述しており，より深化した考えを示した。

さて，1998年以前の西北九州の縄文時代早期の押型文土器の研究は，大分地方を中心に編年され，いわゆる大分編年と呼ばれるものが援用されていた。その研究の流れを大きく変えた画期的な論文を，1998年，水ノ江和同氏が一野式土器と弘法原式土器の２型式を設定し発表された。また水ノ江氏は，弘法原式土器の時期を大分編年の稲荷山式土器の頃に位置付けた（水ノ江 1998）。

一方，1999年，渡邊康行氏は，1998年以前に長崎県において「過去，押型文土器の型式と編年に関する研究は，行われたことがない」（渡邊 1999）という実情を冒頭に述べて，さらに水ノ江氏の一野式・弘法原式土器の設定について検討を行っている。渡邊氏は，水ノ江氏の位置付けについて実年代と石器組成などについて大きく３点ほどの疑問を提示している。１点目は，平底の押型文土器が7300 B.P という年代を示すことから弘法原式土器の位置づけに疑問を抱いている。２点目は，弘法原遺跡より石匙が出土しており，北部九州の石匙の出現が田村式土器以降であるため整合性に矛盾があると述べた。ただし，この石匙が晩期の所産である可能性もあると言う。３点目は，弘法原遺跡が押型文土器の単純遺跡であり，これだけ充実した文化要素が大分編年の稲荷山式土器の頃に突如として出現して，その後の時期に忽然と消滅したのかという疑問点である。これらの理由から弘法原遺跡（弘法原式土器）の時期は，縄文時代早期後葉の定住要素を示す百花台遺跡群との連続として捉えた方が自然であるとし，かつ実年代と石匙の存在とも整合することや無文土器・条痕文土器との関係から，大分編年の稲荷山式から下菅生Ｂ式土器の頃に一野式土器が存在し，田村式土器の頃に弘法原式土器が出現すると述べて，水ノ江氏と異なった見解を示した。

それより数年後の2006年，筆者は，地域研究に目を向けて島原半島の押型文土器の様相について「弘法原式土器併行期に東九州系押型文土器の「器形が深鉢形・薄手化傾向の器壁・尖底＋文様が押型文様」が伝播してくる。その過程で円筒形条痕文土器の一野式土器や円筒形撚糸文土器に文様転換が行われた円筒形押型文土器である弘法原式土器が成立し，それに後続して早水台式土器から下菅生Ｂ式土器併行期に「器形が円筒形基調の押型文尖底の影響を受けた狭脚な平底・厚手の器壁＋文様が押型文様」」という特徴をもち在地化する土器が見られることを述べた（大坪 2006）。

2007年，筆者は，長崎県島原半島及び半島に所在する下末宝遺跡の壺形土器を基に九州の押型文土器様式の壺形土器についてまとめた。その際に，半島の押型文土器について，水ノ江氏が大分編年でいう稲荷山式土器段階の円筒形押型文土器を弘法原式土器と位置付けていたものを拡大解釈してしまい，弘法原式土器に後続する平底押型文土器も含めて誤って位置づけてしまった（大坪2007）。この頃の筆者の考え方について，弘法原式土器の出現期に関しては水ノ江氏に近い考えを有するものの，円筒形押型文土器にそれに後続する数型式の平底押型文土器も含めて弘法原式土器の範疇で捉えていたことが誤りであったと言える。

2009年，筆者は，考えを改めて，水ノ江氏が弘法原式土器を大分編年の稲荷山式土器の段階に設定したのを踏まえた上で，弘法原式土器に後続する器形が円筒形基調で押型文・尖底の影響を受けた狭脚な平底・厚手の器壁＋文様が押型文様という特徴を有する，大分編年でいう早水台式・下菅生Ｂ式・田村式土器併行期の在地系土器を，弘法原式土器から切り離して，別の土器型式群が存在することを唱えた。その他，一野式土器の中に瘤文土器を有する土器があることを発表し，これが後の下末宝式土器として細分する土器となる。またこの瘤が稲荷山式土器の属性であるため，稲荷山式土器の併行期に一野式土器が終焉をむかえて，その後の稲荷山式土器の頃にこの下末宝式土器が成立し，早

水台式土器の頃にかけて弘法原式土器が存在する考えを述べた（大坪 2009）。

2012年，筆者は，島原半島の貝殻文円筒形土器と押型文土器を整理して，これまで弘法原式土器に後続する大分編年の早水台式・下菅生Ｂ式・田村式土器と併行する土器群，いわゆる狭脚な平底を有する押型文土器（平底押型文土器）を百花台・下末宝遺跡の一群と称して位置付けた。また一野式土器から瘤を有する土器を細分して別け，2009年の頃に述べた瘤を有する特徴をもつ土器を下末宝式土器として設定した（大坪 2012）。この論文が2015年に発表する編年の骨子となった。

2015年１月，先述した宮崎考古学会で発表した論文で，筆者は2012年に設定した百花台・下末宝遺跡の一群をようやく百花台遺跡群の資料をもって広義の百花台式土器（註１）と位置付けることができた。その広義の百花台式土器を細分して次のように設定した。弘法原式土器に後続する百花台Ⅰ式土器を大分編年の早水台式土器に，百花台Ⅱ式土器を大分編年の下菅生Ｂ式土器に，百花台Ⅲ式土器を大分編年の田村式土器に併行するものとして位置付けた。その他，尖底の政所式土器に併行する貝殻円筒形土器のものを小ヶ倉式土器と設定して，その後の下末宝式土器の設定の再確認を行った（大坪 2015a）。

2015年５月，岡本東三氏は，九州の押型文土器の出現とその前段階の土器の編年を整理する中で，弘法原式土器の時間的位置付けについて「水ノ江氏は一野式土器と弘法原式土器の関係について，山崎・平川両氏同様，前者が古く，後者が新しいとする見解を示し，後者の弘法原式土器を稲荷山式段階に位置付けている（水ノ江 1998）。この水ノ江氏の見解に対し，渡邊康行氏は弘法原式が田村式以降の可能性を模索している（渡邊 1999）。近年，大坪芳典氏は円筒形条痕紋を２段階（一野式土器→下末宝式土器）に分け，弘法原式をやや下げて早水台式土器近くに位置づけている（大坪 2012）。」と評価した（岡本 2015）。筆者が弘法原式土器を早水台式土器近くに位置付けたと書かれているが，誤解がないように断っておくと，厳密には2009・2012年及び2015年段階での筆者の発表（大坪 2015aの表１西北・西九州編年比較表参照）では，弘法原式土器を大分編年の稲荷山式土器の後半の頃に出現し，早水台式土器のいずれかの段階まで併行し存続した土器だとする考えを示している。

このように弘法原式土器の編年的な位置付けが困難な原因の一つに，大分編年の稲荷山式土器や早水台式土器の存続期間が想像以上に長きに渡ることが考えられ，大分編年の稲荷山式土器だけでとっても，西北九州の土器が数型式に渡り併行していたと思われる。この弘法原式土器とその前後の土器の編年的な位置付けについては，複雑さを呈しているため次の節以降で，土器型式ごとに説明する際にあらためて述べたい。

２．西北九州における貝殻文円筒形土器と押型文土器について

それでは，西北九州における縄文時代早期の研究の過程と現状を説明した上で，いよいよ早期の中でも押型文土器の時期とそれ以前の貝殻文円筒形土器について各型式の属性・年代観・他地域との比較・出土例などを整理し検討したい。

⑴　西北九州の貝殻文（撚糸文）円筒形土器

①　小ヶ倉式土器

2015年，小ヶ倉式土器は，佐賀県佐賀市富士町の小ヶ倉（こかくら）遺跡で発見されたもの（**第２図１**）を標式土器として設定した（大坪 2015a）。小ヶ倉遺跡の標式遺物については，その報文に詳しく説明されており「底部は確認できなかったものの，Ａ区東部でほぼ１個体分が押しつぶされた状態で出土した。口縁部はわずかに内傾する部分もあるが，ほぼ直立する円筒形で，口縁端部は丁寧に

面取りされている。口縁部外面に櫛状工具で横位に数段の刺突文を施すが，何段になるかは確認できない。施文具の幅は約0.2ミリであるが，原体については不明である。器面調整は，ハケメ状の痕跡を残す板状の工具によるものと思われる縦あるいは斜め方向のナデで，内面は更に平滑に仕上げる丁寧なナデが見られる。」またその土器に付着した炭化物による^{14}C 年代測定の結果，9565±30yrBP，1σ暦年較正用年代が9566±31yrBP であった（渋谷・徳永・パレオラボ AMS 年代測定グループ 2011）。この結果，年代的に約9500～9600年前の資料で縄文時代早期前葉の時期を示していた。小ヶ倉遺跡の小ヶ倉式土器は，櫛状工具文と言う点では貝殻腹縁文と類似しており，この土器型式の文様に貝殻腹縁文とその擬似的な櫛状工具文のものとがあるようである。また小ヶ倉遺跡の土器は，円筒形土器であり，残存状況より平底と考えられる。このように西北・西九州で分布し，口縁部外面に貝殻腹縁文とその擬似的な櫛状工具文という文様を有し，かつ平底の円筒形土器のような特徴をもつものを小ヶ倉式土器として設定した（大坪 2015a）。小ヶ倉遺跡以外での小ヶ倉式土器の出土例は，古くから西北・西九州では佐賀県伊万里市白蛇山岩陰遺跡・有田町盗人岩洞穴遺跡や長崎県佐世保市岩下洞穴遺跡・島原市一野遺跡から出土している事が知られていた。近年では，雲仙市吾妻町浚松（さらいまつ）遺跡において貝殻腹縁文で底径の広い底部を有する小ヶ倉式土器に該当する口縁部が数点出土している。

九州で小ヶ倉式土器と同時期の土器として東九州を中心として北部九州あたりまでを分布域とする政所式土器がある。その政所式土器は，中原Ⅱ式土器と口縁部の属性が同一で時間的に併行すると考えられる。政所式土器を型式設定した賀川光夫氏は，「口縁部に貝殻文が施されて，アナダラ属の腹縁を縦位に当て，押捺して凹凸刻文を上下三列に並列させたものである。底部は尖り，その部位は肉厚に作られる」と口縁部に貝殻文を施す尖底を最大の特徴とすると述べている。すなわち，東九州を中心として北部九州に分布する政所式土器が，尖底であるのに対して，西北・西九州を中心として分布する小ヶ倉式土器は，貝殻文・櫛状工具文の文様を施し，平底であることが最大の特徴と言える。ただし，在地系の貝殻文・櫛状工具文を施す平底円筒形土器の小ヶ倉式土器分布圏に，今後，稀に政所式土器が出土する可能性は大いに有り得る。数量で考えれば，それはあくまでも西北・西九州に伝播した外来系土器と言うことになるのであろう。

② 一野Ⅰ式土器・一野Ⅱ式土器の設定

一野式土器は，1998年，水ノ江和同氏が島原市有明町の一野遺跡で発見されたもの（**第２図７～９**）を標式土器として設定した（水ノ江 1998）。それを本稿では，一野式土器を一野Ⅰ式土器と一野Ⅱ式土器とに細分して設定する。詳細については，後述する。水ノ江氏は，一野式土器（のちほど設定する一野Ⅱ式土器）について「貝殻文円筒形土器で普通は条痕文土器と呼ばれている一群」で「底部は平底で，器形・口縁部ともほぼ立ち上がる円筒形。口縁部から胴部上半にかけて，二枚貝の腹縁を器面に押しつけ横位に条痕文の文様を３～６条巡らすのが最大の特徴である。器面調整はナデで，横位の条痕文の施文部については，同一原体による縦位の条痕文が横位のそれの下に窺えるが，これは器面調整と文様の両方の要素を兼ね備えているようである。横位の条痕文の文様については，ごく緩やかな波状文や押引文の手法により一見山形の押型文のように見えるものもある。～（略）～押型文とは明らかに異なったものである。～（略）～貝殻円筒形土器には無文土器が存在しないことである。」と説明されている。その他，器形の特徴として口唇部に面取り調整を行うものもある。

水ノ江氏は，型式設定を行う際に時間的な位置付けについて，弘法原式土器に先行する土器群としている。木崎康弘氏は，熊本県を中心とした中九州地域についての編年表で，中原Ⅲ式土器を稲荷山式土器に併行させて，中原Ⅳ式土器を早水台式土器に，中原Ⅴ式土器を下菅生Ｂ式土器や田村式土器・

沈目式土器に併行させている（木崎 1998a）。その表との対応関係で言えば一野式土器は，中原Ⅲ式土器と併行関係にある。しかしながら，中原Ⅳ式土器も貝殻腹縁の条痕文を特徴にもつことから，一野式土器は，中九州の中原Ⅲ・Ⅳ式土器と併行期にあると考えられ，大分編年の川原田式土器・稲荷山式土器かそれ以前の時期に併行して存在していたと考えられる。

長崎県内から出土する一野式土器（**第２図６**）は，土器外面の口縁部から胴部にかけての部分に施文するが，その文様帯の幅は，器高に対して凡そ２分の１であるものが大半である。一方，島原市畑中遺跡から出土する一野式土器は，口縁部外面に幅狭な文様帯が見られる。先述した２分の１という表現で言うならば器高に対してその文様帯の幅は，５・６分の１程度で狭い。その違いは，熊本県で標式設定された中原Ⅲ・Ⅳ式土器の属性に類似している面も見られる。木崎康弘氏は，中原式土器の設定でその文様帯が拡大化したという考え方から中原Ⅲ式土器から中原Ⅳ式土器へ変遷を考えている（木崎 1998a）。元々，一野式土器と中原式土器とは属性が類似する点が多い。このことから，文様帯が狭い畑中遺跡の資料から，一般的にこれまで一野式土器と言われている幅広な文様帯の土器群へ変遷する可能性が高い。以上のことから，基本的に一野式土器の円筒形の器形で二枚貝復縁による条痕文は類似するものの，外面の幅狭な文様帯を最大の特徴として，畑中遺跡で出土した土器をもって「一野Ⅰ式土器」と呼んで設定したい。ところで，畑中式土器ではなく一野Ⅰ式土器としたのは，文様帯を除いて基本的な属性が一野式土器と共通し，大枠として一野式土器の範疇で捉えたいためである。ただし，編年で新旧関係を示すために一野式土器を細分して「一野Ⅰ式土器」と設定する。一方，従来一野式土器とされていたものを「一野Ⅱ式土器」と呼んで新たに設定したい。その上で，一野Ⅰ式土器から一野Ⅱ式土器へ変遷する可能性があることを付け加えたい。その時間的な位置付けについては，一野Ⅰ式土器が大分編年の川原田式土器もしくはそれ以前の土器と併行し，一野Ⅱ式土器が大分編年の稲荷山式土器と併行する時期だと考えられる。

さて，一野遺跡・畑中遺跡以外での一野式土器の主な出土遺跡は，南島原市大崎鼻遺跡，島原市稗田原遺跡，諫早市鷹野遺跡・西輪久道遺跡・牛込Ａ・Ｂ遺跡，大村市岩名遺跡（渡邊 1999），その他南島原市下末宝遺跡・上畦津遺跡（大坪 2007）などで出土している。その状況から長崎県では，県央から島原半島にかけて分布する。ただし長崎県外でも出土例があり，福岡県八女郡立花町白城西原遺跡（水ノ江 1998）や春日市原ノ口遺跡，大野城市本堂遺跡（林 2007），熊本県一帯で出土している。このように島原半島を中心として一円に広がる一野Ⅰ・Ⅱ式土器は，長崎県では大村市を北限とし，東に福岡県八女郡立花町，北東に春日市や大野城市，南東の熊本県一帯に中原Ⅲ・Ⅳ式土器として広く分布している。さらに広域に見ると大分県を中心に九州内で広く分布する尖底で砲弾形の器形を有する古手の押型文土器（川原田式・稲荷山式土器もしくは川原田式土器以前の土器）の時期に，それ以外の地域では一野式土器，中原Ⅲ・Ⅳ式土器，石坂式土器，別府原式土器といった基本的に貝殻円筒形土器という様式を用いながら，各地域で多様性のある土器様相を呈していたと言える。

③　下末宝式土器

下末宝式土器は，2012年，南島原市の下末宝遺跡で発見されたもの（**第２図12**）を標式土器として設定した（大坪 2012）。下末宝式土器とは，一野Ⅱ式土器の衰退型式であり，東九州の稲荷山式土器に見られる瘤文を有することから一野式土器に後続し，大分編年の稲荷山式土器に併行する弘法原式土器の前段階の土器と考えられる。

次に下末宝式土器の属性を説明する。器形は円筒形土器であるが，一野Ⅱ式土器が胴部から口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がるのに比べて，胴部を最大径として口縁部の径が僅かに小さい。また

口縁部が外反気味である。底部は確認されていないが，一野Ⅱ式土器で見られるような平底と考えられる。器壁の厚さは，1.3㌢と厚みがある。文様は，外面に撚糸文を横走施文後に縦走施文する。また加えて斜方向施文も見られる。内面に横方向にナデ調整を施し，指頭圧痕が見られる。口唇部は，丸く撫でる。最大特徴は，口縁部上端の外面に稲荷式土器で見られる瘤文を有する円筒形土器という点である。特にこの瘤文の属性が時期の判別に繋がったと言える。この土器はまだ発見されたばかりで類例は見られないが，今後発見されていくことであろう。

⑵ 西北九州の押型文土器

① 弘法原式土器

弘法原式土器は，1998年，水ノ江和同氏が雲仙市吾妻町の弘法原遺跡で発見されたもの（**第２図13～15**）を標式土器として設定した（水ノ江 1998）。水ノ江氏は，弘法原式土器の特徴について「底部形態は大きくしっかりとした平底で，網代状圧痕が比較的多く見られる。口縁部は，外反することがほとんどなく直線的で，器厚は10～15㍉と厚く，器形はほぼ円筒形でまっすぐに立ち上がるかやや開く。文様は山形文が圧倒的に多く格子目文や楕円文も含まれるが，縄文や撚糸文もごく少量存在するようである。そしてもう一つ注目したい特徴が，無文土器は量的に極めて少ないという事実である」として設定した。西北九州に一野Ⅱ式土器の終焉から下末宝式土器が用いられていた時期に東九州方面より押型文土器のうち器形が深鉢形，薄手化傾向の器壁，尖底＋文様が押型文様の土器が伝播してくる。その過程で貝殻文円筒形土器の一野Ⅱ式土器や円筒形撚糸文土器の下末宝式土器に，押型文の文様が施されることにより誕生するのが円筒形押型文土器の弘法原式土器である。

弘法原式土器の年代的な位置付けについては諸説ある。弘法原式土器は，大分編年でいう稲荷山式土器併行期として設定された（水ノ江 1998）。筆者も以前まで弘法原式土器は稲荷山式土器を起源に，その後に後続する器形が円筒形基調の押型文尖底の影響を受けた狭脚な平底，厚手の器壁＋文様が押型文様といった特徴の早水台式・下菅生Ｂ式・田村式土器併行期までも含めて弘法原式土器として捉えていたが，弘法原式土器は稲荷山式土器の後半の頃に出現し早水台式土器の古段階の頃にかけて位置づけて（大坪 2009），その後，狭脚な平底土器には別型式を与え整理した方が賢明であると考えを改めた（大坪 2012・2015）。

さて，弘法原遺跡で出土している弘法原式土器と明確に判別するためには，器形の残存状況が良くないと判別しがたく，その後の，百花台Ⅰ～Ⅲ式土器も弘法原式土器と誤認してしまう可能性がある。そのため，弘法原遺跡を除く長崎県における明確な弘法原式土器の主な出土遺跡は，南島原市大崎鼻遺跡・島原市百花台遺跡群・雲仙市龍王遺跡・大村市岩名遺跡など限られた遺跡である。分布域は一野Ⅱ式土器と同様に島原半島を一円として県央付近まで分布するようである。

② 百花台Ⅰ式土器

百花台Ⅰ式土器（註１）は，2015年，雲仙市国見町の百花台遺跡群で発見されたもの（**第３図17**）を標式土器として設定した（大坪 2015a）。百花台Ⅰ式土器とは，大分編年の早水台式土器の後半期に併行する時期の土器であり，弘法原式土器に後続する。百花台Ⅰ式土器の器形は，早水台式土器の器形の伝播による影響を受けることにより，かろうじて弘法原式土器由来の円筒形ともいえるが深鉢形の傾向が見られる。弘法原式土器が胴部から口縁部にかけて直線的に立ち上がるのに比べて，百花台Ⅰ式土器は，口縁部が僅かに外反して胴部が若干膨らみ，胴部より下半が底部に向かいすぼまる。口縁部から底部にかけて残る完形のものは出土していないが，弘法原式土器より底径が小さな狭脚な

平底である。器壁も弘法原式土器程度の厚さのものから，それに比べて薄手のものも見られ，厚さは，１㌢程度のものからそれより薄いものもある。口唇部の形態は，丸身をもつものと，面取りを行うものがある。文様については，大分編年の早水台式土器が押型文様を横方向に施文するのに比べて，百花台Ⅰ式土器は，器壁外面に山形文や楕円文・平行文などを縦や斜方向に施す。これは早水台式土器が綺麗な砲弾形の器形であり口縁部が直線的であるため文様を横方向に原体を回転施文することが可能であるが，百花台Ⅰ式土器は胴部から口縁部にかけて僅かに外反するため，横走施文が不可能で縦・斜方向に施文具を用いて施文すると考えられる。土器内面には，全面無文のもの，口縁部上部に山形文・楕円文・平行文を横方向に施すもの，口縁部上部に短めな原体条痕を施すもの，それに加えて下に山形文・楕円文・平行文を施すものがある。また口唇部にも山形文や稲荷山式土器の属性と思われるような刻目の文様を施すものもある。ちなみに平行文は，東九州で見られない文様で，長崎・熊本を中心とした中九州に分布し，佐賀・福岡にも僅かに見られることから在地系土器の特徴といえよう。その他，文様の大きさについて楕円文で顕著にみられるが，早水台式土器の特徴と類似する小粒な文様を施文する。つまり百花台Ⅰ式土器は，早水台式土器が西北九州に伝播することにより文様・器形に影響を受けつつも，平底を基調とした在地土器の特徴を残して他地域に見られない独自の土器が成立したと思われる。また，百花台Ⅰ式土器は，東九州系の早水台式土器と共伴して出土することもある。

さて，百花台Ⅰ～Ⅲ式土器は，大分編年の土器の伝播による影響を強く受けているため，その概要を説明しておく必要がある。大分編年の稲荷山式・早水台式・下菅生Ｂ式土器の器種は，尖底の深鉢形土器が大半であり，壺形土器が共伴する。稲荷山式・早水台式土器の深鉢形土器の器形は，逆三角形の直線的な器形から，時代が下るにつれて下菅生Ｂ式土器の頃に胴部から口縁部にかけて外反し，田村式土器の頃に胴部が膨らみだす。口縁部の形態は，波状口縁と平坦口縁とがある。底部の形態は，本州から九州に伝播した初期が尖底で，田村式土器の頃には尖底から平底化する。従来，大分編年では完全に平底になったものをヤトコロ式土器と呼んでいた。ヤトコロ式土器は，賀川光夫氏によって設定されたが（賀川 1965），後に「外反する口縁をもち，押型文が粗大化（山形・楕円）し，縦走施文が顕著となる。器壁はやや厚手化し，底部は平底となり，押型文土器の終末，円筒土器への移行の時期が考えられる」（賀川 1982）として再設定している。この土器の位置付けに関しては，円筒形でかつ平底化したものをヤトコロ式土器とするが，改めてその土器属性の再抽出・分析を行い，水ノ江氏の指摘するように再検討を行う必要がある（水ノ江 1998）。その後，手向山式土器が続く。これらの大分編年の押型文土器群は，西北九州の視点に立てば外来系土器で，主に東九州を中心に北部九州・西九州一円に分布し，九州全域に出土例が見られる。

縄文時代早期中葉，西北九州では，円筒形押型文土器由来の狭脚な平底を有する押型文土器である在地系の百花台Ⅰ～Ⅲ式土器が分布する。一方，本州からの強力な伝播を受けて東九州方面から西北九州に伝播・流入した土器は，外来系の押型文土器と言える搬入品や模倣品といった客体の土器が稲荷山式土器以降に到来していたようである。

それでは，百花台遺跡群を除く百花台Ⅰ式土器の主な分布であるが，南島原市下末宝遺跡・権現脇遺跡，雲仙市石原遺跡などを中心として西北九州に分布する。長崎県ではないが隣接する佐賀県鹿島市不動遺跡では，百花台Ⅰ式もしくはⅡ式土器の山形文様を有する狭脚な平底が出土している。

③　百花台Ⅱ式土器

百花台Ⅱ式土器は，2015年，雲仙市国見町の百花台遺跡群で発見されたもの（**第３図18・19**）を標

式土器として設定した（大坪 2015a）。百花台Ⅱ式土器は，百花台Ⅰ式土器に後続する時期のもので，大分編年の下菅生Ｂ式土器に併行するものである。器形は，百花台Ⅰ式土器に比べて深鉢化が進み，円筒形の面影が見られなくなる。口縁部は外反し，中には「く」の字状に強く外反するものもある。胴部より下半は，百花台Ⅰ式土器に比べて底部に向かいすぼまる。器壁も弘法原式土器程の厚さのものから，さらに薄手のものが見られ，厚さは，１㌢程度のものや薄手のものまである。口唇部の形態は，丸みがあるものと面取りするものとがある。口縁部から底部にかけて残る完形のものは出土していないが，東九州の伝播の影響のために弘法原式土器・百花台Ⅰ式土器よりは底部の径が小さい狭脚な平底と考えられる。文様は，下菅生Ｂ式土器の影響を受けたためか，土器外面に楕円文・山形文を縦方向や斜方向に施文するものが多い。ただし，一部に施す平行文やその他の文様を横方向に施すものがある。施文具を縦方向に施文するのが多いのは，先述した通り口縁部の外反が強いためであろう。また楕円文の文様の大きさは，百花台Ⅰ式土器に比べてやや大きくなるが，百花台Ⅲ式土器に比べると小粒である。土器内面には，全面無文のもの，口縁部上部に山形文・楕円文を横方向に施すもの，口縁部上部に百花台Ⅰ式土器より長めの原体条痕を施すもの，それに加えて下に山形文・楕円文を施すものがある。口唇部にも山形文や稲荷山式土器の属性と思われるような刻目の文様を施すものもある。百花台Ⅱ式土器は，東九州系の下菅生Ｂ式土器と共伴して出土することがある。

百花台Ⅱ式土器も器形の面で在地化しているといえるが，文様は下菅生Ｂ式土器に類似する。それは弘法原式・百花台式土器は押型文を採用しているものの，本州・東九州で守られてきた横走施文の方法の規範を早々に破り縦・斜方向施文を用いていた型破りな土器であった。一方で，百花台Ⅱ式土器以降になると下菅生Ｂ式土器と共通する施文方法を受け入れはじめる。それは在地色の強かった弘法原式土器や百花台Ⅰ式土器から東九州からの文化を受容しだした可能性を現している。

また，百花台遺跡群を除く百花台Ⅱ式土器の主な分布は，南島原市下末宝遺跡・権現脇遺跡，雲仙市弘法原遺跡・松尾遺跡，五島市茶園遺跡，佐世保市岩谷口岩陰遺跡などを中心として西北九州に広く分布する。

④　百花台Ⅲ式土器

百花台Ⅲ式土器は，2015年，雲仙市国見町の百花台遺跡群で発見されたもの（**第３図20～22**）を標式土器として設定した（大坪 2015a）。百花台Ⅲ式土器は，百花台Ⅱ式土器に後続するもので，大分編年の田村式土器に併行する時期である。百花台Ⅲ式土器の器形は，口縁部が大きく開くものと口縁部が「く」の字状に強く折れるものがある。この「く」の字状に強く折れる特徴は，大分編年の田村式土器と属性を異にする。胴部から底部に向かうにつれて非常にすぼまる。口縁部から底部まで残るものは出土していないが，非常に狭脚な平底である。口唇部の形態は，丸味のあるものと面取りするものとがある。その他，深鉢のバリエーションに加えて鉢の器形がよくみられる。確実に円筒形土器の伝統は絶たれている。文様は，土器外面に粗大な楕円文や縦方向の山形文を施す。また，口縁部内面の原体条痕は長大化する。口唇部に楕円文や山形文の押型文様を施すものもある。百花台Ⅲ式土器は，田村式土器が共伴して出土することもある。

また，百花台遺跡群を除く百花台Ⅲ式土器の主な分布であるが，南島原市下末宝遺跡，雲仙市龍王遺跡・松尾遺跡などを中心として西北九州に広く分布する。

⑤　手向山式土器以降について－権現脇遺跡の資料をもとに－

百花台Ⅲ式土器に続く縄文時代早期後半の土器は，長崎県権現脇遺跡にその変遷を窺える資料（**第**

４図）がある（大坪 2006）。まず当遺跡の手向山式土器は，便宜上古段階・中段階・新段階と３段階に時期区分できる。手向山式土器の古段階としたものは，施文で山形文様が間延びしており，中段階になると施文が雑になり退化する。新段階には，ミミズばれ文を付し押型文に変わり綾杉状沈線を施す。その後，妙見・天道ヶ尾式土器は，平栫式土器が口縁部口唇に刻目を施すのに対して刺突列点を施す。また，突帯を施し，その下に沈線文を施す。後続する時期の平栫式土器になると器壁が厚さを増して，二重突帯文を貼り付け，突帯に刺突列点文を施す。その他，沈線文を施す。

この様に権現脇遺跡では，手向山式土器，妙見・天道ヶ尾式土器，平栫式土器と時間的に連続して出土している。長崎県内では，江迎町広久保遺跡で手向山式土器がまとまって出土している。

３．西北九州における貝殻文円筒形土器と押型文土器の編年と総括－長崎編年の提唱－

以上のように古い時期の土器から順を追って各型式の土器について詳細に説明した。今回，2015年に筆者が示した編年を再考するにあたり，新たに畑中遺跡のタイプの一野式土器のものを，従来の一野式土器から細分して，一野Ⅰ式土器と設定した。そのため，従来の一野式土器としていたものを，一野Ⅱ式土器と呼ぶことにした。このことから西北九州における縄文時代早期前半から中葉における土器編年は，小ヶ倉式土器→一野Ⅰ式土器→一野Ⅱ式土器→下末宝式土器→弘法原式土器→百花台Ⅰ式土器→百花台Ⅱ式土器→百花台Ⅲ式土器→手向山式土器（**第１表**）という流れになることが明らかになった。東九州の押型文土器の編年をいわゆる大分編年と呼ぶのであれば，この西北九州の縄文時代早期前半から中葉の土器編年を長崎編年と呼ぶこともできよう。ただし，長崎県内において，一部県北では，一野Ⅰ式土器以降から押型文土器の時期にかけて北部九州や西九州的な土器の様相が見られる傾向がある。それは，立地的にそれらの地域に近接するためと考えられる。

また，西北九州の押型文土器は，平底の器形を基本とした在地系土器が用いられている点や，文様も全国的に黄島式土器や早水台式土器の時期は，一般的に横走施文であるが，この地域では他地域に先行して，弘法原式土器では斜走施文を，百花台Ⅰ式土器では，縦走施文をいち早く用いている点が特徴であると言えよう。

今後の西北九州における縄文時代早期編年の展望と課題には，大きく２点ある。１点目は，小ヶ倉式土器と一野Ⅰ式土器の間には，時間的な空白が存在するようであるため，そこに存在していた土器型式を探す必要がある。もう１点は，縄文時代早期初頭から小ヶ倉式土器以前にかけての土器編年が確立されていないため，今後さらに早期の長崎編年の補強と検討を重ねていく必要がある。とは言え，ようやく長崎県における縄文時代早期前半から中葉にかけての編年の骨子ができたといえ，本稿が，長崎県を中心とした西北九州の編年の検討・研究を行う際の指針となれば幸いである。

【謝辞】

本稿の執筆に際して安楽哲史・浦田和彦・遠部慎・竹田ゆかり・辻田直人・宇土靖之・中尾篤志・古門雅高・東貴之・本多和典・山口勝也・山下大輔・渡邊康行諸氏に御教示・御協力を賜った。記して厚く御礼を申し上げる次第である。

【古門雅高氏と渡邊康行両氏への還暦のお祝い】

古門氏と渡邊氏におきましては，このたび還暦を迎えられ，心よりお喜び申しあげます。

古門氏におきましては，長崎県新幹線文化財調査事務所長として，竹松遺跡を中心とした新幹線に係る調査の責任者として，今もなお第一線でご活躍されているご様子には，敬服いたすばかりでございます。古門氏には，小原下遺跡の縄文集落の調査や竹松遺跡の前期古墳・豪族居館跡や古代大型建物の調査でご指導いただきました。また西海考古７号の執筆の折に入念な文章のご指導を頂き文章力の鍛錬となりました。その後の論文を書く上で欠かせ

ないものとなっております。深く感謝申し上げます。

渡邊氏におきましては，十数年前に㈱埋蔵文化財サポートシステムへ入社した折，経験浅い私に門前遺跡の調査でご指導頂き，その後，権現脇遺跡や小原下遺跡でも調査から報告書作成に至るまで大変，手厚くご指導・ご鞭撻頂きました。諫早の小野条里遺跡の石畳状の集石の調査におきましては渡邊氏が縄文説を，私が古墳説で激しく議論させていただきました。今となっては遺構が縄文時代であったと得心していますが，調査において，きちんと調べ，論を展開し，お互いの議論を重ねることの重要性を知りました。いずれにしても私の発掘調査の方法に良い意味で影響を受けているのには間違いありません。深くお礼申し上げます。

両氏には，常日頃の並々ならぬご指導とご厚情に心からの感謝と敬意を込めまして，本稿を謹呈させて頂きます。両氏には，いつまでもご健康であられますように，お祈りいたします。

【註】

註１　1997年，水ノ江和同氏は，百花台遺跡の縄文時代晩期土器のものに対して「百花台段階」という名称で設定されたことがある。本稿で設定した百花台Ⅰ～Ⅲ式土器とは，縄文時代早期の土器に命名しているため百花台段階とはまったく異なるものである。

【引用・参考文献】

麻生　優　1968『岩下洞穴の発掘記録』佐世保市教育委員会

相美伊久雄　2015「鹿児島県における貝殻文円筒形土器と押型文土器の様相」『貝殻文と押型文』平成26年度宮崎考古学会研究会資料集　宮崎考古会県南例会実行委員会

今村結記　2012「平底押型文土器に関する一考察」『研究紀要　縄文の森から』第５号　鹿児島県埋蔵文化財センター

上杉彰紀　2004「「別府原式土器」とその周辺」『九州縄文時代早期研究ノート』第２号　九州縄文時代早期研究会

上杉彰紀　2005「「政所式土器」研究の現状と課題」『九州縄文時代早期研究ノート』第３号　九州縄文時代早期研究会

浦田和彦　1992『一野遺跡』長崎県有明町教育委員会

大坪芳典　1998「野田遺跡出土の川原田式土器」『おおいた考古』第９・10集　大分県考古学会

大坪芳典　1998「早水台遺跡の押型文土器－表面採集資料の紹介－」『Fragments』創刊号　さくら研究会

大坪芳典・遠部　慎・川内野篤　1998「早水台遺跡採集資料（井上コレクション）の紹介」『Fragments』創刊号　さくら研究会

大坪芳典・遠部　慎　1999「早水台式土器の新例－竹田高校収蔵資料の提起する問題－」『南九州縄文通信』No.13　南九州縄文研究会

大坪芳典・遠部　慎　1999「東九州における押型文土器の様相－黒山遺跡出土土器の分析－」『第11回人類史研究会発表資料』人類史研究会

大坪芳典　2000「大分県の押型文土器の一例－別府市尾崎園・野田遺跡について－」『Fragments』第２号　さくら研究会

大坪芳典・遠部　慎　2000「早水台式土器の器種－屈曲する胴部に関する覚書－」『別府大学付属博物館だより』No.43　別府大学付属博物館

大坪芳典　2003「戦場ヶ谷遺跡の押型文土器」『利根川』24・25　利根川同人会

大坪芳典　2006「縄文時代早・前期の遺物」『権現脇遺跡』長崎県深江町（現南島原市）教育委員会

大坪芳典　2007「九州における押型文土器様式の壺形土器－南島原市下末宝遺跡・島原半島の資料をもとに－」『西海考古』第７号　西海考古同人会

大坪芳典　2009「環境に影響を受けた九州の押型文土器－円筒形押型文土器・壺形土器について－」『南九州縄文通信－新東晃一代表還暦記念論文集（上）－』No.20　南九州縄文研究会

大坪芳典　2012「島原半島における押型文土器研究の再考」『九州縄文時代早期研究会』第５号　九州縄文時代早期研究会

大坪芳典　2015a「西北・西九州における貝殻文円筒形土器と押型文土器の様相」『貝殻文と押型文』平成26年度宮崎考古学会研究会資料集　宮崎考古会県南例会実行委員会

大坪芳典　2015b「「西北・西九州における貝殻文円筒形土器と押型文土器の様相」の意義について」『肥前史談叢』肥前史談叢の会（筆者作成ホームページ http:www5.hp-ez.com/hp/otsubo01）

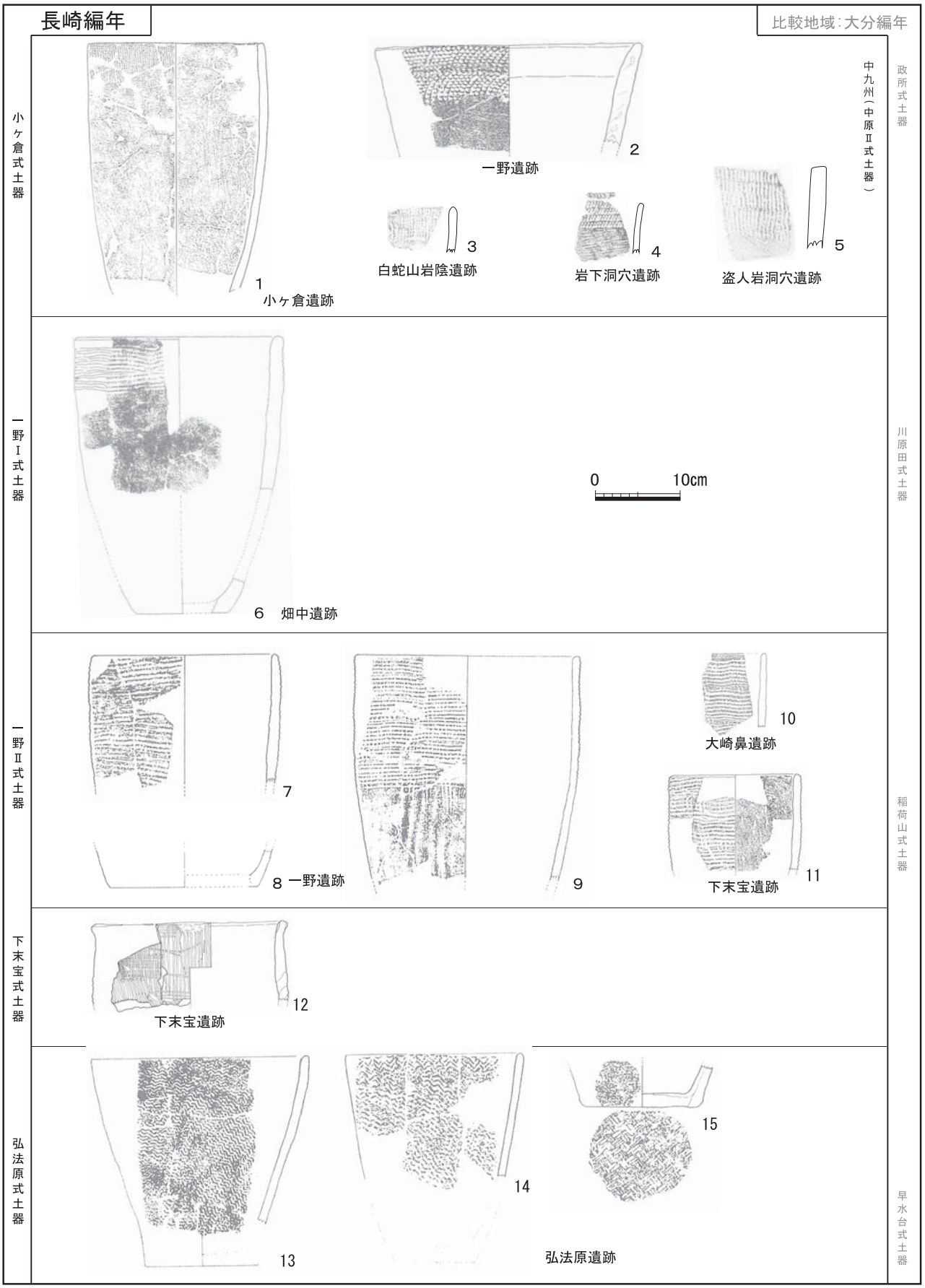
大野安生・松川憲毅　2000「岩名遺跡」『黒丸遺跡ほか発掘調査概報』Vo1. 2　1997～1999　大村市教育委員会
岡本　勇　1966「尖底土器の終焉」『物質文化』８　物質文化研究会
岡本東三　2015「九州島における押型紋土器の出現とその前夜－円筒形貝殻紋土器と押型紋土器の相克－」『高野晋司氏追悼論文集』高野晋司氏追悼論文集刊行会
遠部　慎　2000「ヤトコロ式土器と出水下層式土器の関係」『九州旧石器』第４号　九州旧石器文化研究会
遠部　慎　2007「北部九州における縄文時代草創期～早期前半の土器群とC14年代測定」『九州における縄文時代早期前葉の土器様相』第17回九州縄文研究会福岡大会　九州縄文研究会
賀川光夫　1960「早期縄文式土器の新資料－大分県直入郡荻町政所式土器出土－」『考古学雑誌』第46巻第３号　日本考古学会
賀川光夫　1965「縄文文化の発展と地域性－九州東南部－」『日本の考古学』２　河出書房新社
賀川光夫　1977「熊本県の円筒形土器」『考古学論叢』４　別府大学考古学研究会
賀川光夫　1982「押型文土器の編年－縄文早期から前期への系譜」『政所馬渡』別府大学博物館
金丸武司　2004「宮崎における縄文時代早期前半の土器群－別府原式土器の設定－」『宮崎考古』第19号　宮崎県考古学会　木崎康弘　1996「第Ⅴ章総括」『蒲生・上の原遺跡』熊本県教育委員会
木崎康弘　1998a「中原式土器について」『九州縄文土器編年の諸問題－早期後半土器の現状と課題－』九州縄文研究会
木崎康弘　1998b「中九州西部押型文土器の編年」『九州の押型文土器－論攷編－』縄文集成シリーズ３　九州縄文研究会
九州縄文研究会　2007『九州における縄文時代早期前葉の土器様相』第17回九州縄文研究会福岡大会　九州縄文研究会
黒川忠広　2002『南九州貝殻文系土器』Ⅰ～鹿児島県～　南九州縄文研究会
黒川忠広　2002『南九州貝殻文系土器』Ⅱ～宮崎・熊本・大分県～　南九州縄文研究会
黒川忠広　2003「南の押型文土器」『利根川』24・25　利根川同人会
桑畑光博・上田　耕・雨宮瑞生　1993「貝殻円筒形土器と押型文土器の関係－宮崎・鹿児島両県における出土状況の検討－」『南九州縄文通信』No. 7　南九州縄文研究会
甲野　勇　1976『縄文土器の話』学生社
渋谷　格・徳永貞昭・パレオラボ AMS 年代測定グループ　2011『小ヶ倉遺跡・入道遺跡・九郎遺跡』佐賀県教委
新東晃一　1996「もう一つの縄文文化－南九州の縄文草創期・早期の特徴－」『南九州縄文通信』No.10　南九州縄文研究会
片岡宏二　1998「宝満川流域の縄文土器概観」『干潟向畦ヶ浦遺跡』小郡市教育委員会
坂本嘉弘　1995「西日本の押型文土器の展開－九州からの視点－」『古文化談叢』第35集　九州古文化研究会
坂本嘉弘　1998「東九州の押型文土器の現状と課題」『九州の押型文土器―論攷編―』縄文集成シリーズ３　九州縄文研究会
重留康宏　2003「宮崎県西部における縄文早期遺跡の概観－出土土器を中心にして－」『九州縄文時代早期研究ノート』第１号　九州縄文時代早期研究会
重留康宏　2004「前原西式土器雑考」『九州縄文時代早期研究ノート』第２号　九州縄文時代早期研究会
高野晋司　1983『弘法原遺跡』吾妻町教育委員会
高木正文　1977「九州の円筒土器とその編年の問題」『考古学論叢』４　別府大学考古学研究会
田川　肇・副島和明・伴耕一朗　1988『百花台広域公園建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎県教育委員会
田川　肇　1994『県道国見雲仙線改良工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎県教育委員会
多々良友博　1984「九州地方の押型文土器－文様構成から見たその動態－」『金立開拓遺跡』佐賀県教育委員会
橘　昌信　1980『大分県二日市洞穴発掘調査報告書』玖珠郡九重町教育委員会
辻田直人・竹中哲郎　2003『石原遺跡・矢房遺跡』国見町教育委員会
土橋啓介・渡邊康行　2001『大崎鼻遺跡』布津町教育委員会
堂込秀人　2003「南九州における押型文土器文化期の存在」『利根川』24・25　利根川同人会
林　潤也　2007「福岡県における縄文時代早期前葉の土器相」『九州における縄文時代早期前葉の土器相』第17回九州縄文研究会福岡大会　九州縄文研究会
古門雅高・渡邊康行　1998『広久保遺跡』長崎県江迎町教育委員会

本多和典　2005『下末宝遺跡・上畦津遺跡』深江町教育委員会
水ノ江和同　1997「北部九州の縄文後・晩期土器」『縄文時代』８　縄文時代文化研究会
水ノ江和同　1998「九州における押型文土器の地域性」『九州の押型文土器－論攷編－』縄文集成シリーズ３　九州縄文研究会
水ノ江和同　2012『九州縄文文化の研究－九州からみた縄文文化の枠組み－』雄山閣
村川逸郎　1992『弘法原遺跡』吾妻町教育委員会
村川逸郎　1994『畑中遺跡』島原市教育委員会
森醇一朗　1974『白蛇山岩陰遺跡』
渡邊康行　1999「一野式・弘法原式土器の設定をめぐって」『西海考古』創刊号　西海考古同人会
綿貫俊一　1999「九州の縄紋時代草創期末からの早期の土器編年に関する一考察」『古文化談叢』第42集　九州古文化研究会
八木澤一郎　1997「上野原遺跡第３工区　国分市」『鹿児島の縄文文化』国分上野原シンポジウム実行委員会
山崎純男・平川裕介　1986「九州の押型文土器」『考古学ジャーナル』267　ニューサイエンス社
山下大輔　2005「下剥峯式および桑ノ丸式土器の再検討」『南九州縄文通信』No.16　南九州縄文研究会
山下大輔　2012「宮崎の中原式土器」『九州縄文時代早期研究会』第５号　九州縄文時代早期研究会
山下大輔　2015「南九州における押型文土器研究の現状と課題」『貝殻文と押型文』平成26年度宮崎考古学会研究会資料集　宮崎考古会県南例会実行委員会
山下大輔　2015「「論文「西北・西九州における貝殻文円筒形土器と押型文土器の様相」の意義について」を読んでのコメント」『肥前史談叢』肥前史談叢の会

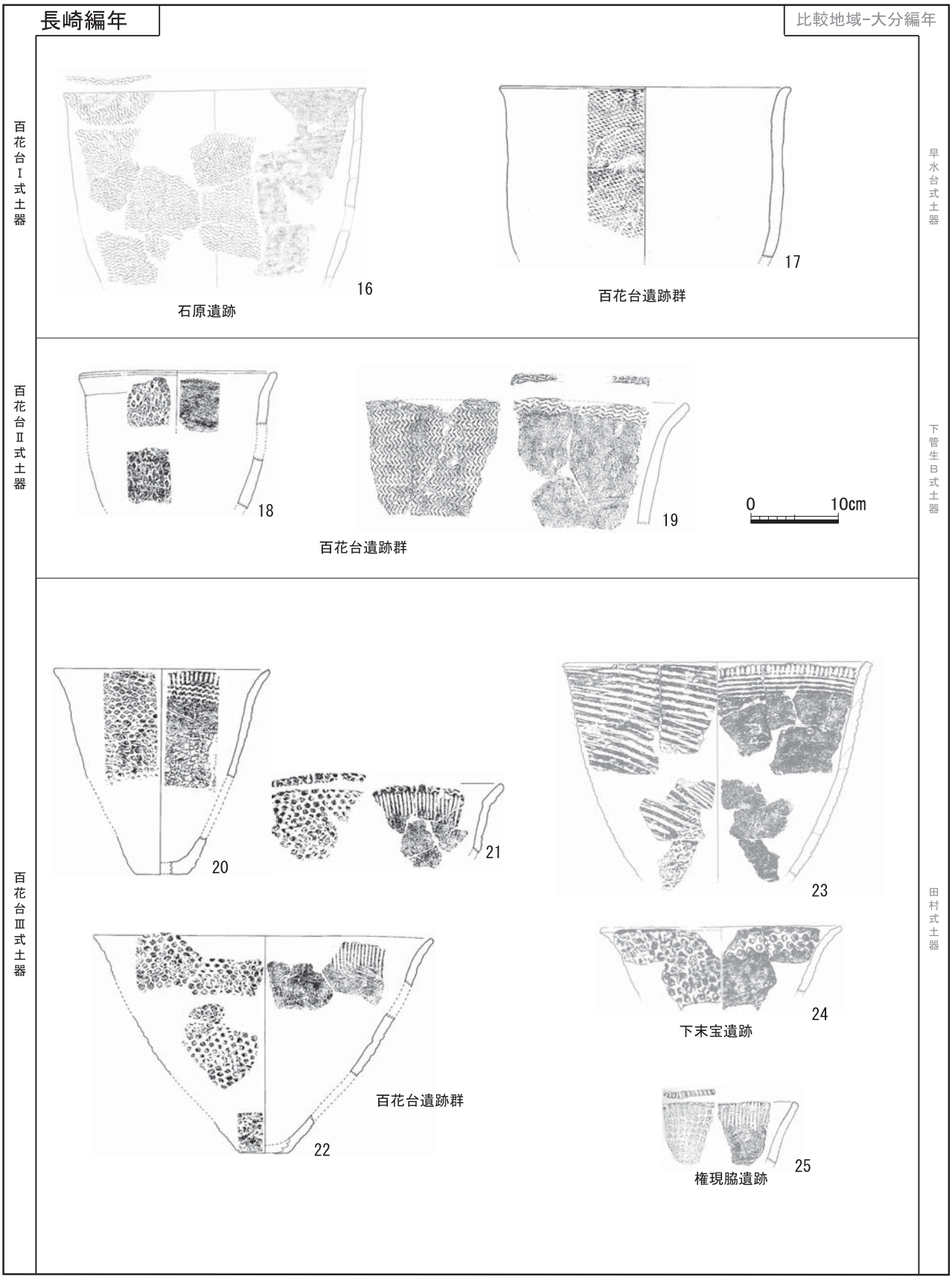
第１図　西北九州における貝殻文円筒形土器・押型文土器に関する主要遺跡

第１表　西北九州編年比較表

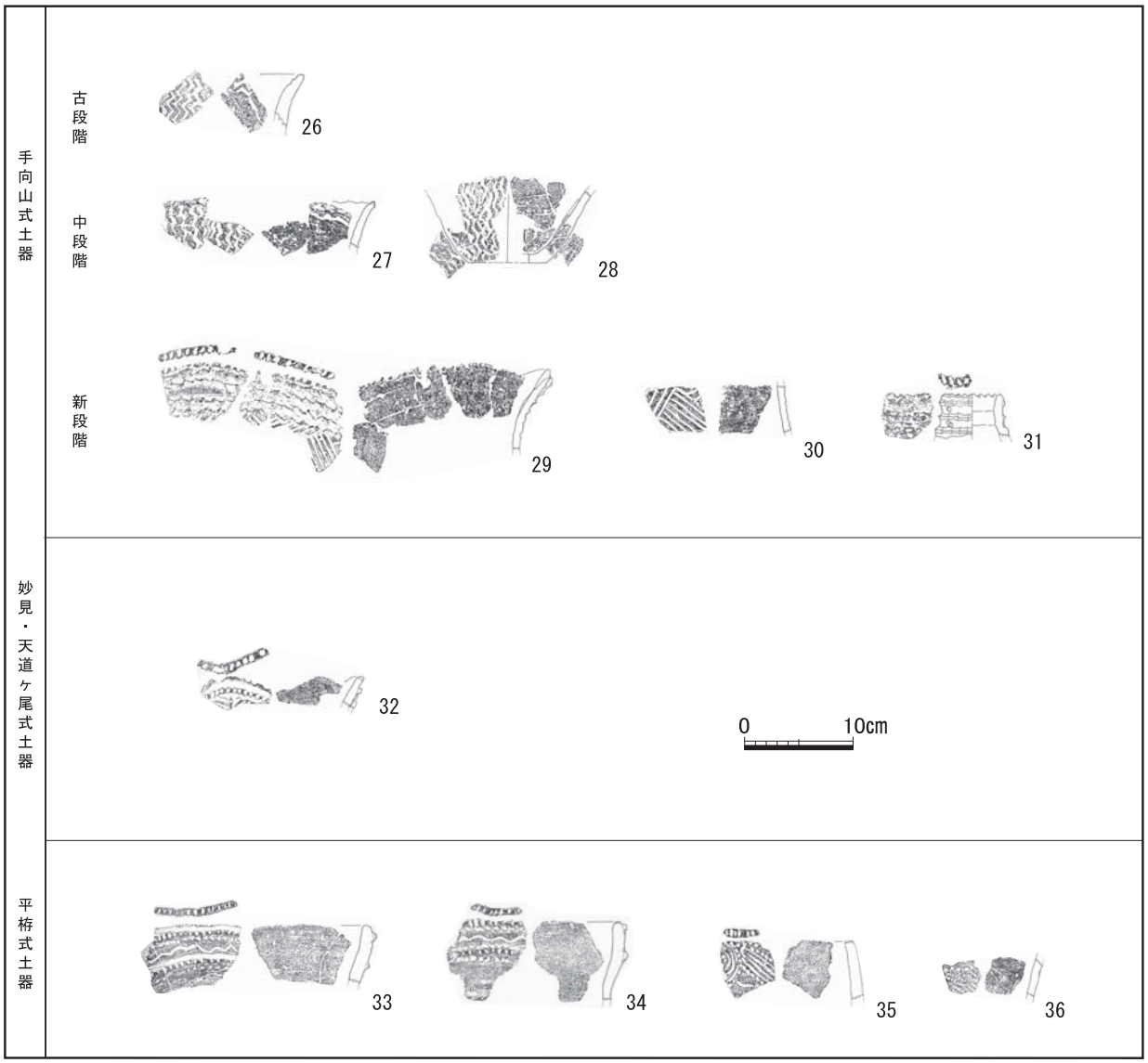
西北・西九州		東九州（大分編年）
貝殻文円筒形土器	小ヶ倉式土器	政所式土器
	＋	
	一野Ⅰ式土器	川原田式土器
	一野Ⅱ式土器	稲荷山式土器
	下末宝式土器	
円筒形押型文土器	弘法原式土器	
狭脚な平底の押型文土器	百花台Ⅰ式土器	早水台式土器
	百花台Ⅱ式土器	下菅生Ｂ式土器
	百花台Ⅲ式土器	田村式土器
		（ヤトコロ式土器）
	手向山式土器	手向山式土器



第２図　西北九州の貝殻文円筒形土器と押型文土器の編年表①



第３図　西北九州の貝殻文円筒形土器と押型文土器の編年表②



第４図　西北九州の押型文土器以降の編年表③（権現脇遺跡出土遺物）

春日式土器の分類・変遷と長崎市深堀遺跡出土資料の検討

土　岐　耕　司

はじめに

南九州を中心に分布が知られる縄文時代中期春日式土器については，これまでも盛んに研究が行われてきたものの，他型式のものに比べると出土量が必ずしも豊富とは言えず，その系統的な問題や文様・器形の変遷，胎土に混入される滑石の有無について等，未解明となっている部分が多い。しかしながら近年，春日式土器を出土する遺跡が増加し，これまでの研究成果を補完する，或いは再検討を迫るような資料が揃ってきたようにも思われる。

平成13年度に実施された長崎市深堀遺跡の発掘調査（註１）では，春日式土器の中でも出土率の低い「滑石混入土器」が，出土した春日式土器の主体を占めると言って良いほど出土した。滑石産地である九州西北部との関連が囁かれながらも，その資料の乏しさからこれまで詳細が明らかになることがなかった土器群である。

筆者は幸運にも，この発掘調査・整理作業に多少の職責を持って携わることができた。多くの出土土器片を観察していくにつれ，器形や文様について，ぼんやりとした分類イメージを抱くようになったが，その当時の筆者には，春日式土器自体についての予備知識が殆どなく，業務関係者の方々のみならず県内外の諸先輩方からのご指導を，文字通り一から賜ることとなる。

事の重要性を認識するに至り，筆者は改めて九州地域における春日式土器の集成を試みた。鹿児島・宮崎・熊本・長崎・福岡の５県の調査報告書の中から，４県47遺跡の出土資料を検討した結果（註２），主に器形・文様の面から何パターンかの典型を，筆者なりに見出すことができた。この想定は，東和幸氏の論考（東 1999）から派生したところが大ではあるのだが，深堀遺跡整理作業中に筆者が抱いたイメージと矛盾しなかった。

本稿では，この器形・文様間の関連性から春日式土器の変遷を想定し，その中で深堀遺跡出土資料がどのような位置付けをなされるべきかを考えてみたい。

１．春日式土器研究略史

春日式土器は，鹿児島市春日町遺跡出土の土器群を標識とする。1952・53年の発掘調査において出土した土器群について，調査者である河口貞徳氏・河野治雄氏が本型式名で報告している。この段階では縄文前期後半に位置付けられていたが，その後，田中良之氏・長野真一氏らによる瀬戸内地方の船元・里木式土器との関係を視野に入れた研究成果から，中期に位置付けられるようになる。1988年以降には春日式土器の細分が開始され，それに伴って系統的な問題や型式内における変遷が主要な論点となっていく。

近年になり東和幸氏は，器形・文様帯部位の変化と共伴する瀬戸内系土器との関係から，春日式土器を４つの段階に分け，また中尾田遺跡出土第Ⅲ類土器を春日式土器に後続するものとして考えた。氏の言う４段階とは即ち，①キャリパー形を呈し，口縁部から底部近くまで全面に文様を施すことが特徴である「北手牧段階」，②キャリパー形ではあるが，文様帯が口縁部に集中する「前谷段階」，③口縁部が内側に屈曲する「轟木ヶ迫段階」，④口縁部がほぼ直口する「南宮島段階」である。この段階案は東氏自身が言っているように，時間的な順序を表すものではなく，寧ろ今後の資料の蓄積を念

頭に置いたものではある。しかし，春日式土器の細分案を提示し，その変遷のベースを構築したことは，春日式土器研究学史上，非常に大きな意味を持つものと言えよう。

２．春日式の分類（私案）

分類に当たっては東氏による段階案と同様，器形の面から大別を行い，その上で主文様や特徴的な施文方法を基に細分した。なお，転載した土器実測図の縮尺は不同である。

Ａ群

キャリパー形を呈するもの。「東氏案」における北手牧段階と前谷段階に比定できる。

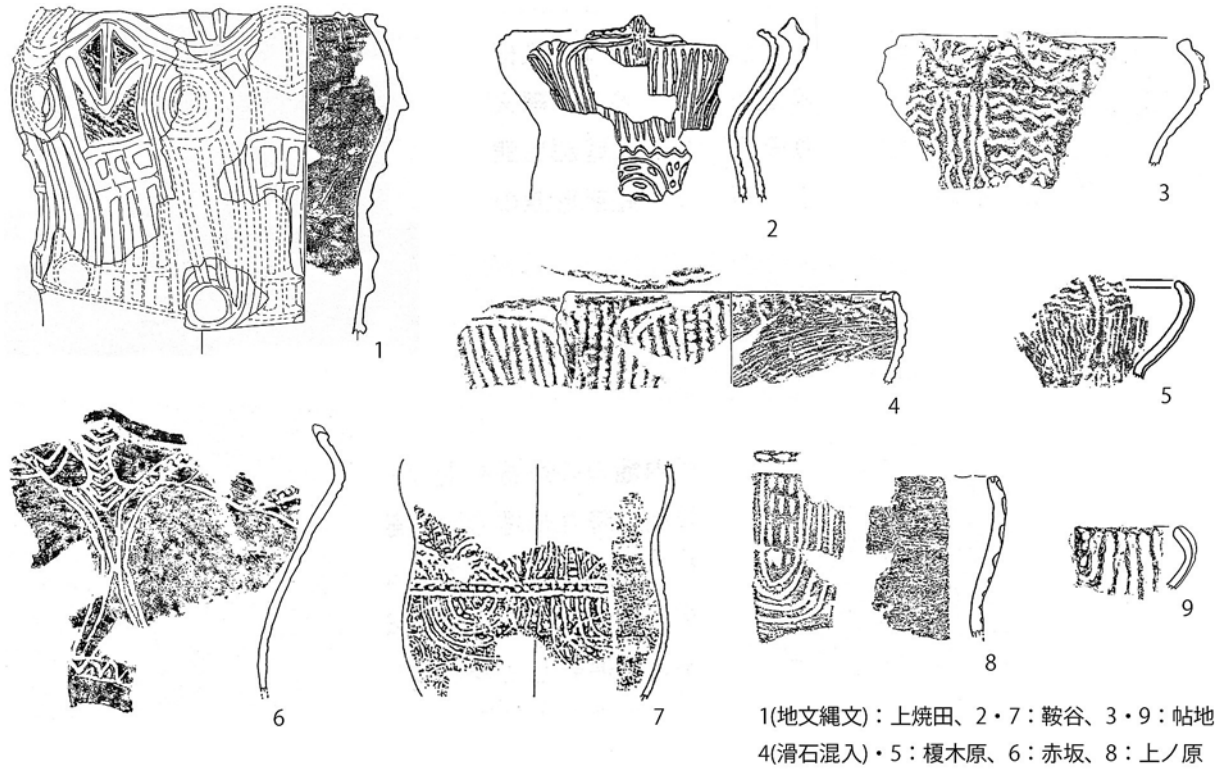
Ａ１類（第１図）

〔主体的施文要素〕沈線或いは突帯。

〔主文様・文様帯〕垂下文。この垂下文は胴部にまで及び，結果として文様帯を広くする。垂下文の下方には渦文がみられるか，垂下文自体が弧状に結束することが殆どである。沈線間には刺突文等が充填されるパターンが多い。

〔胎土中の滑石〕混入するものとしないものがみられる。

〔口縁部形態〕平口縁のものが多い。内湾度合の強い所謂「フ」字口縁もみられる。



第１図　Ａ１類土器

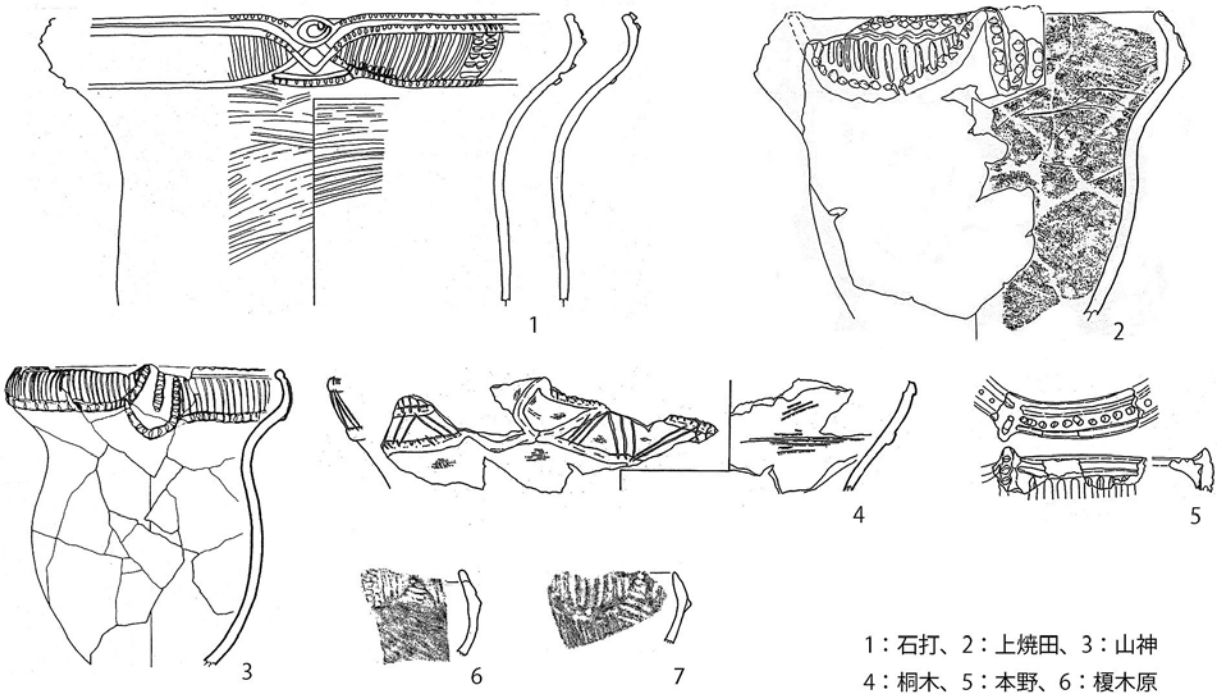
Ａ２類（第２図）

〔主体的施文要素〕充填的短沈線。

〔主文様・文様帯〕沈線や突帯間の充填文として短沈線を多用する。文様は頸部より下位に至るものはみられない。

〔胎土中の滑石〕混入するものはみられない。

〔口縁部形態〕概ね平口縁である。



第２図　Ａ２類土器

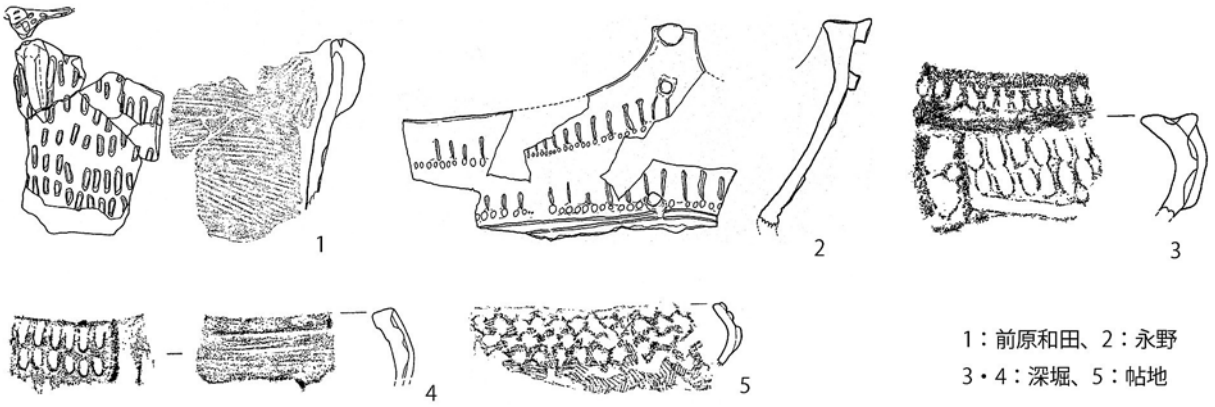
Ａ３類（第３図）

〔主体的施文要素〕充填的な刺突或いは粘土粒貼付。

〔主文様・文様帯〕数段の刺突列や貼付列を施し，文様帯は突帯で区画されるものが多い。

〔胎土中の滑石〕混入するものはみられない。

〔口縁部形態〕波状口縁と平口縁がある。



第３図　Ａ３類土器

Ａ４類（第４図）

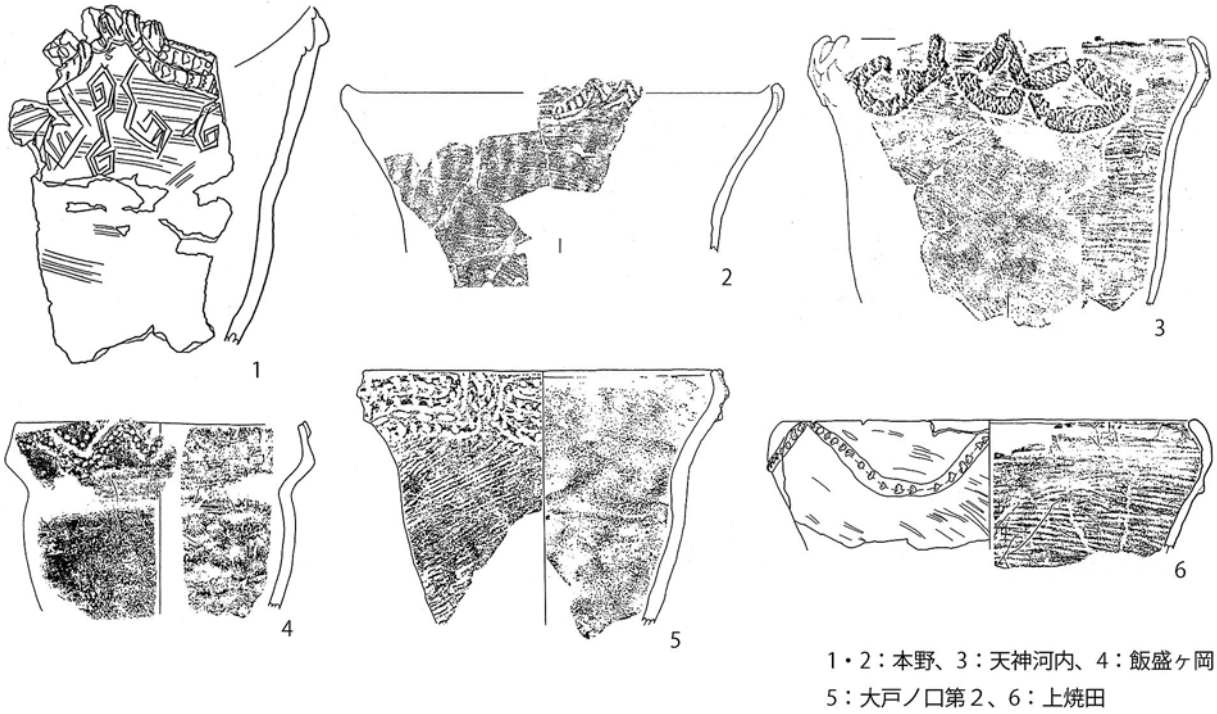
〔主体的施文要素〕刻目突帯。

〔主文様・文様帯〕太目の刻目突帯で連弧文・波状文・M字文等の曲線的なモチーフを描くものが殆どであるが，水平方向のシンプルなものもみられる。文様帯は広いものでも頸部付近まで。

〔胎土中の滑石〕混入するものはみられない。

〔口縁部形態〕波状口縁と平口縁があるが，平口縁であっても突帯が上部にはみ出て突起状となる

ものが多い。



第４図　Ａ４類土器

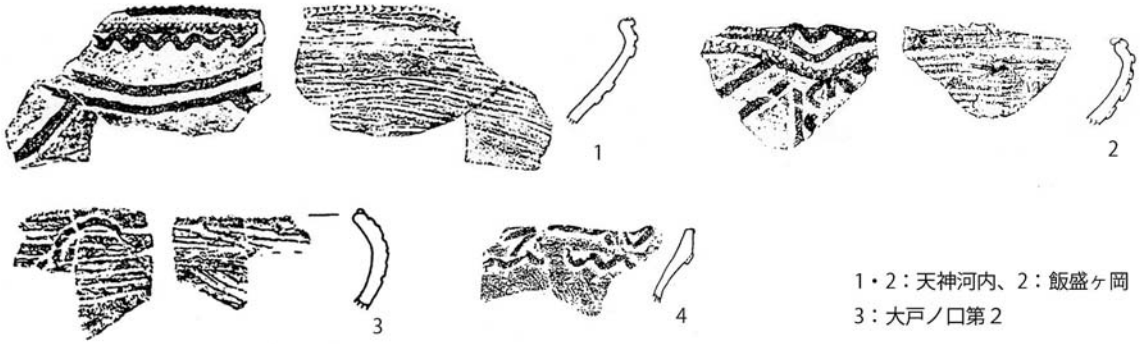
Ａ５類（第５図）

〔主体的施文要素〕細目の突帯。

〔主文様・文様帯〕突帯上の刻み（刺突）や押引は施されないか，若しくは上端や縁辺にのみ施される等，Ａ４類との間に差異がみられる。

〔胎土中の滑石〕混入するものはみられない。

〔口縁部形態〕口縁部形態はＡ４類と同様である。



第５図　Ａ５類土器

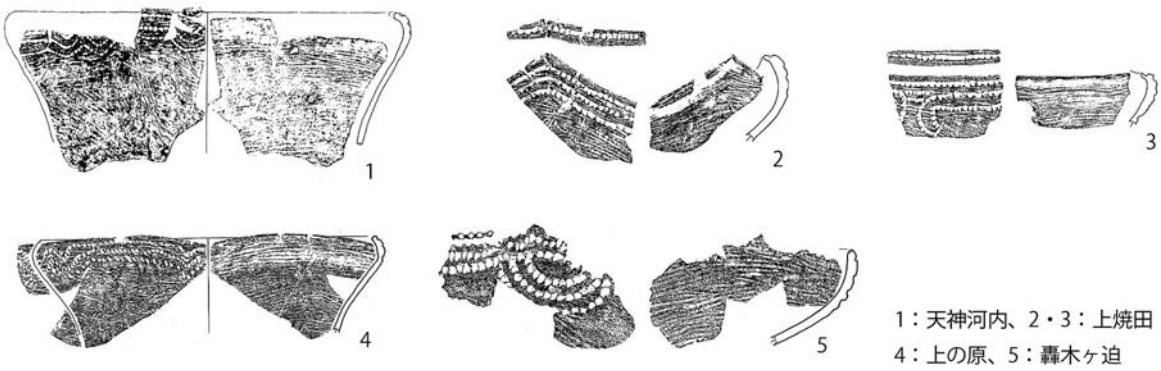
Ａ６類（第６図）

〔主体的施文要素〕押引或いは連続刺突。

〔主文様・文様帯〕直線と鋸歯状文を組み合わせた文様をもつものがみられる。文様帯は狭い。

〔胎土中の滑石〕少ないが滑石を混入するものがある。

〔口縁部形態〕波状口縁と平口縁がある。口唇面には刻みを施すものがみられる。



第６図　Ａ６類土器

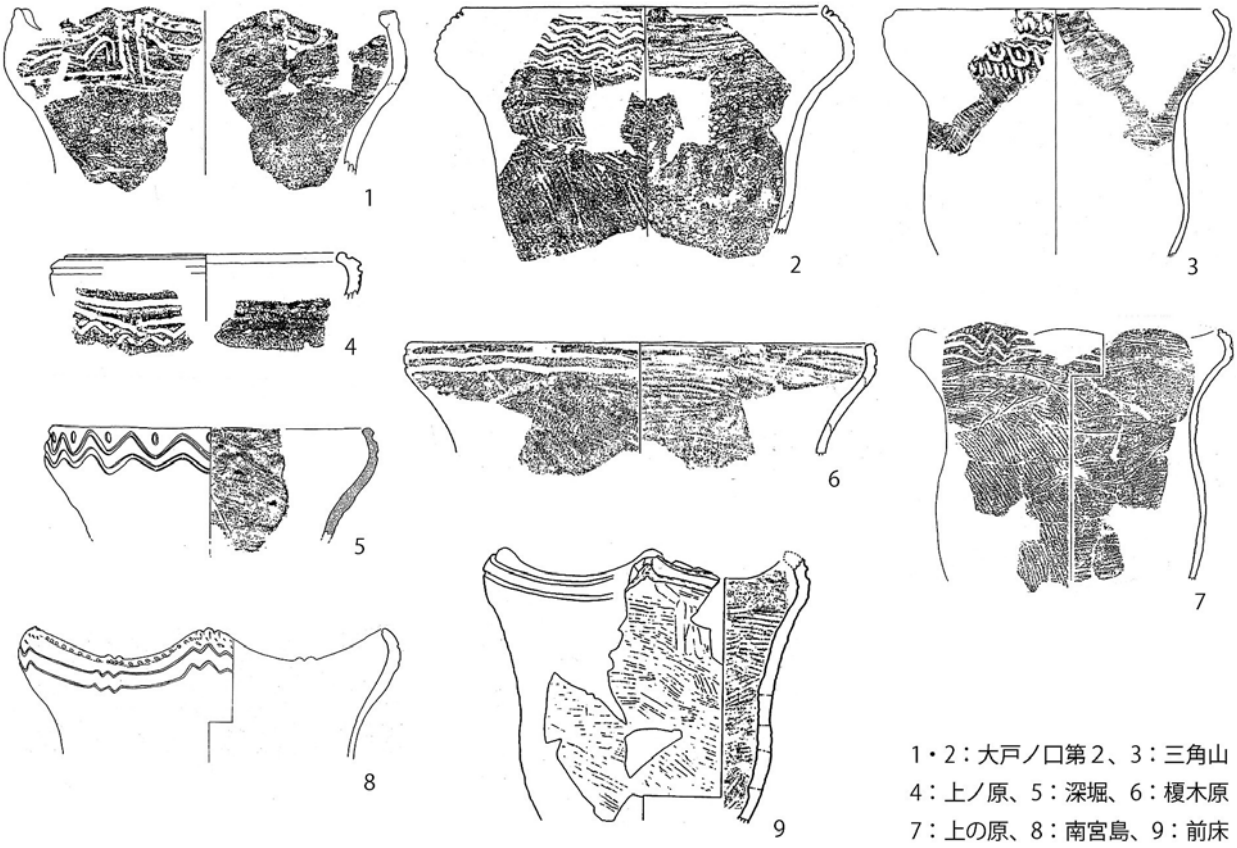
Ａ７類（第７図）

〔主体的施文要素〕沈線。

〔主文様・文様帯〕直線と鋸歯状文を組み合わせた文様をもつものがみられる。刺突を伴うものもある。文様帯は狭い。

〔胎土中の滑石〕少ないが滑石を混入するものがある。

〔口縁部形態〕波状口縁と平口縁がある。Ａ６類同様，平口縁の口唇面には刻みを施すものもみられる。



第７図　Ａ７類土器

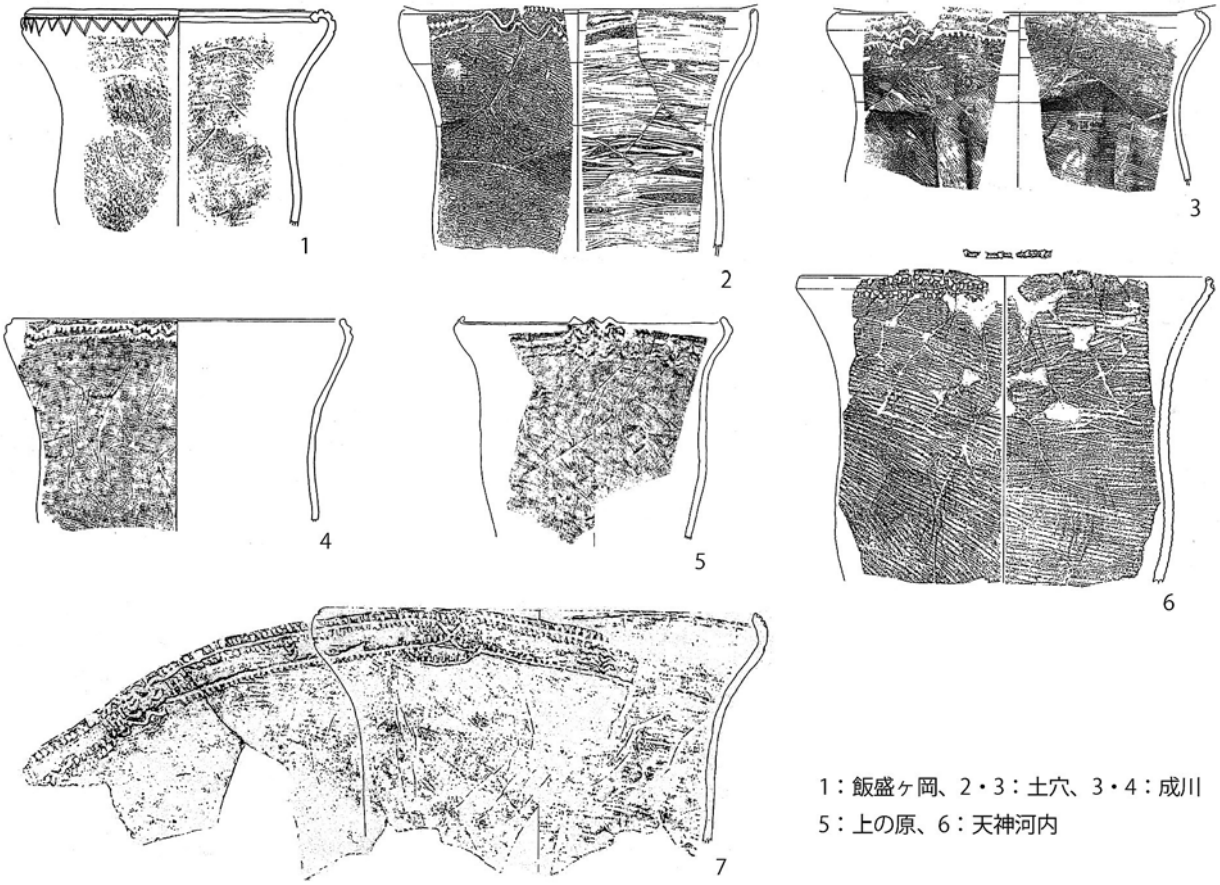
Ａ８類（第８図）

〔主体的施文要素〕沈線内・沈線上・沈線下端に刺突を施す（以下，「沈線内刺突」と呼ぶ）。

〔主文様・文様帯〕Ａ７類で散見された，直線と鋸歯状文を組み合わせた文様をもつものが非常に多い。

〔胎土中の滑石〕混入するものとしないものがみられる。

〔口縁部形態〕波状口縁は少なく，平口縁が多い。Ａ６・Ａ７類同様，口唇面には刻みを施すものがみられる。



第８図　Ａ８類土器

Ｂ群

口縁部が内側に屈折して外面に明瞭な稜をなすもので，春日式全体の中では資料数の割合が少ない一群である。筆者分類では一部に東氏による段階案の南宮島段階を含むが，概ね轟木ヶ迫段階に相当する。

Ｂ１類（第９図）

〔主体的施文要素〕押引。

〔主文様・文様帯〕口縁に沿って施文され，文様帯は屈折部より上位に限られる。

〔胎土中の滑石〕少ないが滑石を混入するものがある。

〔口縁部形態〕波状口縁と平口縁がある。

第９図　Ｂ１類土器

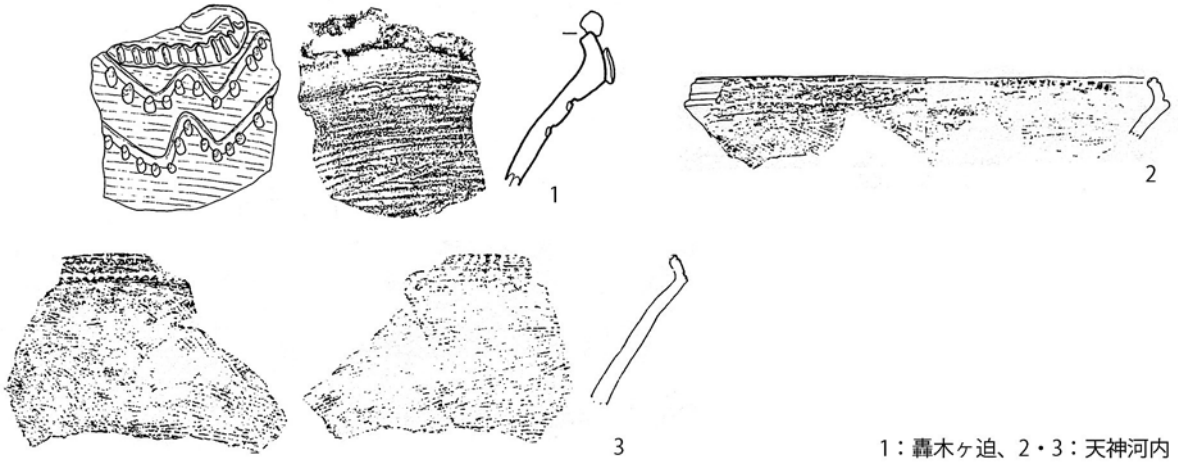
Ｂ２類（第10図）

〔主体的施文要素〕沈線内刺突。

〔主文様・文様帯〕口縁に沿って施文されるのが原則だが，文様帯が屈折部より下位に展開されるものもある。

〔胎土中の滑石〕少ないが滑石を混入するものがある。

〔口縁部形態〕平口縁である。



第10図　Ｂ２類土器

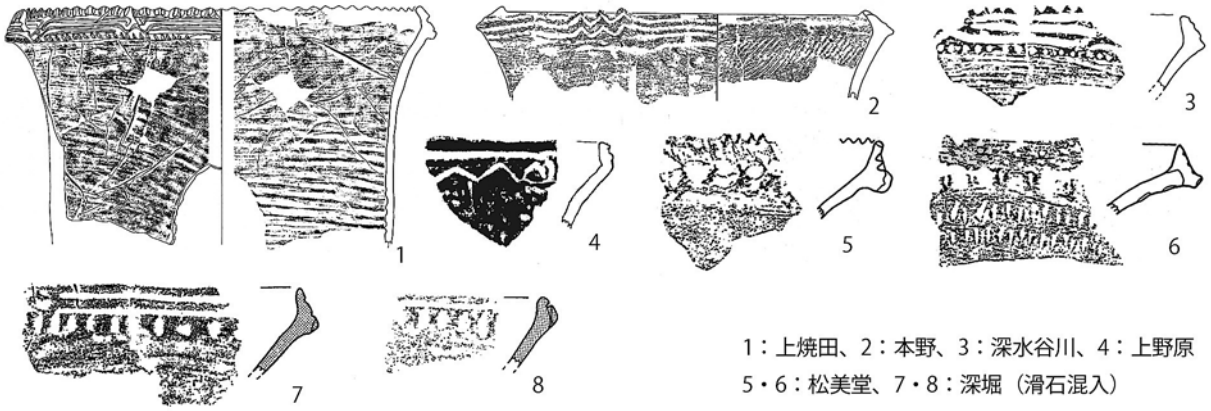
Ｂ３類（第11図）

〔主体的施文要素〕沈線と刻み。

〔主文様・文様帯〕口縁部断面が「く」の字を呈し，水平沈線或いは屈曲部に刻みを施す。

〔胎土中の滑石〕混入するものもある。

〔口縁部形態〕波状口縁はみられない。



第11図　Ｂ３類土器

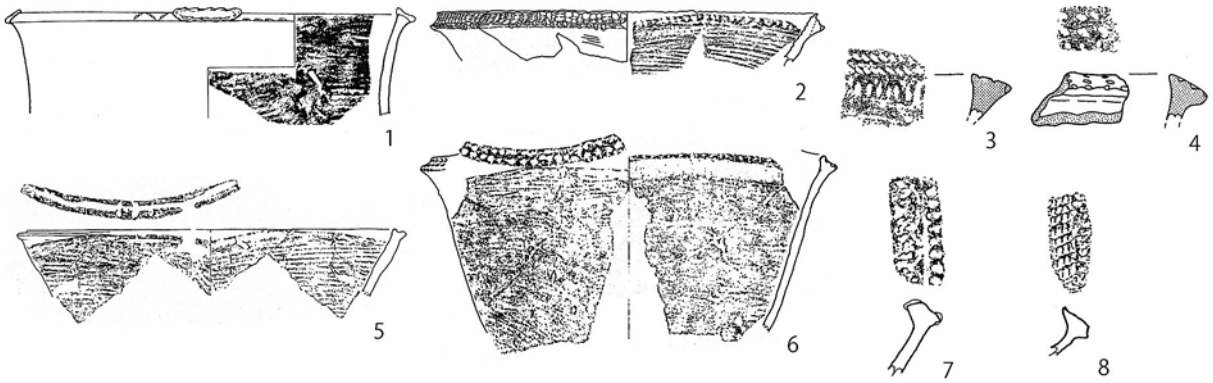
Ｂ４類（第12図）

〔主体的施文要素〕連続刺突等。

〔主文様・文様帯〕外面稜線以上が口唇面化し，そこに連続刺突等の施文を行う。Ｂ３類同様，屈曲部に刻みをもつものが多い。

〔胎土中の滑石〕少ないが滑石を混入するものがある。

〔口縁部形態〕平口縁である。



1：南宮島、2：上焼田、3・4：深堀（滑石混入）
5・6：天神河内、7・8：上の原

第12図　Ｂ４類土器

Ｃ群

口縁部が外反或いはほぼ直口するもの。概ね南宮島段階に比定できる。

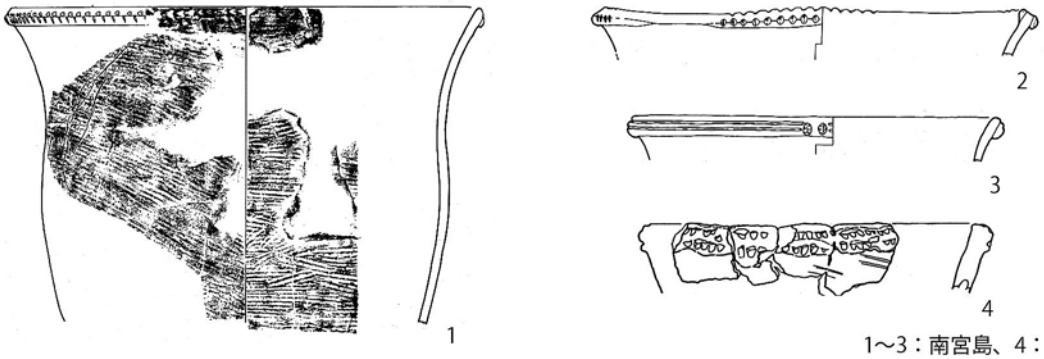
Ｃ１類（第13図）

〔主体的施文要素〕刻目突帯。

〔主文様・文様帯〕口縁部上端外面に水平に外周する刻目突帯をもつ。

〔胎土中の滑石〕少ないが滑石を混入するものがある。

〔口縁部形態〕平口縁である。



1～3：南宮島、4：本野

第13図　Ｃ１類土器

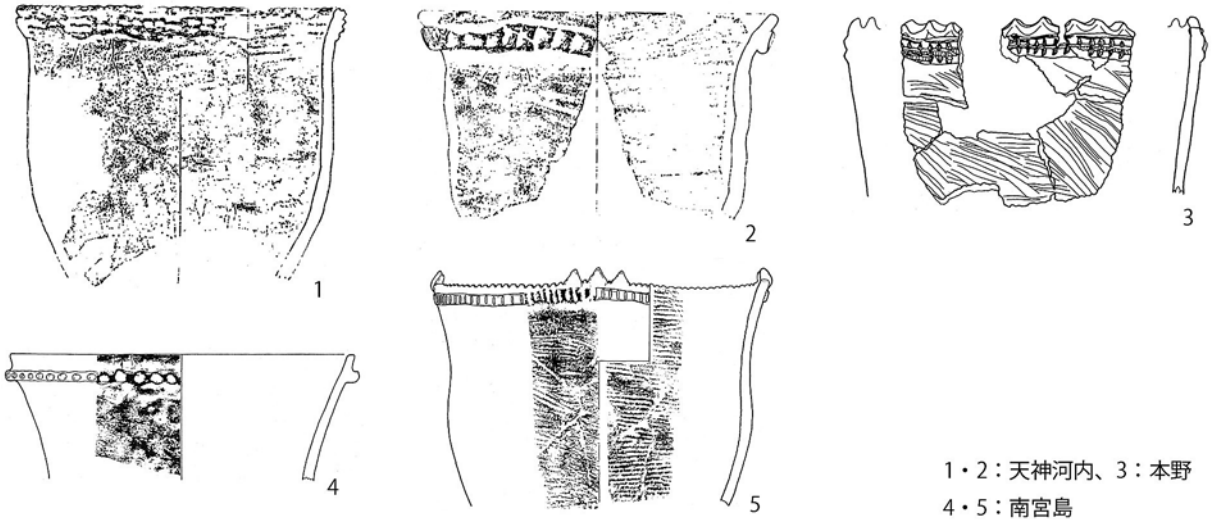
Ｃ２類（第14図）

〔主体的施文要素〕刻目突帯。

〔主文様・文様帯〕Ｃ１類より刻目突帯の位置が少し下がる。突帯は平たいものが多い。

〔胎土中の滑石〕混入するものはみられない。

〔口縁部形態〕鋸歯状口縁のものと平口縁のものがある。



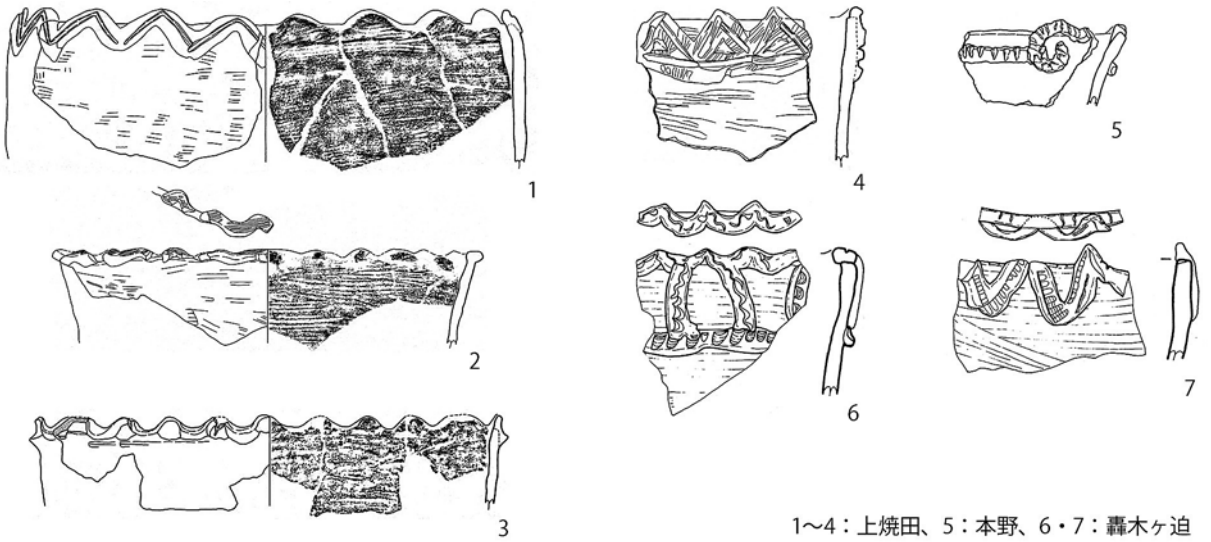
第14図　Ｃ２類土器

Ｃ３類（第15図）

〔主体的施文要素〕突帯。

〔主文様・文様帯〕鋸歯状・曲線的な突帯が上位にはみ出し，突起部を形成，或いは鋸歯状口縁になる。突帯への刻み（刺突）は密でないものがある。

〔胎土中の滑石〕少ないが滑石を混入するものがある。



第15図　Ｃ３類土器

３．各群・類の考察

「東氏案」の骨子は，器形と文様帯の変化である。即ち氏は，内傾していた口縁の直口・外反化，胴部にまで及んでいた文様帯の狭小化，という２つの大きな流れをもって，春日式という型式内における時間的な変遷を，慎重にではあるが仮想しているといって良いであろう。本稿ではこれを妥当と考え，この時間的な流れに則った上で，各土器群類相互の関連を検討する。

Ａ群土器

分類群の中で最も古相を示すのは，キャリパー形を呈する器形で文様帯が最も広いＡ１類であると考えられる。地文に縄文を施す資料が一部にみられるのも，船元式土器との関連が深いことの傍証であろう。施文には突帯と沈線が主体的に用いられ，副次的に刺突も施される。

Ａ１類の文様帯が，上方に狭小化した結果の形として，Ａ２・Ａ３類が考えられる。特にＡ２類の短沈線が多条のものは，Ａ１類の多条垂下沈線からの変化が推定される。Ａ２・Ａ３類の両者とも，文様帯が上位に限定されたことにより，文様を横位に展開するようになる。

Ａ４類においては，Ａ２類と共通した情報（突帯で限定された部分に短沈線を充填）をもつ資料が一部にみられる。またＡ１類同様，渦文や地文縄文を施すものがみられるため，やはり春日式の中では古相である可能性を示している。このＡ４類は口縁部形態や文様意匠にバラエティがみられるものの，資料数も豊富であり，施文要素の面から定形的な一群をなしている。沈線文が殆ど用いられないことは特記される。Ａ５類は恐らく，Ａ４類における突帯の細小化と突帯上の刻目の移動・消滅の結果であろう。

Ａ６～Ａ８類には，①横位に展開する波状文，或いは直線＋鋸歯状文等といった同様のモチーフが描かれる，②また口唇面に刻目を施す，といった共通した特徴を持つ一群がみられるようになる。施文上の変化で言えば，「Ａ６類：押引による線描」→「Ａ７類：沈線のみ」→Ａ８類：「沈線内刺突」という流れは想定できる（**第16図**）が，類似した文様モチーフを共有することから，これらの施文手法は大差ない時間の中で盛行したものと考えられる。この文様モチーフは，Ａ４類における刻目突帯を基に誕生したものとも考えられ，そうであればＡ４類とＡ６～Ａ８類の間には突帯の省略，及びその代替としての線描という変化があったことになる。

Ａ群土器を滑石の混入という観点から概観すると，Ａ２～Ａ６類には殆ど滑石が混入されず，Ａ８類では滑石混入が比較的多く認められる。各類資料の地理的分布も考慮して検討すべき事象であろう。

第16図　Ａ６類～Ａ８類土器における文様の変遷

Ｂ群土器

Ｂ１・Ｂ２類の施文方法はＡ６～Ａ８類のそれと大差ない。このことからこの両者が存在した時間帯では，施文方法は変わらずに，器形のみが変化したことが分かる。この変化は，口縁部の内傾する部分の幅がどんどん狭くなっていく，という動きであると言い換えることもできよう。

Ｂ３類では屈曲部を刻むというこれまでにない手法がとられている。Ａ群において，水平刻目突帯により文様帯を区画する例がみられるため，この伝統を受け継ぐものであろうか。水平沈線を施すものも多くみられるため，Ａ８類やＢ２類の沈線内刺突を構成する２種の施文要素，即ち沈線と刺突が遊離した結果であるのかもしれない（**第17図**）。

Ｂ３類同様屈曲部に刻みをもつＢ４類は，前述した「口縁部の内傾部分の幅が狭くなる」という変化の結果であると考えられる。口唇面化した旧口縁部への施文は連続刺突が多用される。

滑石混入するものは少なく，あってもその殆どは滑石産地である長崎県内からの出土である。

第17図　Ａ８類～Ｂ３類土器における文様の変遷

Ｃ群土器

Ｂ４類とＣ１類は俄かには区別しがたいものであるが，前者は口縁外面に稜線をもたせるために突帯を貼り付けるというニュアンスが強いのに対して，後者は単に文様として水平突帯を用いたという感がある。Ｃ２・Ｃ３類では，口縁が直口気味のものが多くなり，口縁を鋸歯状加工したものが散見される。

Ｃ群土器では滑石を混入するものが非常に少なく，Ｃ群土器自体の分布が鹿児島・宮崎県にほぼ限られることが特記される。

小結

各群類土器の文様を基に，それぞれの相互の関連を検討した結果，

「キャリパー形で文様帯が広く装飾性の強い土器群（Ａ１～Ａ３類）」

→「同じくキャリパー形ではあるが，文様帯が狭まり刻目突帯が盛行する土器群（Ａ４・Ａ５類）」

→「キャリパー形の度合いが弱まり，押引・沈線・沈線内刺突が盛行する土器群（Ａ６～Ａ８類）」

→「口縁部形態が変化し，文様帯が更に狭まる土器群（Ｂ群）」

→「口縁部が直口・外反する土器群（Ｃ群）」

という流れが看取でき，これは「東氏案」が暗示する流れに矛盾しない。また，前谷段階においては，突帯文主体の土器群と押引文・沈線文主体の土器群が存在し，文様モチーフ等の関連性から，両者には若干の新古関係が想定できる。

各類土器には，滑石混入の有無について差異が認められ，特にＣ群各類土器には滑石が殆ど混入されないという，やや際立った結果が導かれた。

４．長崎市深堀遺跡出土資料の検討

深堀遺跡では上記分類群のものもそれぞれ出土しているが，それ以外のタイプが定量認められた。器形からＣ類に近いものと考えられるが，以下のように２分類し，仮称した。

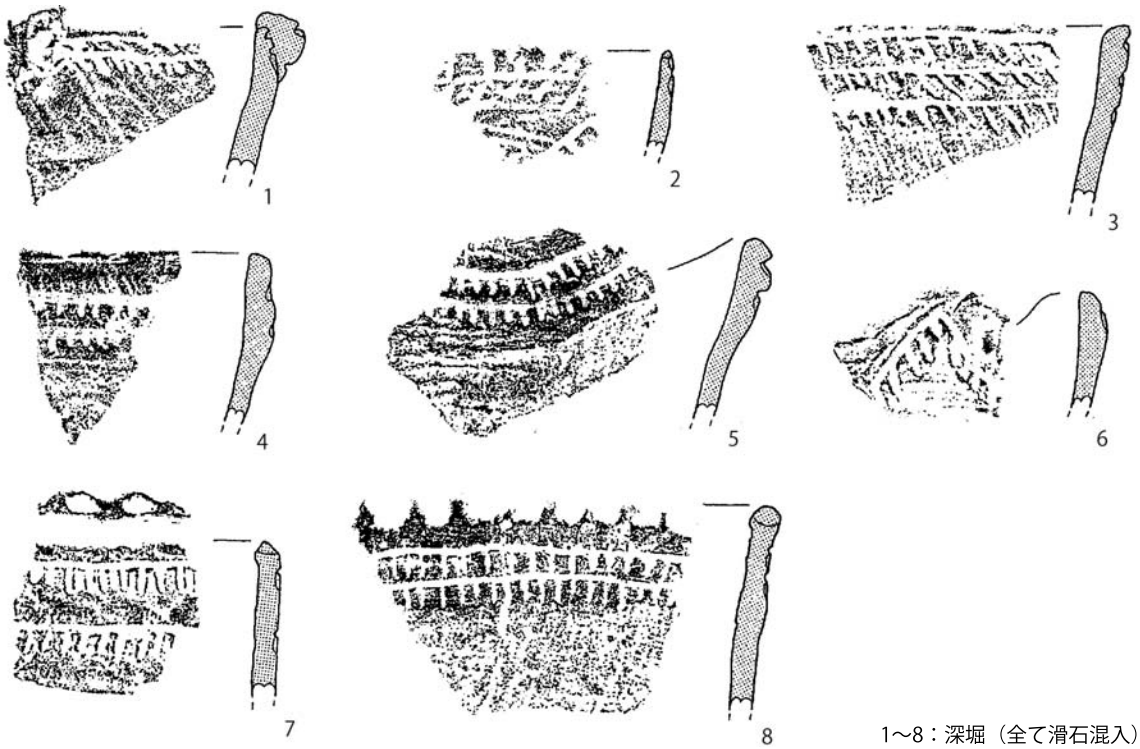
深堀①類（第18図）

〔主体的施文要素〕沈線内刺突。

〔胎土中の滑石〕全てに混入される。

〔口縁部形態〕文様帯の下部を削り，文様帯を肥厚させるものもみられる。波状口縁・平口縁・鋸歯状口縁・突起をもつもの等，口縁部形態は様々である。

〔他遺跡での出土例〕滑石を混入するものとして，鹿児島県武遺跡で小破片が１点報告されている他は，明確に同類と言えるものを探せない。長崎県頭ヶ島白浜遺跡出土のものは，文様帯や器形の面で趣を異にするが，沈線内刺突で文様構成する点で，参考資料として挙げておきたい。また，滑石を含まないものが鹿児島県南宮島遺跡・轟木ヶ迫遺跡から出土している。



第18図　深堀①類土器

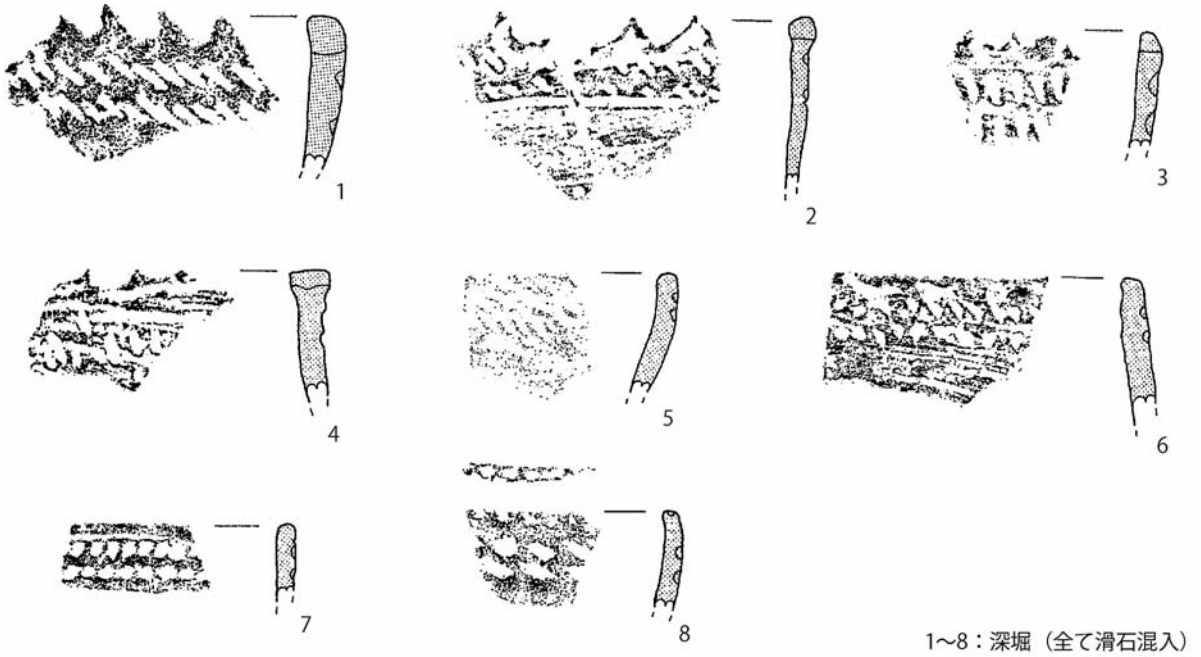
深堀②類（第19図）

〔主体的施文要素〕横位に展開する連続刺突。

〔胎土中の滑石〕全てに混入される。

〔口縁部形態〕鋸歯状口縁か平口縁のいずれかで，波状を呈するものはみられない。

〔他遺跡での出土例〕滑石を混入するものとして，鹿児島県上焼田遺跡と長崎県野首遺跡・雪浦清水遺跡から，それぞれ１点ずつ報告されている。また連続刺突ではなく押引を施すもの（滑石は含まない）が，前述野首遺跡・熊本県深水谷川遺跡で出土している。

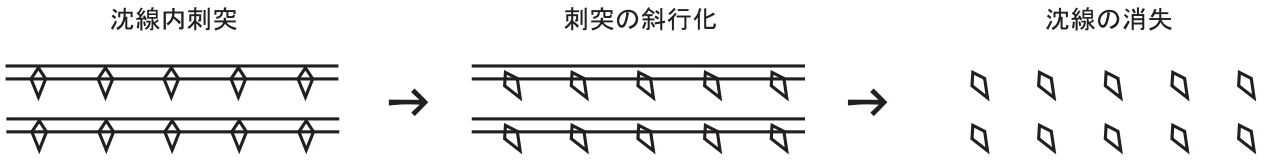


第19図　深堀②類土器

深堀①・②類でも口縁部を鋸歯状加工したものがみられるため，Ｃ２・Ｃ３類と同じ情報を共有していることが分かる。しかし波状口縁のものがある（深堀①類のみ），滑石を混入するもので占められる，といったＣ２・Ｃ３類とは明確に異なる特徴もみられる。

深堀①類の沈線内刺突手法の初現は，Ａ８・Ｂ２類に求められる。Ａ８類・Ｂ２類における沈線内刺突では，沈線内から下方垂直にのみ刺突を施していたのが，深堀①類では刺突が斜めに施されるものがみられるようになり，深堀②類の連続刺突に至っては，深堀①類同様斜め，或いは横向きに施される。つまり「沈線内垂直刺突」→「沈線内斜め刺突」→「沈線省略，斜め刺突のみ」→「水平刺突のみ」という点（**第20図**）から，深堀①類→深堀②類という流れが看取される。また，深堀①類の沈線内刺突には３列のものもみられるが，深堀②類の連続刺突は例外なく２列化する。

このように深堀①・②類にはＣ群土器と同じ情報をもちながらも，施文方法においては独自の系統性がみられるため，Ａ群或いはＢ群段階で独自に分化した可能性が考えられる。この分化は滑石の混入，他地域での客体的な出土傾向から考えて，西北九州で誕生し根付いたということも考えられる。



第20図　深堀①類～②類土器における文様変遷

５．深堀遺跡での出土状況

深堀遺跡における人々の生活の痕跡は，縄文時代前期の轟・曽畑式から始まり，中期→後期→晩期，更には縄文時代に留まらず，弥生・古墳・古代・中世・近世・近代と，区分され得るほぼ全ての時代にわたっている。リアス式海岸が発達した長崎半島特有の立地を考慮に入れれば，生活に適した狭い空間に，重層状態で遺跡が形成されていることも成る程と頷けるものである。そのため各期の人為的作用により，前段階までの遺構や遺物包含層を相当に撹乱したであろうことは想像に難くない。更に，砂浜堤に立地する本遺跡においては，砂層である遺物包含層の分層並びに遺構検出が非常に困難であった。多くの春日式土器の出土地点はこの砂層からであり，出土資料が原位置を保っていたとは言い難い状況にある。

但し，調査区の中では比較的高標高のＪ23・24区，開削面積にして僅か約10㎡という極めて限定された空間の粘質土層から，船元式・春日式土器が他の時期の遺物を殆ど含まない状態で出土している。この粘質土層（Ｊ地区基本層Ⅶ層）から出土した土器を筆者分類で捉え直すと，いずれもＡ群或いはＢ群であり，Ｃ群及び深堀①類・②類のものは出土していない。出土層位の上下で新古を証明する状況にはないものの，同一遺跡におけるこの出土状況は，両者（Ａ・Ｂ群土器段階と，Ｃ群・深堀①類・深堀②類段階）の間に幾分かの時間差があったことを示唆するものと考える。

６．春日式土器に後続する土器

東氏は春日式南宮島段階に後続するものとして，所謂「中尾田Ⅲ類土器」を充てている。そして，この中尾田Ⅲ類土器と並木式土器の間には共通した情報が読み取ることができるため，両者は併行関係にある可能性も，氏は予察している。春日式終末段階，つまり南宮島段階土器というのは，本稿分類におけるＣ１～Ｃ３類に代表されるものであり，その土器群が中尾田Ⅲ類土器と密接な関連性があることは明白であると筆者も考える。それでは深堀①・②類に，系統的に後続する，或いはその影響

を受けたものがあるとすれば，それは何であろうか。

沈線内刺突という手法から，Ａ８類・Ｂ２類→深堀①類→深堀②類という流れを想定したことは前述の通りである。この変遷の結果，深堀②類には以下のような新たな要素がみられる。

ａ．直口した口縁部
ｂ．沈線の消滅と刺突の２列化
ｃ．口縁部文様帯と同様の口唇面への２列の刺突列施文
ｄ．文様帯以下を削ることによる文様帯の凸化

一方，並木式土器に多くみられる特徴として，

イ．口縁部文様帯に施される二叉状の押引文
ロ．口縁部と同様の施文を口唇面にも施文
ハ．凹線を用いることによる文様の凸化
ニ．滑石が混入されるものが少なくない

を挙げることができる。

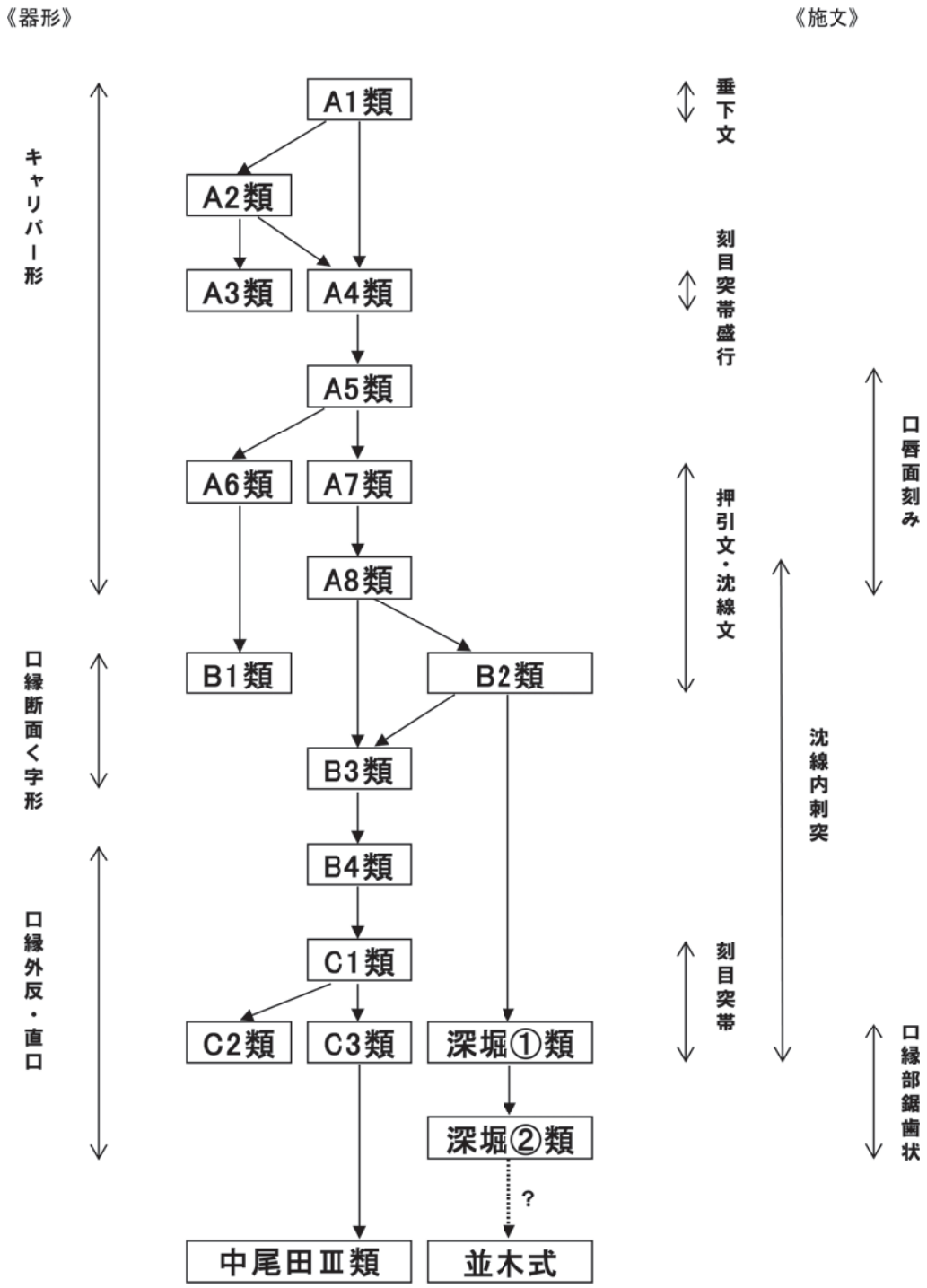
水ノ江和同氏の並木式細分案（水ノ江 1999）によれば，古相から新相に移るにあたって文様帯が拡大し，凹線の文様も直線と曲線の組み合わせというシンプルなものから，複雑な入り組み文へという変化が想定されている。そうであれば，並木式最古相においては，より単純な文様構成であったことも考えられ，二叉状の押引文の起源が深堀②類の２列の連続刺突に求められる，という可能性はある。また，春日式と並木式の間で劇的に発生したかにみえる施文要素に「凹線文」があるが，これも先述した「ｄ．文様帯以下を削ることによる文様帯の凸化」，という特徴にその萌芽を見出せる。また，並木式土器の多くに滑石が混入され，以降阿高式系土器にその伝統が受け継がれていくこともまた，春日式土器，中でも滑石産地である西北九州において盛行したであろう深堀①・②類土器の存在が無縁であったとは言えないのではなかろうか。

上記の事柄は，積極的に肯定する程の資料数が揃っていない以上，未だ推論の域を出ないのではあるが，このような発想も携えながら，今後の資料蓄積を待ちたい。

おわりに

今回長崎市深堀遺跡にて出土した滑石混入土器資料は，これまでの春日式土器の研究に一石を投じるものであることは間違いない。深堀遺跡の発掘調査報告書では，資料数は少ないながらも土器胎土分析を行っており（松本 2004），滑石混入土器と滑石なし土器の粘土成分に差異がみられることが分かっている。このことが何を物語るのか，今のところ多くのことは言えないのであるが，今後このようなアプローチが，春日式土器が盛行した南九州と滑石産地である西北九州の関連についての解明の糸口になるものと期待している。また，本稿で行ったような分類に関わらず，更に様々な視点から研究されることを切望し，且つ長崎市深堀遺跡の出土資料紹介の意を多分に含みつつ稿を終えたい。

最後に，深堀遺跡整理作業にあたって実に様々なことを御教示頂いた東和幸氏・相美伊久雄氏，九州の縄文土器について初歩から教えて頂いた古門雅高氏・渡邊康行氏・宮下雅史氏に，改めて心からの感謝を申し上げ，駄稿で筆を終えたことを併せてお詫び申し上げます。



第21図　本稿における各類土器施文要素の変遷案

表１　九州各県における春日式各類土器の出土状況

県	遺跡	刊行年	A群								B群				C群			深堀		備　考
			1	2	3	4	5	6	7	8	1	2	3	4	1	2	3	①	②	
鹿児島	一湊松山	1981	△																	
	三角山Ⅳ	2004							△											
	轟木ヶ迫	1988				○	○	○	○	○		○			△	○	○	△		
	飯盛ヶ岡	1993				○	△		△	○										
	榎木原	1987	▲				△		○											
	本村	2003								△										
	前床	1998				△			○	○					△	○	○			
	土穴	2002								△										
	桐木	2004		○		△			▲											
	成川	1983	○	○		○	△	△	○	○▲		△		○	?	?				
	帖地	1999	○	△	○				△											
	永野	1983			△	△														
	上焼田Ａ・Ｂ	2003	○	○		○		○	○	○▲		○	△	○	▲		○▲		▲	
	木落	1991						▲												
	下堀	2005																		底部片のみ
	池之頭	2002					△			△										
	今里	2004								△										
	市ノ原	2003				○	△	△	△											
	武Ｆ地点					△												▲		
	小山	1982				△				△										
	前原和田	2002			△				△											
	南宮島	1977				○		○	○	△				○	○	○		○		
	中原	2003			△	○	△	△	○	○		○			○	○	○			
	山神	2004		△																
	石峰	1980																		分類不可
	春田	1991								△										
	松美堂	1990				○		○		●	△▲		○	△	○					
	石打	1999	△	△	△	△			△											
	牟田尻	1976												△						
	柿内	1999						○		○										
宮崎	豊満大谷	2004						△												
	上の原第１	2000						△	○	△				○	?					
	本野	1999	○	△		○		○	○	○	△				○	○	△			
	天神河内第１	1992		△		○	○	△	○	△	△	△	○	○		○				
	赤坂	1985	△						△											
	上ノ原	2002	○						○											
	大戸ノ口第２	1991				○	△		○											
	上野原	2003		○		?		△	○		△		△							
熊本	深水谷川	1994					△	△		△	△		△						?	
長崎	一野	1992			?								▲							
	深堀	2004	●	△	△	○	△	○	●	●		▲	▲	▲				●	●	
	雪浦清水	2000																		
	岩谷口第１岩陰									▲										
	頭ヶ島白浜	1996																?		
	野首	2003	○	△	△		△	△	○▲				▲				△		△▲	
	供養川	2003																		胴部片のみ
	千里ヶ浜	2002																		分類不可

※白：滑石混入なし，黒：滑石混入あり

【註】

註１　発掘調査の成果は，阿部常樹他　2004『深堀遺跡』　にて報告されている。

註２　九州各県の埋蔵文化財発掘調査報告書からの集成作業にあたっては，筆者の勤務する国際文化財株式会社九州支店（当時）の蔵書だけでは足りないため，長崎県学芸文化課久原資料整理室（当時）にて蔵書の閲覧をさせていただいた。同室におられた職員の方々の御厚意には，改めて感謝申し上げる。

【主な引用・参考文献】

東　和幸　　1999「九州地方　中期（春日式）」『縄文時代文化研究の100年』縄文時代10　縄文時代文化研究会
水ノ江和同　1999「九州地方　中期」『縄文時代文化研究の100年』縄文時代10　縄文時代文化研究会
阿部常樹他　2004『深堀遺跡』長崎市教育委員会
松本建速　　2004「長崎市深堀遺跡出土縄文土器・中世滑石製品の化学成分」『深堀遺跡』

【長崎県】
片岡　肇他　1976『平安博物館研究紀要第６輯』京都古代學協会
浦田和彦他　1992「一野遺跡」『有明町文化財調査報告書11』有明町教育委員会
古門雅高他　1996「頭ヶ島白浜遺跡」『有川町文化財調査報告書１』有川町教育委員会
福田一志他　2002「千里ヶ浜遺跡」『長崎県文化財調査報告書165』長崎県教育委員会
村川逸朗他　2003「供養川遺跡」『長崎県文化財調査報告書174』長崎県教育委員会

【佐賀県】
徳永貞紹他　1993「平原遺跡Ⅱ」『佐賀県文化財調査報告書120』佐賀県教育委員会

【熊本県】
坂田和弘　　1994「深水谷川遺跡」『熊本県文化財調査報告書141』熊本県教育委員会

【宮崎県】
北郷泰道　　1985「赤坂遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書３』宮崎県教育委員会
菅付和樹他　1991「天神河内第１遺跡」『大淀川右岸農業水利事業国営天神ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』宮崎県教育委員会
岩永哲夫他　1991「大戸ノ口第２遺跡」『高鍋町文化財調査報告書５』高鍋町教育委員会
金丸武司他　1999「本野遺跡」『田野町文化財調査報告書32』田野町教育委員会
吉本正典　　2000「上の原第２遺跡・上の原第１遺跡・上の原第４遺跡・白ヶ野第３遺跡Ａ地区」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書25』宮崎県埋蔵文化財センター
日高祐司他　2002「上ノ原遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書58』宮崎県埋蔵文化財センター
太川裕晴　　2003「上野原遺跡」『東郷町文化財調査報告書６』東郷町教育委員会
玉利勇二　　2004「豊満大谷遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書83』宮崎県埋蔵文化財センター

【鹿児島県】
池畑耕一他　1976「牟田尻・カラン迫遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財調査報告書３』鹿児島県教育委員会
青崎和憲　　1977「南宮島遺跡」『姶良町都市計画事業に伴う埋蔵文化財報告書』姶良町教育委員会
戸崎勝洋　　1982「小山・谷ノ口・宮後遺跡・上城城址」『鹿児島県埋蔵文化財調査報告書20』鹿児島県教育委員会
出口　浩他　1983「成川遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財調査報告書24』鹿児島県教育委員会
繁昌正幸他　1983「永野遺跡」『知覧町埋蔵文化財発掘調査報告書１』知覧町教育委員会
彌榮久志他　1987「榎木原遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財調査報告書44』鹿児島県教育委員会
戸崎勝洋他　1988「轟木ヶ迫遺跡」『大根占町埋蔵文化財発掘調査報告書１』大根占町教育委員会
吉永正史他　1990「松美堂遺跡」『菱刈町埋蔵文化財発掘調査報告書５』菱刈町教育委員会
鶴田静彦他　1991「春田・石塚・坂ノ下遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財調査報告書59』鹿児島県教育委員会
宮下貴浩　　1991「木落遺跡」『金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書２』金峰町教育委員会
中村耕治他　1993「飯盛ヶ岡遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書３』鹿児島県立埋蔵文化財セ

ンター
倉元良文他　1998「前床遺跡」『輝北町埋蔵文化財発掘調査報告書１』輝北町教育委員会
永野達郎　1999「帖地遺跡」『喜入町埋蔵文化財報告書５』喜入町教育委員会
盛園尚孝他　1999「石打遺跡」『吉松町埋蔵文化財発掘調査報告書４』吉松町教育委員会
宮田洋一　2002「池之頭遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書32』鹿児島県立埋蔵文化財センター
橋口勝嗣　2002「今里遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書33』鹿児島県立埋蔵文化財センター
井ノ上秀文他　2002「九日田・前原和田・供養之元遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書36』鹿児島県立埋蔵文化財センター
清水周作他　2002「土穴遺跡」『大隅町埋蔵文化財発掘調査報告書27』大隅町教育委員会
元田順子他　2003「市ノ原遺跡（第１地点）」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書49』鹿児島県立埋蔵文化財センター
前迫亮一他　2003「中原遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書54』鹿児島県立埋蔵文化財センター
東　徹志他　2003「本村遺跡」『有明町埋蔵文化財発掘調査報告書３』有明町教育委員会
相美伊久雄　2003「上焼田Ａ・上焼田Ｂ遺跡」『金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書15』金峰町教育委員会
藤﨑光洋他　2004「三角山Ⅱ遺跡」「三角山Ⅲ遺跡」「三角山Ⅳ遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書63』鹿児島県立埋蔵文化財センター
立神次郎他　2004「東免遺跡」「曲迫遺跡」「山神遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書64』鹿児島県立埋蔵文化財センター
中原一成　2004「桐木遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書75』鹿児島県立埋蔵文化財センター
田中竜太他　2004「武遺跡Ｆ地点」『鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書40』鹿児島市教育委員会

【お詫び】 本稿は平成24年（2012年）には既に投稿いただいていた。刊行が大幅に遅れたことを心よりお詫びする。著者によると刊行遅延による論旨の変更などは無いとのことである。（事務局）

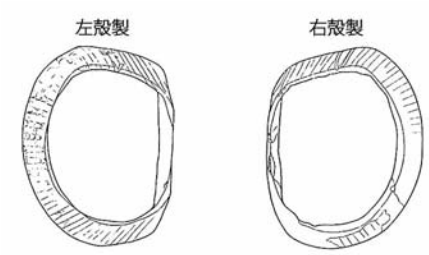
長崎市深堀遺跡におけるフネガイ科製貝輪について

土　岐　耕　司

はじめに

平成13年度に実施され，筆者も調査員として従事した長崎市深堀遺跡の発掘調査において，貝輪を着装した人骨を伴う弥生時代の土壙墓２基を検出した。このうち第10号土壙墓の被葬者の右手首には，いわゆる「南海産貝輪」であるイモガイ製ヨコ型組み合わせ式貝輪が着装されていた（阿部他 2004)。北海道伊達市有珠モシリ遺跡においても着装例が知られ，いわゆる「貝の道」に関わる貴重な検出事例であった（註１)。

幸いにも，筆者はその整理作業にも従事できたのであるが，その際，長崎市教委の担当者として作業に携わっていた立石明氏によって，第10号土壙墓の被葬者が着装するフネガイ科製貝輪について，大変興味深い発見がなされた。平行四辺形気味の箱形を呈するフネガイ科の貝は，左右殻の区別が容易な貝種である（**第１図**）が，同被葬者は**右腕に左殻製のみ**を６点，**左腕に右殻製のみ**９点を通しており，その他左腕付近に置かれていたものも５点が右殻製のみであった（註２)。



第１図　フネガイ科製貝輪の左右

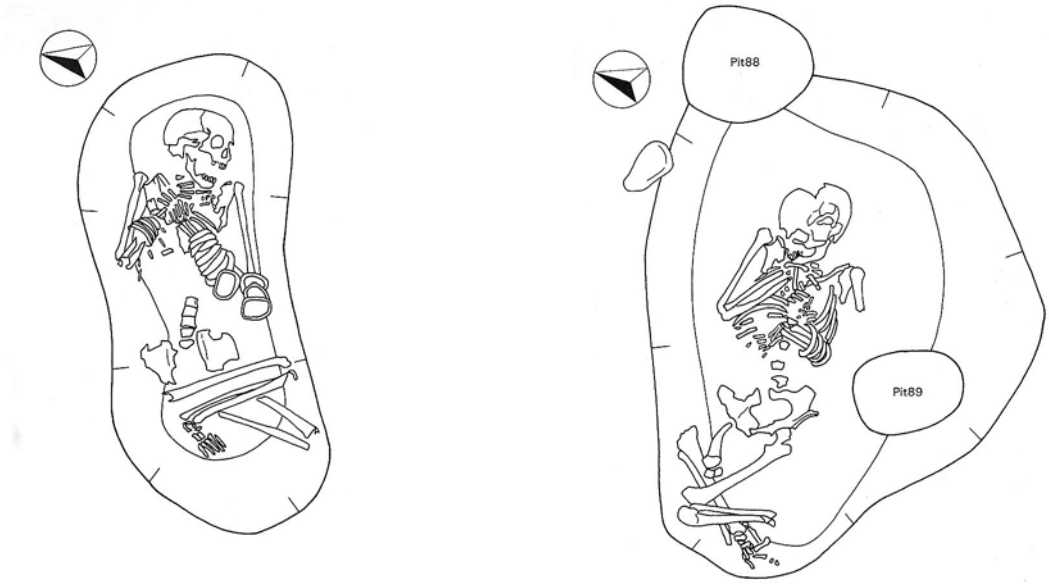
これまで「貝輪着装に関する左右の意識」について，「南島産貝輪」の男女による着装部位に着目した研究は大いになされているが，縄文時代から製作されてきた「在来種」であるフネガイ科貝輪にも，「左右対称」の美意識と受け取れるような着装事例が明らかになったことは，今後の研究において一つの分類要素となり得るものと確信する。

このことがあってから，筆者は二枚貝製貝輪，特に左右殻区別の容易なフネガイ科製貝輪に思いを到らすようになった。木下尚子氏の論考によると，九州で最も早く南海産貝輪が登場するのが西北九州沿岸部であり，その流入に大きな役割をはたしていたのが，この地域の海人であったという。縄文的貝輪着装習俗を基層に，南島の貝輪と北部九州の貝輪の着装習俗を加えて，この地域特有の複雑な着装習俗を作り上げたとする（木下 1996)。つまり西北九州の海人たちは，現地産種製貝輪に固執しながらも南海産種製貝輪をも取り入れながら，その美意識や価値観を発展させていった，と言い換えることができよう。

本稿においては，在来種とされ，左右の区別が容易でもある「フネガイ科製貝輪」について，事実確認・整理することを目的とする。貝輪に限らず装身具着装にあたっては，その素材の希少性が少なからず問題となる。在来種と一括されるフネガイ科貝類は，その獲得が重労働なのかどうか，また西北九州において何故にフネガイ科貝類が多用されるのか，答えを出すことは簡単ではないが，筆者なりのアプローチで迫ってみたい。

１．平成13年度深堀遺跡Ｊ地区の調査成果

冒頭で述べたように，深堀遺跡では貝輪着装人骨を伴う弥生時代の土壙墓を検出した。上位層に包含される遺物や人骨の年代測定から，弥生時代前～中期のものと思われる（註３)。まずはこれらの遺構について紹介しておく（**第２図**)。

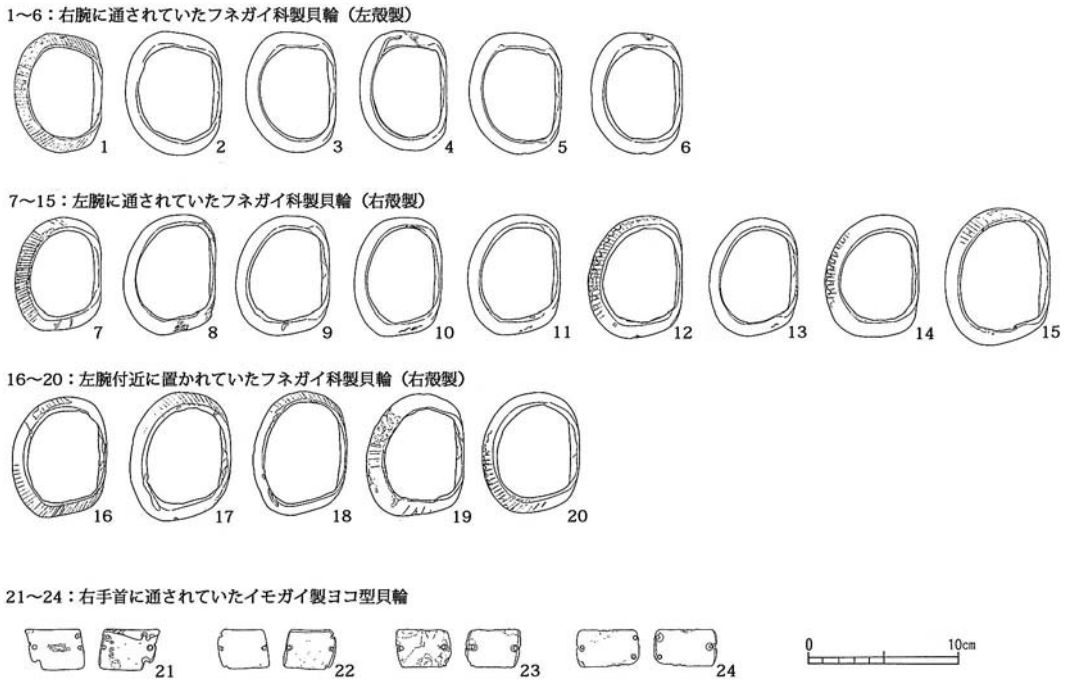


第２図　第10号土壙墓（左）と第11号土壙墓（右）（Ｓ＝１/20）

⑴　**第10号土壙墓**

壮年女性の全身骨格を検出した。緩やかな屈肢状態を呈していた。骨格より上位ではベンガラとみられる施朱がなされており，過去の調査を含めた深堀遺跡での土壙墓としては初例である（石棺墓への施朱は２例あり）。着装・副葬品は以下の通りである（**第３図**）。

- イモガイ製有孔貝輪１組４点：右手首に装着。
- フネガイ科（左殻）製環状貝輪６点：全て右前腕に装着。
- フネガイ科（右殻）製環状貝輪14点：９点を左前腕に装着。５点を左ひじ付近に置く。
- 碧玉製管玉２点
- 管状骨製品（骨製管玉？）８点

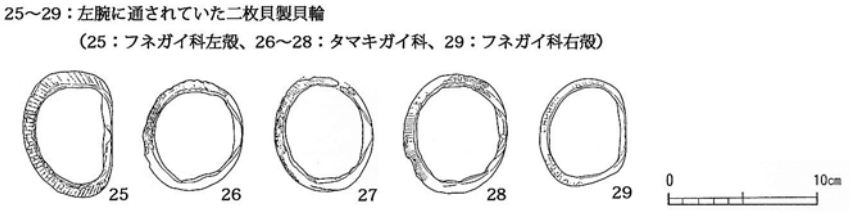


第３図　第10号土壙墓被葬者の着装貝輪（Ｓ＝１/５）

⑵　**第11号土壙墓**

熟年女性の全身骨格を検出した。緩やかな屈肢状態を呈していた。施朱の痕跡は認められない。着装品は以下の通りである（**第４図**）。

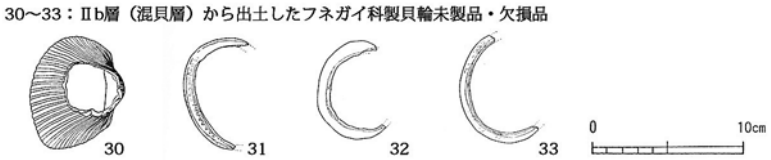
- フネガイ科（左殻）製環状貝輪１点：左前腕に装着。５点の貝輪中，最も手首側。
- フネガイ科（右殻）製環状貝輪１点：左前腕に装着。５点の貝輪中，最もひじ側。
- タマキガイ科製環状貝輪３点：左前腕に装着。上記２点の貝輪に挟まれる。
- 碧玉製管玉12点



第４図　第11号土壙墓被葬者の着装貝輪（Ｓ＝１/５）

⑶　**遺構外出土貝輪**

18点が確認されている。全て未製品或いは欠損品であり，また二枚貝製である。18点中12点が弥生時代の遺物包含層（混貝層）からの出土。報告書に図示掲載された４点（**第５図**）も混貝層の出土で，加藤久雄氏による同定の結果，全てフネガイ科製である。



第５図　深堀遺跡遺構外出土貝輪（Ｓ＝１/５）

２．弥生時代におけるフネガイ科製貝輪

縄文時代には九州各地域でみられた二枚貝製貝輪であるが，弥生時代になると南海産貝輪の流入もあってか，伝統的貝輪の使用分布に変化がみられるようになる。木下氏論考からの引用となるが，九州及びその近辺地域と素材貝類との使用関係を**表１**にまとめた。

表１　九州及びその近辺地域における貝輪素材

地域	ゴホウラ	イモガイ	オオツタノハ	ユキノカサ	マツバガイ	アカニシ	タマキガイ科	フネガイ科	ハイガイ
福岡平野	○	○							
三養基・神埼	○	○							
朝倉・筑後		○							
肥後・薩摩	○	○	○		○				
遠賀川流域	○	○							
西北九州沿岸部	○	○	○		○	○	○	○	
長門北浦・出雲	○	○	○	○	○		○		○
瀬戸内海沿岸	○	○	○			○	○	○	

このように弥生時代になると，フネガイ科製貝輪は，瀬戸内沿岸平野で僅かに認められる以外は，ほぼ西北九州，特に長崎県内での使用に限られている。この西北九州での過去の出土例について，これも木下氏論考からの引用であるが，若干筆者が追加・修正したものを**表２**に示している。

表２　西北九州における二枚貝製貝輪の着装事例

遺跡名	市町村	識別番号	遺構種別	貝輪数	着装者	右	左	備考
芦ヶ浦第一洞穴	対馬市			1				
根獅子診療所前	平戸市		石棺墓	6	不明	両腕６		タマキガイ科混在
			石棺墓	約６	不明	着装		タマキガイ科混在
		５号	石棺墓	29	女性？	12	17	６着装，タマキガイ科混在
		７号	土壙墓か	2	女性	2		
宮の本	佐世保市	23号	土壙墓	1	女性	0	1	
		24号	土壙墓	3	女性	0	3	タマキガイ科混在
浜郷	新上五島町	１次17号	土壙墓	2	女性	0	2	
		２次１号	土壙墓	25	女性	16	9	タマキガイ科混在
大浜	五島市		甕棺墓	16	小児以下			タマキガイ科混在
		３号（1964）	人骨	5	女性	5		ベンケイガイ
		７号（1964）	人骨	4	女性	1	3	ベンケイガイ
		１号（1998）	配石墓	3	不明			フネガイ科１，タマキガイ科２か
		２号（1998）	配石墓	2	不明	2		ベンケイガイ
小佐古石棺墓群	大村市	10号	石棺墓	7（最小５）	３体合葬	５～７		タマキガイ科？
深堀	長崎市	２号（1967）	石棺墓	28	女性	12	12	
		17号（1967）	土壙墓	22	女性	7	15	タマキガイ科混在
		18号（1967）	土壙墓	20	小児以下	9	11	タマキガイ科混在
		19号（1967）	土壙墓	5	女性	5	0	タマキガイ科混在
		10号（2004）	土壙墓	20＋４	女性	6	9	左肘上にあと５点（以上フネガイ科） イモガイ製ヨコ型貝輪も着装
		11号（2004）	土壙墓	5	女性		5	フネガイ科２，タマキガイ科３

３．考古学におけるフネガイ科の貝類について

ここまで「フネガイ科」という語を多用してきたが，本稿において考察の対象とする貝種について定義したい。

フネガイ科製の貝輪素材の分析を行った忍澤成規氏は，３種の貝（サルボウガイ・アカガイ・サトウガイ）を分析対象とし，考古学におけるフネガイ科貝類の同定の歴史と現状にも触れている（忍澤 2005）。その中で，

⑴　かつてマルサルボウと分類されていたものは，現在は分類学上サトウガイと同種とされている。

⑵　昭和初期には比較的厳密に分類されていたフネガイ科貝類であったが，徐々に安易な同定がなされるようになり，特にサトウガイと同定されるものが激減した。

といった事象を提示している。いずれも，本科貝類同定に関して重要な問題である。

前述の深堀遺跡報告書での取り扱いは，本文中では全て「フネガイ科」という語を使用するに留まった。しかし，付章である自然科学分析の動物遺存体の項においては，貝類同定者である加藤久雄氏により「アカガイ類」，更にその「アカガイ類」に含まれる形で「サルボウ」「マルサルボウ」という語が使用されている（加藤 2004）。「マルサルボウ」と同定された理由は，この時参考文献として使用した貝類図鑑の中に，まさに忍澤氏が指摘する「かつての分類」がなされていたもの（吉良 1981）が含まれていたからと思われる。従って，筆者が整理した条件下において，深堀遺跡で出土したアカガイ類貝種は，サルボウガイとサトウガイの２種ということになる。

他方，木下氏は南島貝文化の研究の中で，縄文時代から続く二枚貝貝輪の素材のうち，フネガイ科のものとして，アカガイ・サルボウ・クマサルボウ・サトウガイ・ハイガイなどを挙げている（木下 1996）。このうちハイガイは比較的小型の貝であり，長門北浦・出雲地方の小児用の貝輪素材として扱われているのみであるため，本稿においては除外するものとする（加藤氏も「アカガイ類」とハイガイを区別して記述を行っている）。関東地方において論考を行った忍澤氏の対象貝種に対しては，

新たに九州を中心に分布するクマサルボウが加わった格好となる。

これら４種のフネガイ科貝類について，忍澤氏作成の表（忍澤 2005）を改変・簡略化する形で，更に他の文献からの情報も加えてまとめてみた（**表３**）。表上段の「A」は貝を獲得する際の労力・方法を想定する際に，「B」は形状からの貝種同定の際に，それぞれ重要な要素として捉えられる項目である。

表３　九州に分布するフネガイ科貝類

	A			B	
貝種	生息環境	水深	分布域	形態	放射肋数
サルボウガイ	内湾砂泥底	潮下帯上部から水深20m	東京湾～有明海	箱形	32本前後
クマサルボウ	泥底	５～20m	瀬戸内海，有明海，大村湾		34本前後
サトウガイ	やや外洋砂底	10～50m	房総半島～九州	丸みを帯びた箱形	38本前後
アカガイ	内湾砂泥底	５～50m	北海道南部～九州	後腹隅が張り出した箱形	42本前後

４．生物学的な補足

上記４種以外のものについて，特にサルボウ属（Scapharca）について補足する。『日本近海産貝類図鑑』（奥谷編 2000）によると，日本には「クイチガイサルボウ」という種が存在する。その名の通り，左右殻の大きさが異なっているそうだ。分布域は房総半島から九州の浅い砂泥地とされるため，九州の貝輪を考える上ではこの種も対象とすべきであるが，サルボウガイに近似する（放射肋数は32本前後）ため，その範疇で取り扱われることもあるようである。今のところ厳密な同定要素を把握していないため，本稿においても，本種はサルボウガイ或いはクマサルボウに含んで扱うこととする。

５．貝輪素材の獲得（死殻の利用）について

立石明氏は実際に市場でアカガイを購入し，環状貝輪製作を実践した（立石 2003）。これは環状貝輪の製作技法を考えることに主眼を置いているため，素材の獲得方法に頓着しなかったことについては，本稿では特に異論を挟むものではない。

しかし近年，貝輪素材としてのフネガイ科貝類については，食料として獲得し，その副産物としての貝殻を利用したのではなく，海浜に打ち上げられた貝（死殻）を利用したとの見解がある。山崎健氏は，渥美半島の海浜における現地探索に加え，貝塚出土資料の中に水磨痕のあるものや他の生物による捕食痕がみられるものがあることから，貝輪素材への死殻利用を確認している（山崎 2006）。

６．本稿予察として

前述の深堀遺跡の発掘調査において，食後廃棄物としてのフネガイ科貝類は，ハイガイやエガイ類のように成人貝輪には向かないもの以外は殆どみられなかった（註４）。このことから貝輪素材としてのフネガイ科貝殻は，食料として獲得したものの副産物ではなく，そもそも死殻を利用していたことが推定できる。

貝輪素材としてのフネガイ科貝類については，少なくとも深堀遺跡においては死殻を利用していたのではないだろうか（註５）。重複するが，山崎氏の論考を踏まえて以下にその推定の根拠を挙げる。

・水磨などの影響により，死殻には最初から殻頂部に穴が開いていることが多い。これにより環状貝輪製作の初手の難作業が軽減される。

・フネガイ科製貝輪は，最終的に放射肋すら消滅するほど表面に研磨が施される。死殻に多く残る水磨痕や捕食痕は完成品のクオリティを下げるような要素とはなり得ず，むしろ水磨は表面の研

磨作業を軽減する。

・貝種によってはその生息する水深が５ｍより深くなるため，生貝を獲得するには潜水等の労力が必要となる。貝輪に適するサイズのものは大型の老成貝と考えられ，それを潜水の際に選択して獲得するのは尚更困難である。

・海浜に打ち上げられた死殻であれば，老人子供でも拾い集めることは容易である。大型サイズのみを拾い集めれば足りる。

・深堀遺跡の混貝層からは,食後廃棄物としてのフネガイ科貝類資料があまり出土していない。従って，フネガイ科の生貝を食料として積極的に採取していない。

７．フネガイ科死殻の探索

フネガイ科製貝輪の素材については，死殻が利用されていたのではないか，と筆者が明確に意識し始めたのは，2008年，深堀遺跡Ｊ地区の発掘調査が完了してから実に６年が経過していた。以降，海浜での漂着物拾いの際にはフネガイ科貝殻に注目するようになった。九州島内において，特にこのフネガイ科死殻の探索を主目的とした際，記録をとどめていたものを**別表１**にまとめた。

８．南九州地域で得られた資料の検討

初期の探索では，南九州での発見が印象深かった。以下の２地点は，分析対象としている深堀遺跡からはどちらも遠い地域ではあるが，ひとまずはそれぞれについて考察を行った。

⑴　鹿児島県いちき串木野市吹上浜（2008年６月21日）

取り上げにあたっては，前腕に装着する貝輪素材を想定しているため，なるべく大ぶりのものを選んで行った。10分ほど歩き回った結果，計23個の貝を採取することができた。洗浄・乾燥の上，肋数のカウントと長短径の計測を行った。肋数は全て32本前後であり，「サルボウガイ」であることが推定された。長短径については，長崎市深堀遺跡で土壙墓被葬者が着装していた貝輪のサイズと比較す

表４　鹿児島県吹上浜採取の死殻計測表

採取番号	肋数（本）	殻左右	長径（㎝）	短径（㎝）	状態
吹上－01	32	右	6.9	5.0	虫食い状の歪孔あり
吹上－02	33	右	7.0	5.2	殻頂に小孔あり
吹上－03	33	右	6.7	5.0	虫食い状の歪孔あり
吹上－04	31	右	7.1	5.1	殻頂に小孔あり
吹上－05	31	右	6.8	5.2	虫食い状の歪孔あり，やや摩滅
吹上－06	32	右	7.7	5.4	殻頂～靭帯が破損
吹上－07	33	右	7.6	5.6	腹縁を僅かに破損
吹上－08	33	右	8.0	5.8	
吹上－09	33	右	7.1	5.3	腹縁を僅かに破損
吹上－10	32	左	6.9	5.2	殻頂に小孔あり，虫食い状の歪孔あり
吹上－11	31	左	8.1	6.0	虫食い状の歪孔あり，腹縁を破損，やや摩滅
吹上－12	34	左	7.3	5.6	
吹上－13	31	左	7.4	5.8	殻頂に小孔あり
吹上－14	32	左	7.3	5.4	
吹上－15	34	右	7.0	5.4	
吹上－16	31	左	(7.7)	5.8	腹縁を破損
吹上－17	30	右	7.0	5.2	腹縁を僅かに破損
吹上－18	30	右	7.6	5.5	
吹上－19	33	右	7.3	5.5	虫食い状の歪孔あり
吹上－20	31	左	7.7	5.7	
吹上－21	33	右	7.1	5.2	
吹上－22	33	左	6.4	5.0	殻頂に小孔あり，摩滅
吹上－23	31	右	6.6	5.2	虫食い状の歪孔あり，摩滅
平均	32.04				

ると，採取資料はやや小ぶりとなるが，貝輪として着装し得るサイズのものも含まれていた。

⑵　宮崎県新富町住吉海岸（2008年６月28日）

大振りなもののみを取り上げ，10分ほどで計17個の貝を採取できた。肋数は全て38本前後であり，「サトウガイ」と考えられる。サイズは吹上浜のものよりやや大きく，数値上では貝輪の素材として使えそうである。しかし，貝の歪みが大きいものも含まれており，これも検討を要する問題である。

表５　宮崎県住吉海岸採取の死殻計測表

採取番号	肋数（本）	殻左右	長径（㎝）	短径（㎝）	状態
住吉－01	39	右	8.0	5.7	
住吉－02	39	左	8.1	5.5	殻頂及び中央部に小孔あり，やや摩滅
住吉－03	39	左	8.5	6.3	やや摩滅
住吉－04	39	左	7.9	5.8	やや摩滅
住吉－05	39	左	7.5	5.3	摩滅
住吉－06	38	右	7.6	5.6	殻頂に大孔あり，やや摩滅
住吉－07	39	左	8.6	5.4	
住吉－08	39	左	7.9	5.4	
住吉－09	39	右	7.6	5.8	やや摩滅
住吉－10	40	左	8.4	5.7	
住吉－11	39	左	7.3	5.2	やや摩滅
住吉－12	39	左	8.0	5.7	
住吉－13	40	左	7.6	5.6	
住吉－14	39	右	7.7	5.9	殻頂に小孔あり，腹縁を破損，やや摩滅
住吉－15	38	右	9.0	6.2	やや摩滅
住吉－16	40	右	8.6	6.0	やや摩滅
住吉－17	40	左	7.9	5.8	殻頂に小孔あり
平均	39.12				

この南九州での探索は，着想してすぐの頃であったため，深堀遺跡のフネガイ科製貝輪素材は，南九州地域からもたらされたという可能性が十分考えられるのではないかと筆者は思っていた。しかし最近の探索によって，その認識は覆されることになった。

９．長崎県下における状況の検討

長崎県下における探索では当初，脇岬海岸にて１個体のサトウガイが得られたのみであったが，有明海沿岸や，深堀対岸の香焼島からもフネガイ科死殻を採取することができた。南九州ほど大型のサイズを容易に拾えた訳ではなく，幼貝ばかり採取とはなったが，少なくとも幼貝が見つかるということはこの貝種が生息している環境が近くにあるということが言えよう。

⑴　長崎県雲仙市神代長浜海水浴場（2013年４月16日）

春には潮干狩が盛んに行われる場所で，大量のカキに混じってアサリの死殻も目立った。少ないながらもフネガイ科の幼貝が混じっており，１点だけ大型と呼べるものも採取できた。採取したのは全

表６　長崎県神代長浜海岸採取の死殻計測表

採取番号	肋数（本）	殻左右	長径（㎝）	短径（㎝）	状態
神代－01	34	右	7.0	5.7	腹縁を破損（長径）
神代－02	34	左	5.0	3.3	
神代－03	32	左	4.5	3.0	殻頂部に小孔あり
神代－04	36	左	4.7	3.2	腹縁を破損（長径），殻頂部に孔あり，やや摩滅
神代－05	34	左	4.1	3.1	
神代－06	35	右	4.0	2.9	腹縁を破損（長径）
神代－07	33	左	4.0	2.8	腹縁を破損（短径），殻頂部に小孔あり，やや摩滅
神代－08	31	右	3.5	2.6	腹縁を破損（長径）
神代－09	32	右	3.8	2.7	腹縁を破損（短径），やや摩滅
平均	33.44				

部で９点，放射肋数は33本前後であるため，「サルボウガイ」或いは「クマサルボウ」と考えられる。

有明海は赤貝の産地として知られているが，現在「赤貝」として流通しているものは，実は「サルボウガイ」や「サトウガイ」であることが殆どである。対岸にあたる佐賀県鹿島市の道の駅等で販売されている「赤貝」も，放射肋数が筆者のカウントで30本台であるが，今回採取できたような幼貝サイズのものが殆どである。

⑵　長崎県長崎市香焼島辰ノ口（2013年４月17日）

伊王島を臨む，規模の小さな砂浜であったが，打ち上がり物は多かった。付近の岩盤は砂岩・礫岩で形成されている。ここでは，幼貝のみではあったが，５点のフネガイ科死殻を採取した。放射肋数は33本前後であるため，「サルボウガイ」或いは「クマサルボウ」と考えられる。

表７　長崎県香焼辰ノ口採取の死殻計測表

採取番号	肋数（本）	殻左右	長径（㎝）	短径（㎝）	状態
香焼－01	33	右	3.8	2.5	
香焼－02	34	右	3.7	2.7	
香焼－03	31	右	3.2	2.4	
香焼－04	34	右	3.0	2.2	腹縁を破損
香焼－05	32	右	2.9	2.0	
平均	32.80				

10．探索結果の考察

南九州での探索において老成の大型死殻が多く見つかった理由は，恐らく海浜を取り巻く環境が太古からそれほど変わっていないからであろう。吹上浜も住吉海岸も，外洋に面して大規模な砂浜を形成しているのに対し，リアス式海岸を持つ長崎県沿岸では，護岸化・埋め立て等，環境への人為的働きかけの影響が大きいのだと思われる。もちろん，往時の環境とは気候・海流等も異なるであろうから，結果をそのまま捉えることはできないにしても，一定の傾向を示すものとして考えたい。

11．深堀遺跡出土資料の検討及び結果

2013年４月，深堀遺跡報告資料の保管場所にて，現物を実見する機会をいただいた。貝輪資料は他施設にて分散展示されているため，手にとって見ることができたのは一部であったが，結果として非常に興味深いことが分かった。

検討作業は，出土した貝輪の放射肋数をカウントできるかどうかが鍵となった。各貝輪は表面の研磨が顕著であったため，放射肋数をカウントすることはなかなか難しかったが，現生標本も見比べたり，内面に残る放射肋も参考にしたりしながら作業を進めた。その結果，土壙墓被葬者が着装していた貝輪の放射肋数はおよそ32本前後，混貝層から出土した未製品１点は40本であり（註６），それぞれサルボウガイ・サトウガイと推定した。

表８　深堀遺跡出土貝輪計測表

遺物番号	肋数（本）	殻左右	長径（㎝）	短径（㎝）	状態
図２－13	33？	右	7.8	6.0	研磨顕著
図２－16	33？	右	7.0	6.2	研磨顕著，虫食い状の歪孔あり
図２－17	33？	右	8.5	6.6	研磨顕著，虫食い状の歪孔あり
図２－18	31？	右	8.2	6.2	研磨顕著，虫食い状の歪孔あり
図２－19	32？	右	8.1	6.4	研磨顕著，虫食い状の歪孔あり
図２－20	31？	右	8.0	6.4	研磨顕著
図３－25	33？	左	8.3	5.9	虫食い状歪孔あり
図３－29	32？	右	7.1	5.6	研磨顕著，虫食い状の歪孔あり
図４－30	40	右	7.4	6.2	水磨・研磨なし，殻頂部に大孔

サルボウガイは，深堀対岸の地である香焼島にて採取されている。香焼島には砂岩の露頭も認められるが，この砂岩が深堀遺跡で検出された石棺墓の石材として使用された蓋然性が高く，葬送儀礼に関わる２つの事柄が同じ香焼島に由来する可能性がある点は注目される。またサトウガイは，脇岬海岸での探索で見つかっている。つまり，深堀遺跡で出土した貝輪は，野母崎を含んだ長崎半島西岸地域で，その素材獲得が十分可能であるとも言える結果である。

また，製品８点中，他の生物による捕食痕が認められたものが６点見つかった。山崎氏の論考と一致するものであり，死殻を利用していたであろうことが確実であると言える。

12. 小　結

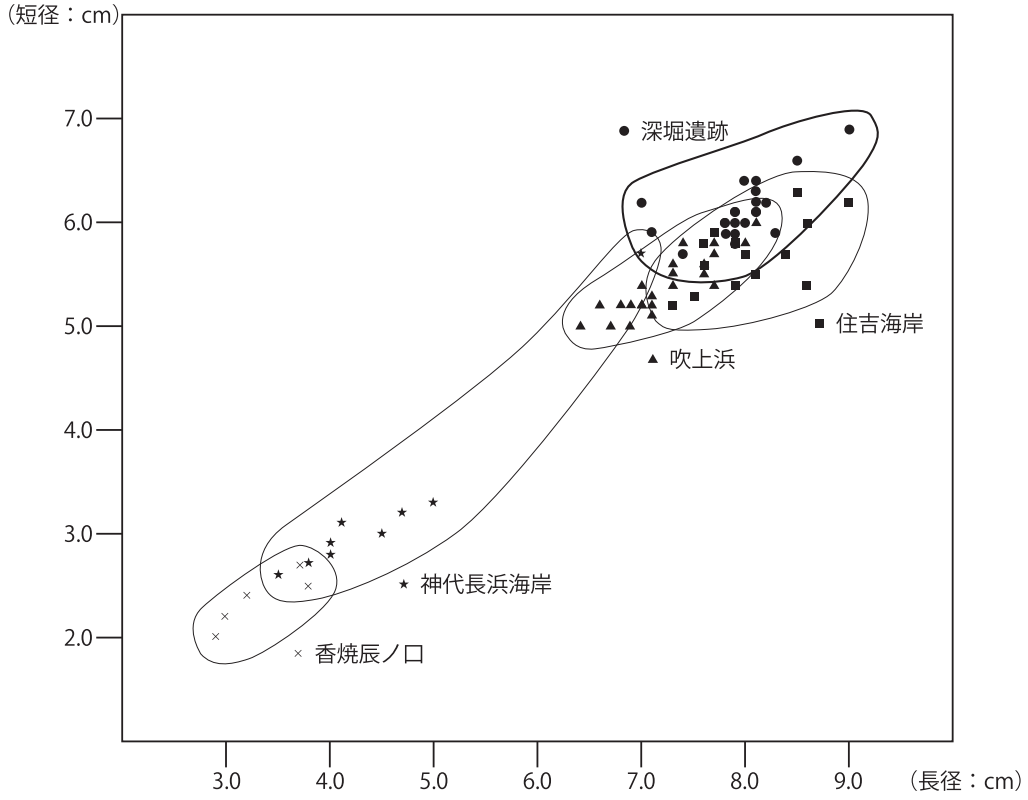
深堀遺跡で使用された「フネガイ科製貝輪」の素材は，遺跡が位置する角力灘に面した海浜で獲得された可能性が高い。そのことで，「フネガイ科貝類」がこれまで「在来種」として扱われてきたことが，文字通りのこととして追認されたとも言える。

また，深堀遺跡では，食用となるにも関わらず，フネガイ科貝類が食料として利用された痕跡が認められない。このことからもフネガイ科貝類は「貝輪素材」という特別な目的をもって遺跡にもたらされたと考えられ，食糧となる他の貝類とは別な方法，つまりは打ち上げられた老成貝の死殻を採取したことが推定される。

13. 出土資料と現生資料とのサイズ比較

本稿で言う「貝輪」は，実際に手首付近に着装するものを想定している。着装するためには拳を通さなければならないため，ある程度の大きさであることが必要となる。そこで，深堀遺跡の２基の土壙墓から出土した貝輪のサイズを基準にして，探索で得られた死殻の計測値を比較してみた。

第６図から，深堀遺跡出土資料群が最も右上，すなわち長径・短径ともに大きいことが分かる。つ



第６図　出土貝輪と採取死殻のサイズ比較

まり，比較的大型サイズを採取できたと感じた南九州の死殻ですら，着装可能サイズに及ばないものが多く含まれているのである。

この比較からは多くのことは言えないが，着装できる貝輪素材はかなりの大型老成個体であり，打ち上げられた死殻とは言え，ある程度の稀少性が感じられる。

14．まとめ

- 深堀遺跡の被葬者が着装していた貝輪の素材は，元々貝輪製作のために遺跡にもたらされたもので，生貝ではなく死殻であった可能性が高い。
- フネガイ科貝類を「在来種」として扱うことは，少なくとも深堀遺跡においては，探索結果からも妥当と言える。
- 成人が着装可能なサイズの貝輪素材，すなわち老成した大型個体の死殻を獲得することは，少なくとも現代では簡単ではない。往時も比較的稀少であったことが予想される。

15．今後求められる視点

フネガイ科製貝輪についての研究を深めるために，今後必要とされることは何か。筆者は大きく３つのテーマで捉えるべきと考える。

⑴　貝輪素材の貝種同定及び産地推定

表２に示した西北九州でのフネガイ科製貝輪出土地もまた，角力灘を囲むように立地していることは示唆的である。しかしながら，各遺跡での貝輪素材がフネガイ科のどの種であるのかの確認作業は，依然として基礎的必須の事項と捉えるべきである。

五島市（旧富江町）所在の宮下貝塚で出土したサルボウガイ製貝輪について，「サルボウガイは内湾の砂泥性の海浜に棲息する貝類で，本遺跡の周辺にその産地を求めることは困難であるとの指摘を受けた。」（川道他 1998）とあるように，他遺跡においても同定される種によっては，やはりその由来が問題となるのである。

出土資料であっても表面研磨の少ないものや未製品であれば，放射肋数をカウントできる余地がある。また，食糧と密接に関連する貝層からの出土のものとの比較も，奨励されるべき有意な作業であると言えよう。

⑵　左右殻の使い分け

南海産貝輪，特にゴホウラやイモガイについては，男女装着の別，左右腕装着の別について，何かしらの意味づけがあったことは知られている。しかし，今回紹介したような深堀遺跡における左右殻の装着分けがあった事例はあまり知られていない。比較的左右の区別が難しいタマキガイ科製貝類とは，この意味合いにおいて一度区別されるべきである。或いは深堀遺跡第11号土壙墓例のように，左右性の強いフネガイ科とそれが弱いタマキガイ科の併用についても，何らかの法則性がないか検討を要する。

表２に示した過去の事例では，左右殻の別についてはおろかタマキガイ科との区別記載すらあまり留意されておらず，上記のことについて判然としない。それらの記録及び資料の確認が可能であるならば，是非とも再検討したい事柄である。

⑶ 赤い血の意味について

フネガイ科及びタマキガイ科貝類については，ヘモグロビンを含む「赤い血」をもつことから，「呪物」として扱われたという考え方がある（白井 1997）。しかし，死殻を利用したのであれば，赤い血を根拠とした「貝輪素材の選択性」や「貝輪の持つ意味」に関する議論を見直す必要があるとの意見もある（山崎 2006）。

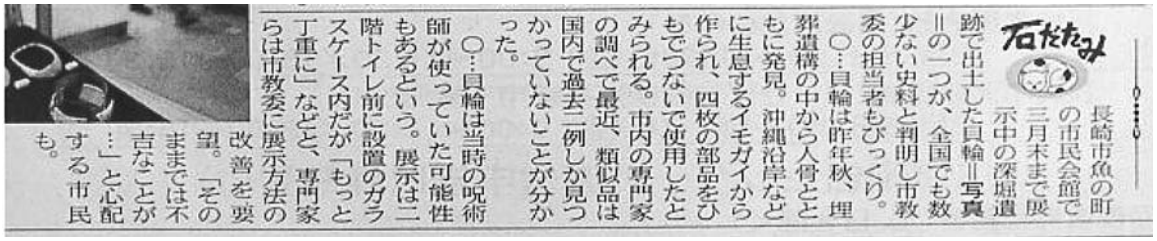
九州近辺での弥生時代においては，これらの貝輪の使用が西北九州に限られているが，縄文時代も含めると全国的に出土している。これが「呪物」という共通項から来るのか，それとももっと必然的な理由（地理・労力・稀少性）によるものなのか，再度注目していく必要があるように思われる。

別表１　筆者による海岸探索記録

番号	場所	年月日	天候等	フネガイ科	その他
1	鹿児島県いちき串木野市吹上浜	080621	梅雨中の雨天日	○	マクラガイ類他
2	宮崎県新富町住吉海岸	080628	梅雨中の大雨翌日	○	ツメタガイ類他
3	宮崎県宮崎市白浜海岸	080628		×	アサリ？
4	鹿児島県鹿児島市前之浜	080629	梅雨中の快晴日	×	アオイガイ類他
5	長崎県長崎市深堀漁港脇	080720	快晴	×	マツバガサ他
6	長崎県長崎市神の島付近	080720		×	カキ・サザエ他
7	長崎県長崎市蚊焼漁港	080817	曇り	×	カキ・フジツボ他
8	長崎県長崎市脇岬海岸	080817		1	
9	長崎県長崎市川原海岸	080817		×	
10	長崎県長崎市為石海岸	080817		×	アワビ
11	長崎県大村湾南沿岸	090124	曇りのち大雪	×	ほぼ護岸化
12	長崎県西海市柳の浜	090124		×	大雪で断念
13	長崎県西海市雪浦海岸	090124		×	タマキガイ科他
14	長崎県長崎市大野海岸	090124		×	大型円礫のみ
15	長崎県松浦市ぎぎが浜	130409	波浪警報翌日の晴天日	×	エガイ類・ウニ類
16	長崎県長崎市深堀漁港脇	130415	快晴	×	カキ・クボガイ他
17	長崎県諫早市結の浜	130416	曇り	×	
18	長崎県雲仙市千々石海岸	130416		×	コウイカ・？貝
19	長崎県雲仙市土黒丁	130416		×	カキ・アサリ
20	長崎県雲仙市神代長浜	130416		○	カキ・ハイガイ他
21	長崎県長崎市香焼栗浦	130417	快晴	×	クマノコガイ・クボガイ
22	長崎県長崎市香焼辰ノ口	130417		○	クボガイ・イタボガキ
23	長崎県長崎市伊王島	130417		○	クボガイ・イタボガキ

【註】

註１　「長崎新聞」にも記事が掲載された（写真１）。この年度の発掘調査では，他にも目を見張るような成果が数々挙がり，筆者自身も従事できた喜びにただ興奮するばかりであったことを記憶している。新聞記事は切り抜きコピーを PDF 保存していたのみで，掲載年月日は記録していなかった。



石だたみ

長崎市魚の町の市民会館で三月末まで展示中の深堀遺跡で出土した貝輪＝写真＝の一つが、全国でも数少ない史料と判明し市教委の担当者もびっくり。

○…貝輪は昨年秋、埋葬遺構の中から人骨とともに発見。沖縄沿岸などに生息するイモガイから作られ、四枚の部品をひもでつないで使用したとみられる。市内の専門家の調べで最近、類似品は国内で過去三例しか見つかっていないことが分かった。

○…貝輪は当時の呪術師が使っていた可能性もあるという。展示は二階トイレ前に設置のガラスケース内だが「もっと丁重に」などと、専門家らは市教委に展示方法の改善を要望。「そのままでは不吉なことが…」と心配する市民も。

写真１　長崎新聞に掲載されたコラム

註２　『深堀遺跡』「まとめと考察」において，フネガイ科製貝輪の左右殻について論じたが，後になって図鑑（奥谷 2006）で再確認したところ，両者において殻の左右の取り扱いが生物学的に逆であることが判明した。本稿では図鑑に倣って統一して扱っている。

註３　土壙墓人骨の年代測定の結果，第10号は2262±34年，第11号土は2365±33年であった（いずれも肋骨を試料とする）。測定・報告者は，東京大学大学院新領域創成科学研究科米田譲氏（当時）である。

註４　『深堀遺跡』種名表によると，フネガイ科として，クマサカヤドリエガイ・カリガネエガイ・サルボウガイ・マルサルボウ・ヒョウブガイ？・ハイガイの６種が種同定されている。

註５　筆者は民間の発掘調査会社に所属する調査員であるため，居所も定めず各地の遺跡現場へ赴任する日々を送っている。そんな筆者の趣味は，貝殻を含めた漂着物拾いや海釣りなど海浜に関連するものが多く，振り返ってみれば自分でも驚くほど多くの海浜（特に赴任することの多い九州・沖縄地域）を訪れていた。本稿着想以前にも，砂浜などに打ち上げられたフネガイ科死殻を目にすることはあったが，その場合，殻頂部を欠損するものばかりという記憶が強く残っていた。前述の立石氏の論考にて，まず貝殻中央に穿孔するという行為が思いのほか難作業であるという知見を得，やはり貝輪素材に死殻を利用していた可能性を強く感じたのである。

註６　放射肋数については，実は正式な数え方を知らないため，筆者によるカウントでは，両端の分だけ最大２本多く数えている可能性がある。

【引用・参考文献】

阿部常樹他　2004『深堀遺跡－長崎市深堀５丁目地内下水道敷設事業並びに深堀第一排水区雨水梁敷設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』長崎市教育委員会

大野安生他　1995『富の原遺跡・小佐古石棺墓群Ｂ地点 II』大村市文化財調査報告第19集　大村市教育委員会

奥谷喬司編著　2000『日本近海産貝類図鑑』　東海大学出版会

奥谷喬司　2006『日本の貝２』フィールドベスト図鑑19　株式会社学習研究社

忍澤成規　2005「貝輪素材として選択された貝種の流行と背景－フネガイ科製の貝輪素材の分析を中心として－」『動物考古学』第22号

加藤久雄他　2004「深堀遺跡における貝層資料及び動物遺存体について」『深堀遺跡』長崎市教育委員会

川道　寛他　1998『宮下貝塚』富江町文化財調査報告書第１集　富江町教育委員会

木下尚子　1996『南島貝文化の研究－貝の道の考古学－』法政大学出版局

吉良哲明　1981『原色日本貝類図鑑』保育社

久保弘文他　1995『沖縄の海の貝・陸の貝』沖縄出版

酒詰仲男他　1964『五島遺跡調査報告』長崎県文化財調査報告書第２集　長崎県教育委員会

白井祥平　1997『ものと人間の文化史83－Ⅰ　貝Ⅰ』法政大学出版局

鈴木公雄　1989『貝塚の考古学』東京大学出版会

立石　明　2003「はじめてのアカガイ貝輪づくり　－但し現代の道具を用いて－」『史紋』第１号　史紋編集委員会

福田一志他　1998『大浜遺跡』長崎県文化財調査報告書第141集　長崎県教育委員会

山崎　健　2006「渥美半島における貝輪素材の獲得」『考古学ジャーナル』541

【お詫び】 本稿は平成24年（2012年）には既に投稿いただいていた。刊行が大幅に遅れたことを心よりお詫びする。著者によると刊行遅延による論旨の変更などは無いとのことである。（事務局）

五万長者遺跡出土の老司式軒瓦について

―肥前国高来郡における古代寺院造営の背景―

伊　藤　敬太郎

はじめに

島原半島の北部に江戸時代から古瓦の出土が記録されてきた五万長者遺跡（**図２－１**，長崎県雲仙市多比良町高下名）と呼ばれる老司式軒瓦の出土地がある（註１）。

周辺には，６世紀中葉の横穴式石室墳である高下古墳（小田 1979，**図２－３**），郡衙との関連が指摘されている十園遺跡（竹中・辻田 2004・2005，**図２－４**）があり，五万長者遺跡は，郡衙に隣接する郡衙周辺寺院の可能性が指摘されている（註２）。

発掘調査は，1995年に長崎県教育委員会による重要遺跡範囲確認調査が行われた（川道編 1997）。トレンチ調査の結果，わずかに版築状の遺構が確認されたが，瓦葺建物との関係は明らかでない。

出土瓦は，小田富士雄氏により，老司Ⅰ式亜型に位置づけられている（小田 1981）。老司式軒瓦は，外区外縁に凸鋸歯文，内縁に珠文を巡らす複弁八弁蓮華文軒丸瓦と上外区は珠文，下外区・脇区が凸鋸歯文の左偏向唐草文軒平瓦をセットとする。最古段階の老司Ⅰ式は，老司瓦窯で焼成されており，観世音寺の創建瓦である。その祖型は藤原宮式軒瓦との関係が指摘されている（註３）。

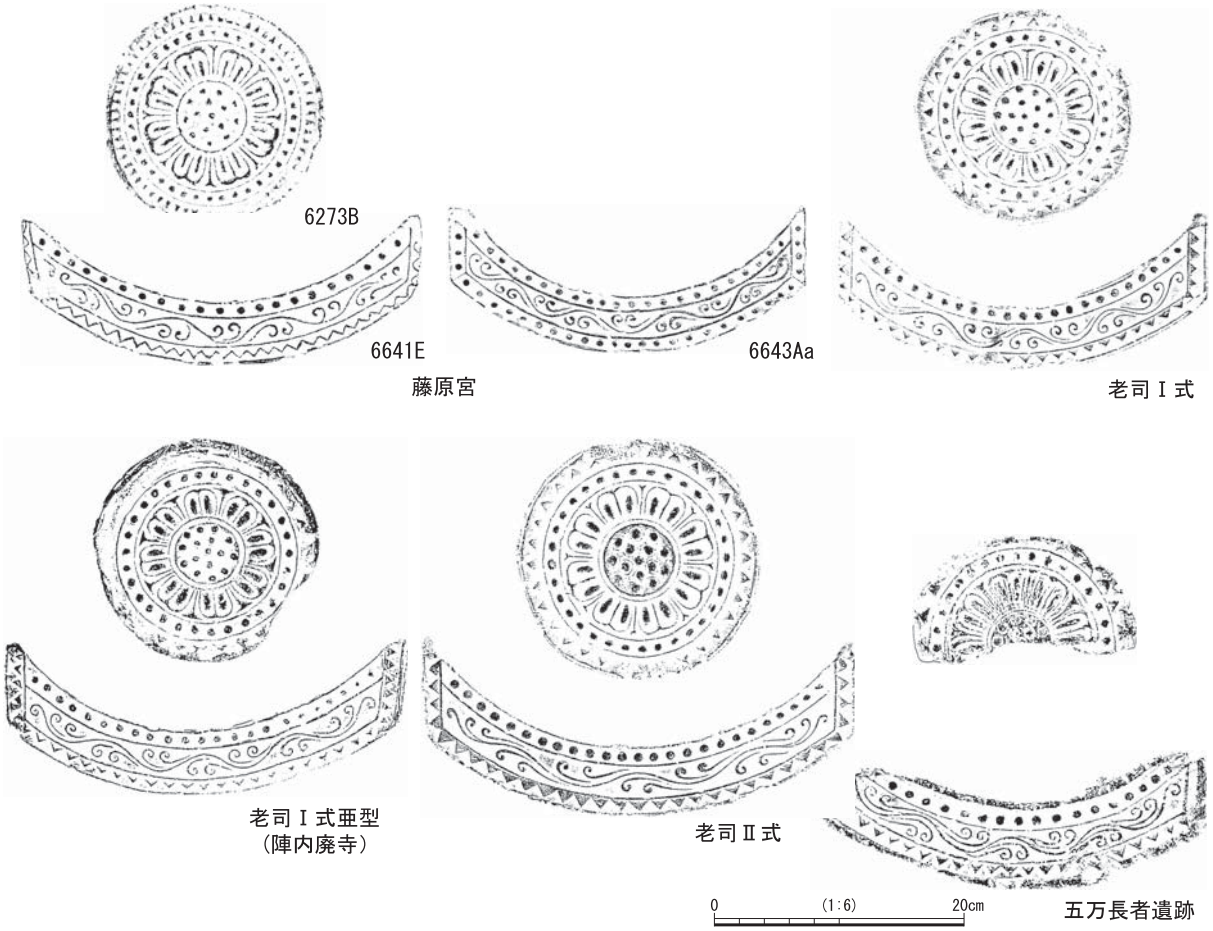


図１　藤原宮式・老司式軒瓦

1.五万長者遺跡　2.八反田古墳　3.高下古墳　4.十園遺跡　5.倉地川古墳
6.真正寺条里　7.神代条里

図２　五万長者遺跡と周辺の遺跡

1.五万長者遺跡　2.真正寺条里　3.神代条里　4.伊古条里　5.守山大塚古墳
6.山田・守山条里　7.一本松古墳　8.小野条里　9.田井原条里　10.善神さん古墳
11.大峰古墳　12.丸尾古墳　13.長戸鬼塚古墳　14.寺浦廃寺　15.大願寺廃寺
16.肥前国庁　17.肥前国分寺　18.辛上廃寺　19.三宅廃寺　20.老司瓦窯
21.筑前国分寺 22.大宰府政庁　23.観世音寺 24.般若寺　25.杉塚廃寺　26.井上廃寺
27.下高橋官衙遺跡　28.立願寺廃寺　29.陣内廃寺

図３　関連遺跡位置図

近年，観世音寺正式報告書の刊行（九歴 2005～2007），老司瓦窯の調査（榎本 2009），古代瓦研究会による藤原宮式軒瓦の検討（古瓦研 2010），岩永省三氏の論考「老司式・鴻臚館式軒瓦出現の背景」（岩永 2009）など，老司式軒瓦について，基礎データの公表や，遺物の詳細な観察をもとにした研究が進められてきた。また，官衙に隣接する地方寺院は，古代官衙・集落研究会による研究集会「地方官衙と寺院－郡衙周辺寺院を中心として－」（山中編 2005）などで研究が深められてきている。

五万長者遺跡の軒瓦は，すでに小田氏や，重要遺跡範囲確認調査の報告書において，詳細な観察がなされているが，本論考では，最新の研究成果をもとに，改めて出土瓦への検討を加える。さらには，長崎県本土部では稀な古代瓦出土地である五万長者遺跡に老司式軒瓦がもたらされた歴史的背景について考えてみたい。

１　老司式軒瓦の特徴

杉原敏之氏（杉原 2007）や齋部麻矢氏（齋部 2010）の観察結果をもとに老司Ⅰ式・Ⅰ式亜型・Ⅱ式の文様や技法上の特徴をまとめておく。

軒丸瓦（**図１**）

Ⅰ式は，観世音寺（**図３－23**，筑前，福岡県太宰府市），老司瓦窯（**図３－20**，筑前，福岡県福岡市），三宅廃寺（**図３－19**，筑前，福岡県福岡市）などから出土している。

瓦当径は18㌢前後。弁区より突出した中房に１＋５＋10の周環を持つ蓮子を配する。中房と弁の基部の間に圏線が巡る。蓮弁は照りむくりがあり反りは強い。外区の凸鋸歯文と珠文は各31個である。鋸歯文と珠文は対応関係になく割付が整然としない。

製作技法は，各遺跡で異なる。観世音寺では，丸瓦部は玉縁式の粘土紐作りである。瓦当への接合は，丸瓦の先端を加工しないものが主体であるが，一部は凹面側に細線の格子を刻む。瓦当裏面下半には紐状粘土を貼り付けて周堤としている。老司瓦窯は，技法や胎土が共通しており，観世音

寺への生産窯とされている。三宅廃寺では，観世音寺より笵傷の進んだ資料が出土している。丸瓦部は行基式で竹状模骨に粘土板を巻き付ける。周堤は，紐状粘土で作るものの他に，瓦当裏面下半の周縁を強くナデて低く周堤状にしたり，ないものも見られる。

その他，少量ではあるが，筑前国分寺（**図３－21**，筑前，福岡県太宰府市），般若寺（**図３－24**，筑前，福岡県太宰府市），杉塚廃寺（**図３－25**，筑前，福岡県筑紫野市）から出土している。

Ⅰ式亜型は，Ⅰ式に文様が類似する。大宰府周辺や井上廃寺（**図３－26**，筑後，福岡県小郡市），陣内廃寺（**図３－29**，肥後，熊本県熊本市）から出土している。

井上廃寺は，珠文と凸鋸歯文の数がⅠ式と異なり30個である。中房蓮子は１＋５＋10で周環が認められない。丸瓦部は，玉縁式と考えられている。瓦当裏面下半には周堤が認められる。製作技法は観世音寺とほぼ同じである（片岡編 1998）。

陣内廃寺は，珠文と凸鋸歯文の数が32個に復元されるタイプと，30個のものがある。中房蓮子は１＋５＋10である。周堤の製作技法は不明だが，強いナデや削り出しではなく，別粘土で作っている。なお，同廃寺は，塔と東面する金堂を配置する観世音寺式伽藍配置が想定されている（松本 1960）。

Ⅱ式は，大宰府政庁や周辺官衙，三宅廃寺などで多く出土し，観世音寺でも少量見られる。

瓦当径は19㌢前後とⅠ式に比べてやや大きい。文様構成はほぼ同じだが，中房蓮子が１＋５＋９と２重目の蓮子が１個少ない。また，珠文と凸鋸歯文は32個と１個多く，８で割り切れるため，整然とした割付になる。

製作技法は複数あるが，出土点数が少ないため，遺跡ごとの違いを見出せない。大宰府政庁の資料では，丸瓦部は玉縁式の粘土紐作りで，凸面は縄叩きである。丸瓦の先端は，指や棒状工具で窪みを入れたり，端面に斜位の太い刻みを入れる等の調整が見られる。裏面は，周縁下半を強くナデて周堤状とするものがある。

軒平瓦（**図１**）

Ⅰ式は，観世音寺，老司瓦窯，三宅廃寺，般若寺，筑前国分寺から出土する。

内区は右から左に流れる偏向唐草文である。波状する茎から大支葉が派生し，それを７単位配する。大支葉の２葉は，ともに茎からは遊離し，長く尾を引く。上外区は，23個の珠文，下外区と脇区は，間に界線がなく，連続して33個の凸鋸歯文を配する。

製作技法は粘土紐桶巻き作りである。凸面は正格子叩き，凹面の側板痕は幅３㌢前後である。顎は，削り出しの段顎で，長顎・短顎がある。長顎は長さ６～９㌢前後，平瓦部からの厚さ0.3～1.0㌢前後，短顎は長さ３～４㌢前後，厚さ1.5～2.5㌢前後である。瓦当側から15㌢前後を丁寧にヨコナデする。

三宅廃寺，般若寺，筑前国分寺の資料はいずれも，粘土板桶巻き作りで，凸面は縄叩きである。顎は粘土板貼り付けである。

Ⅰ式亜型は，井上廃寺，陣内廃寺などから出土している。

遺跡ごとで，珠文や鋸歯文の数，唐草の配置に違いが見られる。井上廃寺，陣内廃寺は，ともに粘土紐桶巻き作りで，凸面は格子叩きである。

Ⅱ式は，大宰府政庁や周辺官衙，般若寺，杉塚廃寺などで出土する。

唐草は，Ⅰ式より流れが緩やかで巻き込みも弱い。全体に平面的な文様である。珠文や凸鋸歯文の数が異なり，上外区は25個の珠文，下外区と脇区は，連続して31個の凸鋸歯文を配する。

製作技法は，粘土紐桶巻き作りが大半で，凸面は縄叩きである。顎は，粘土板貼り付けによる段顎，長顎・短顎があり，顎面に縄叩きが施されるものがある。

これら老司式軒瓦の製作技法の変遷は，齋部氏によれば軒丸瓦・軒平瓦ともに①素材の粘土が紐→板。②凸面の調整が格子叩き→縄叩き。軒丸瓦では裏面の周堤が紐状粘土の貼り付け→強いナデによる成形→消滅。軒平瓦では，顎が粘土紐削り出し→粘土紐貼り付け→粘土板貼り付けとなる。

型式の変遷は，Ⅰ式の観世音寺，老司瓦窯がもっとも古く，次にⅠ式亜型，さらにⅡ式となる。Ⅰ式で笵傷の進行した三宅廃寺は，Ⅰ式亜型とほぼ同時期か次の段階と考えられている。

次に年代だが，岩永氏は，藤原宮式軒瓦を従来までの研究をもとに古中新の３段階に分類し，中段階において，偏向唐草文，粘土紐技法が見られることから，老司式軒瓦の祖型を，中段階相当に位置づけられた。さらに実年代について，古段階は，従来から指摘されているとおり，天武末年（680年代前半）の藤原宮下層運河から淡路産の軒平瓦6646型式が出土していることから生産開始は天武末年以降。中段階は，大極殿所用瓦（6273Ｂ－6641Ｅ）があり，大極殿の文献上の初見は文武２（698）年であることから製作はそれ以前。新段階は，藤原宮のすぐ南にある日高山瓦窯の操業停止が持統10（696）年の「南門」における大射以前とすれば，日高山の新段階の製品は，696年以前に存在しているとされた。つまり「天武末年から遷都（694年著者註）直後までの時間幅に３段階が収まる」とされた（岩永 2009，p.16）。以上から，老司Ⅰ式の作笵年代を690年前後に位置づけるとともに，製作年代も，瓦当裏面の周堤と新羅系軒丸瓦の検討から，作笵年代と同じ頃に上限を置けるだろうとした。

老司Ⅰ式亜型とⅡ式の年代は，小田氏によりⅠ式亜型が展開する筑後（井上廃寺）や肥後（陣内廃寺）と大宝律令の撰定に携わり，大安寺で僧尼令の講説を行った道君首名が和銅６（713）年から筑後国守，その後，肥後国守を兼任したことを関連付け710年代とした。さらにⅠ式亜型との関係からⅡ式を720年代とされている（小田 1998）。

なお，Ⅱ式は，高橋章氏が，和銅末～養老初期（714～721）頃（高橋 2007），石松好雄氏や栗原和彦氏はⅠ式と大差ない８世紀初頭頃としている（栗原 2002，石松 2010）。

２　五万長者遺跡の老司式軒瓦

まず，遺跡の概要を述べておく。

立地は雲仙火山群の北側に広がる扇状地のやや下部，栗谷川と多以良川に挟まれた標高60㍍ほどの小規模な台地状の高まりに位置する。

発掘調査は，1970年と1995年に実施された。1970年の調査では，顕著な遺構は確認されていない。1995年のトレンチ調査では，版築状の遺構や祭祀土坑が確認されている。版築状の遺構は，長辺が５㍍以上，短辺が２㍍以上，厚さは15㌢ほどである。黒色土を固めており，２～３層に分層できる。礎石の据付痕跡などは確認されておらず，瓦もほとんど出土していないことから，瓦葺建物との関係は不明である。出土瓦は，表採が多く総数50点ほどで，うち２点が軒平瓦である。トレンチの総面積が100㎡に及ぶことを考えれば，点数は非常に少ない。現地には，松尾貞明氏により1940年に建立された「五万長者旧跡」という石碑がある。この記念碑付近からもっとも多数の瓦が出土し，礎石とおぼしき大石も出土したというが（松尾 1952），現状では，細かな破片がかろうじて認められる程度である。

さて，出土した瓦であるが今回観察したのは，1997年の調査で出土した軒平瓦２点，熨斗瓦１点，丸瓦13点，平瓦32点である（註４）。**図４－１～５**の軒瓦は，個人所蔵であり実見できていない。

軒丸瓦（**図４**）

採集資料３点が確認されているが，瓦当完形の資料はない。そのため，中房蓮子・珠文・凸鋸歯文の数は，不明である。蓮弁や間弁との配置関係からみるなら，老司Ⅰ・Ⅱ式とほぼ同数と考えられる。

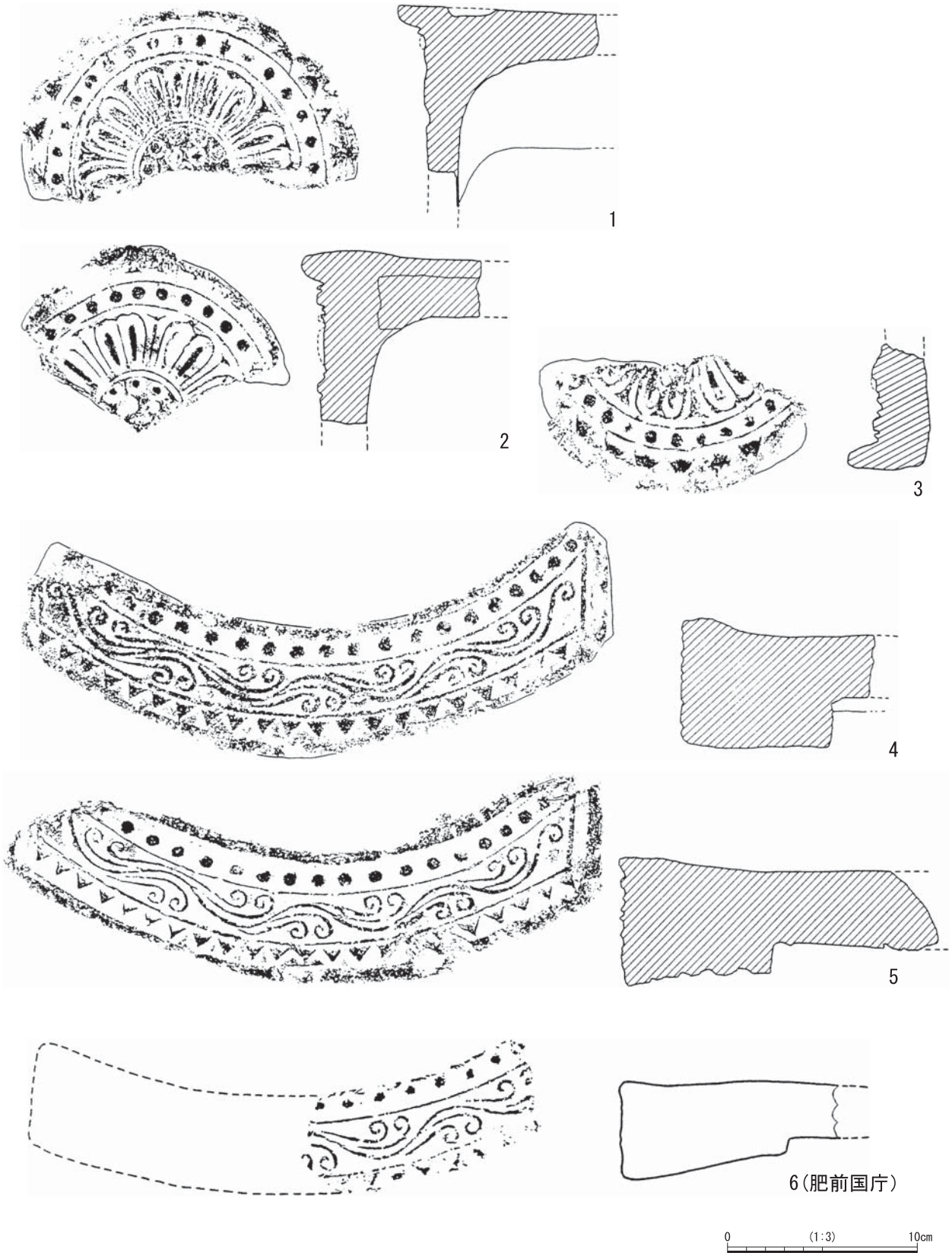


図４　五万長者遺跡・肥前国庁の軒瓦

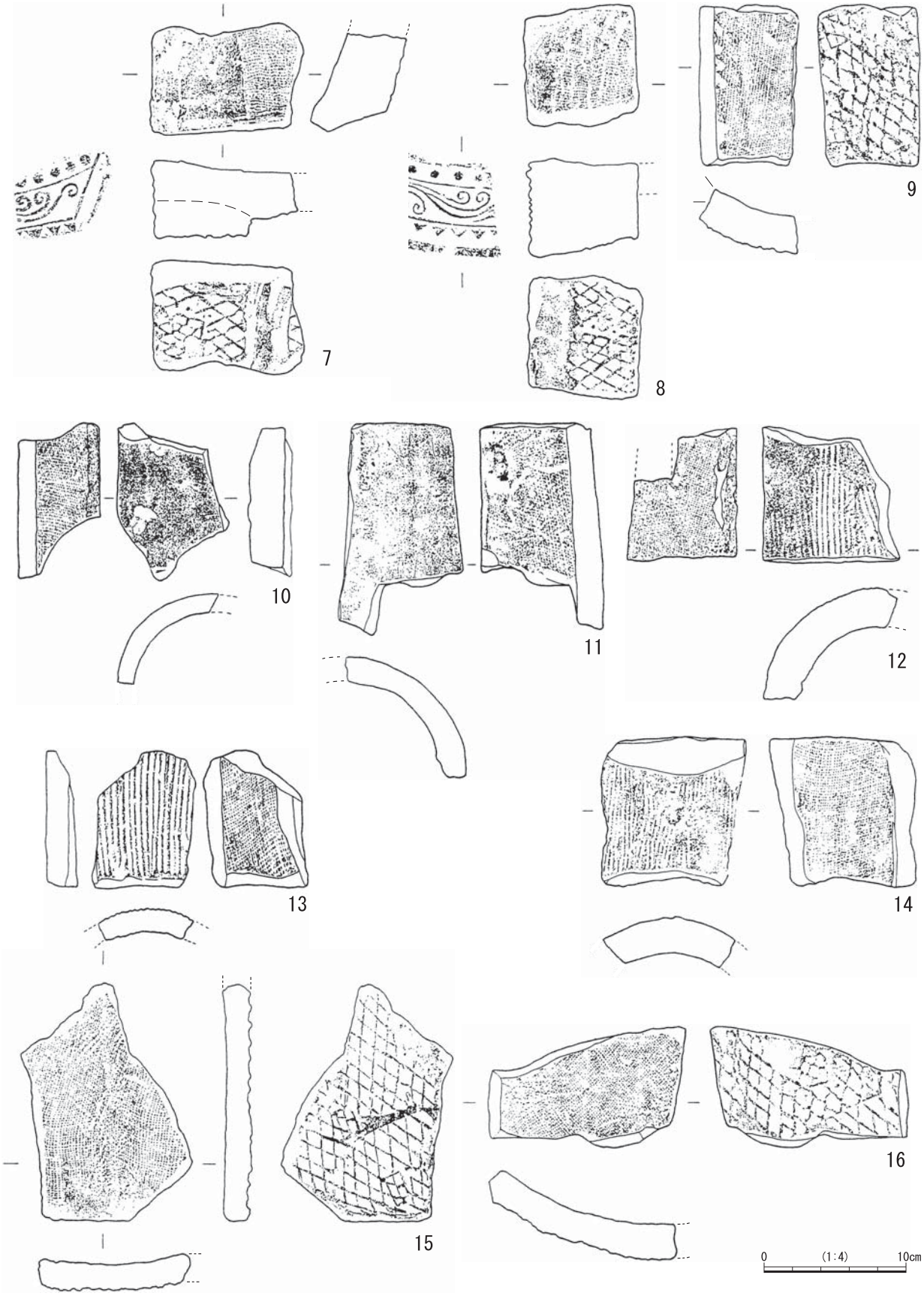


図５　五万長者遺跡の軒平瓦・熨斗瓦・丸・平瓦

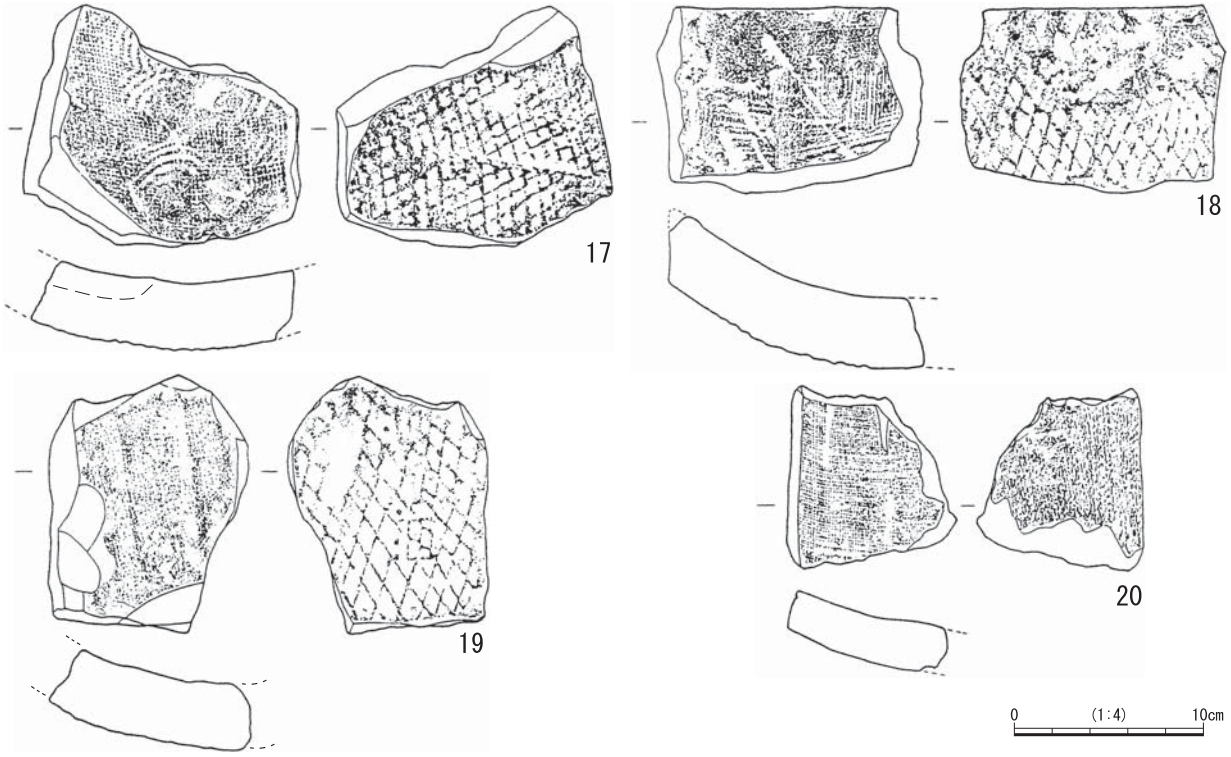


図６　五万長者遺跡の平瓦

珠文と凸鋸歯文は老司Ⅰ式と同じで対応関係にない。蓮弁は小田氏によれば，Ⅰ式に比べて「肉盛りや迫力にやや欠ける」とされる（小田 1981，p.247）。周堤の有無もはっきりしないが，瓦当下半が残る１点（３）に周堤は認められない。

軒平瓦（**図４・５**）

老司式とは唐草の流れる方向が逆になり，左から右に流れる偏向唐草文である。文様の配置は老司Ⅰ式を反転したもので，波状する茎から大支葉が派生し，それを７単位配する。大支葉２葉うち１葉は，茎に接する。上外区は，19個以上の珠文，下外区に22個の凸鋸歯文を配する。脇区は鋸歯文が省略されており無文である。凸面は，斜格子叩きで，顎面にも叩きが認められる。叩き板は１辺１㌢ほどの斜格子と，１辺１×２㌢ほどの長方形区画で脇に３個の珠点を刻む。顎は長さが６～７㌢ほどで粘土板貼り付けである（**写真１**）。なお，**７**の外区外縁について，凸面側は瓦当厚が短いため表出されていない。凹面側は削り飛ばされている。

熨斗瓦（**図５**）

９は，両側面が残る。一方は粘土円筒を分割した裁面があり，残りは打ち割った破面のままで未調整である（**写真２**）。もう一方は，割っていると思われるが，自然に割れた可能性もある。その場合は平瓦になるが，他の平瓦で，分割裁面を残すものはない。

丸瓦（**図５**）

玉縁式か行基式か不明であるが，**11**は行基式を想定させる。**10・11**は，凹面に粘土紐の痕跡を残す（**写真３**）。他にも３点認められる。凸面は，**10**がスリ消し，**11**が縦方向のヘラ削りである。残りは縦方向のカキ目である（**12～14**）。凹面に糸切り痕を残すことから粘土板作りである。胎土は，精良なものから，砂粒や小石を含むものまで様々である。焼成や色調も淡灰色で軟質なものから硬質で灰色を呈するものまである。

平瓦（**図５・６**）

写真１　顎貼り付け

写真２　分割裁面

写真３　粘土紐技法

15～19の凸面は斜格子叩きである。叩き板は，軒平瓦と同じ特徴がある。叩き目は複数あり，**17**は他より格子が細かい。**20**は縄目の細かい縄叩きである。他にも２点認められる。凹面は，いずれも幅３㌢前後の側板痕，糸切り痕，布目痕がある。その他，特徴的なものとして**16**の側面は，Ｖ字状のヘラ削り調整である。その他で側面が分かるものは，１面のヘラ削り調整である。**17**には同心円状のあて具痕が残る。桶から取り外した後に凸面を補足的に叩き締めた可能性があるが，その痕跡は認められない。また，断面に粘土板の閉じ合わせ痕跡が認められる。**18**の端部側は横方向のヘラ削り，残りは縦・横方向に板状工具によるナデ調整である。他の平瓦より厚みがあり，軒平瓦の胴部の可能性もある。いずれも胎土や焼成・色調は，丸瓦と同じである。

丸・平瓦の特徴を簡潔にまとめると，丸瓦は，行基式の可能性があり，凸面がカキ目調整では粘土板作り，スリ消しや削りでは粘土紐作りである。平瓦は，大多数が斜格子叩きで少量の縄叩きを含む。いずれも粘土板桶巻き作りである。

３　右偏向唐草文軒平瓦の類例

五万長者遺跡が所在する高来郡や隣接する彼杵郡・藤津郡に古代寺院は認められない。直線距離で約50㌔離れた寺浦廃寺（**図３－14**，肥前，佐賀県小城市），大願寺廃寺（**図３－15**，肥前，佐賀県佐賀市），有明海の対岸に位置し，約25㌔離れた立願寺廃寺（**図３－28**，肥後，熊本県玉名市）が周辺の寺院ということになるが，ともに近いとはいえない（九歴 1981）。そのため，造営にあたっては他所から支援を受けたと考えられる。五万長者遺跡特有の右偏向唐草文軒平瓦を手がかりとして技術の導入先を検討したい。

まず，老司Ⅰ・Ⅱ式が出土する大宰府周辺や観世音寺だが，この地域の軒瓦は『大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧』（九歴 2000）に網羅されている。ここには，軒丸瓦56型式88種，軒平瓦59型式97種の拓本・実測図が掲示されているが，類例は見当たらない。

次に老司Ⅰ式亜型が展開する筑後や肥後だが，井上廃寺，陣内廃寺，さらには老司式軒丸瓦が出土する立願寺廃寺においても類例は認められない。

遺跡が所在する肥前では，辛上廃寺（**図３－18**，肥前，佐賀県吉野ヶ里町），大願寺廃寺から老司系の軒瓦が出土している。いずれも表採資料で詳細は不明であるが，右偏向唐草文軒平瓦は見当たらない。さらに範囲を広げて肥前国庁（**図３－16**）や肥前国分寺（**図３－17**）の瓦を確認してみると，肥前国庁から，鴻臚館式軒瓦とともに，右偏向唐草文軒平瓦が出土していることを確認した（**図４－６**，佐賀県 1978・松本編 2006）。脇区が欠損しており，無文かどうか明らかでないが，珠文・鋸歯文・唐草の配置は類似していることから，ひとまず，同文瓦と考えられる。なお，この軒平瓦は，今回，実物を観察することができず，技法上の特徴は不明である（註５）。報告書を見る限りでは，肥前国庁・国分寺ともに五万長者遺跡特有の格子叩きは認められない。

4　軒瓦の年代

肥前国庁との同文関係が明らかになったが，ここで，軒瓦の年代を考えてみたい。

まず，老司式軒瓦との技法の比較から検討してみる。**表１**は，各型式の技法上の特徴を大雑把ではあるが，まとめてみたものである。これによれば，格子叩きという古い要素を残すものの，軒丸瓦では，粘土紐と板技法があること，軒平瓦の粘土板技法，顎部の粘土板貼り付け，顎面の叩き目をナデ消さない点などからみて，老司Ⅰ式の三宅廃寺や，老司Ⅱ式との類似性が認められる。老司Ⅱ式と同時期であるなら，小田説では720年代，古くみる石松・栗原説ならば，８世紀初頭ということになり，700～720年代が上限となる。

次に肥前国庁との関係から確認してみよう。国庁は鴻臚館式軒瓦が主体的に用いられており，右偏向唐草文軒平瓦は，補足的に用いられたと考えられる。大宰府政庁の鴻臚館式軒瓦の年代は，岩永氏により興福寺式軒瓦などとの比較検討から平城宮・京瓦編年第Ⅰ－２期（715～721）に当たるとされている。肥前国庁の鴻臚館式軒瓦は，政庁と文様が類似する（高橋 1983)。政庁の完成以後と考えるなら，720年代以降になる。以上のように技法の比較や鴻臚館式軒瓦との関係から，軒瓦の上限年代は，720年代とすることができる。次に下限だが，『続日本紀』によれば730年代の後半になると，天平７（735)・９（737）年，疫病（天然痘）の大流行，12（740）年，藤原広嗣の乱，14（742）年，大宰府廃止，17(745)年，大宰府復活と政治・社会的な混乱が続く(**表２**，註６)。また，天平19(747)年，国分寺建立督促の詔以後，造営が本格化した肥前国分寺からは老司式軒瓦や同文瓦は出土していない。以上から，軒瓦の作笵から製作時期は720～730年代前半までと考えられる。なお，発掘調査で出土した須恵器は８世紀前半が中心とされている。

5　瓦葺建物造営の背景

肥前国庁との同文関係が明らかになり，年代を720～730年代前半と示すことができた。造営の背景を検討する前に，ここで五万長者遺跡が寺院跡か郡衙跡かについて検討しておく。瓦葺建物が確認されていないため，遺構からは判断できない。一般的に郡衙で瓦葺が認められるのは，正倉である。東国で多く見られる事例で，西海道では，下高橋官衙遺跡（**図３－27**，筑後　福岡県太刀洗町）の正倉院から丸・平瓦が出土している（志賀 2004)。ただし，老司式軒瓦の出土事例をみると，寺院以外は，政庁や，国庁に限られることから，五万長者遺跡が郡衙関係遺跡になる可能性は少ないと考えられる。

高来郡の郡衙推定地として，五万長者遺跡から北西1.2㌔に位置する十園遺跡がある。土黒川の東岸にあたり５×３間，３×３間などの掘立柱建物が認められる。郡庁や，正倉などと性格が特定されている訳ではないが，郡衙の中心地であると考えられる。土黒川の下流は，1.6㌔で多比良港に至る。水運や海運の便を考えても，正倉は，十園遺跡周辺に存在したと考えられる。以上から，寺院跡の可

表１　老司式軒瓦の技法比較

型式	遺跡名	軒丸瓦			軒平瓦			
		周堤	丸瓦部	玉縁／行基	平瓦部	凸面調整	顎部	顎面
Ⅰ式	観世音寺	有	粘土紐	玉縁	粘土紐	格子	削り出し	
	三宅廃寺	有→無	粘土板，竹状模骨	行基	粘土板	縄叩き	粘土板貼付	
Ⅰ式亜型	井上廃寺	有	粘土紐	玉縁？	粘土紐	格子		
	陣内廃寺	有	粘土紐？		粘土紐	格子		
	五万長者	無	粘土板あるいは粘土紐	行基？	粘土板	格子	粘土板貼付	叩き目有
Ⅱ式	大宰府政庁	有→無	粘土紐	玉縁	粘土紐，一部粘土板	縄叩き	粘土板貼付	叩き目有

※五万長者遺跡の丸瓦部・平瓦部は資料が少ないため丸・平瓦から推定している。

能性が高いと考えられる。以後，本論考では五万長者廃寺と呼ぶことにしよう。ただし，散布している瓦が少量であること，軒瓦は１型式のみで，修理用の瓦は認められないことから，瓦葺建物は一堂程度で，存続期間も短かったと考えられる。

このような１堂規模の寺院が造営された背景を検討していきたいが，まず，古代における地方寺院造営の意義を確認しておこう。

山中敏史氏によれば「郡司級氏族による仏教受容は，新たに創出された後期評（天武朝後半から文武朝［７世紀第４四半期頃著者註］）・郡という地域社会における共同体秩序の安定化を意図し，郡司級諸氏族間の地縁的結合を構築し，支配層としての結束強化や在地支配の正当化を図る手段」として，また，譜代氏族重視の政策から，祖先崇拝などをとおした譜代性主張の場として機能したとされる（山中 2005，p.40）。

さらに，評衙・郡衙遺跡から２㌔程度以内の地域に位置し，評衙・郡衙と並存していた寺院を郡衙周辺寺院と位置づけられた。造営にあたっては，１氏族が造営したというよりも複数の郡司級豪族が参画していた蓋然性が高く，特定氏族の枠を超えた体制で造営され「護国祈願に代表される官寺的な機能と，郡領層を核として諸氏族の先祖崇拝や安寧祈願に代表される知識寺的な宗教活動機能との両機能を備えた準官寺としての歴史的特質」（山中 2005，p.41）を持つとされた。

この準官寺説は，三舟隆之氏により地方寺院に護国祈願などの公的機能は認められないとの反論がある（三舟 2013）。また，竹内亮氏は知識（「造寺・造像・写経などの仏事の遂行に際して財物や労働力を提供し仏事に結縁する人々」）の結集が，壇越（地方豪族などの造営主）による地方寺院の造寺を可能にしたとしている（竹内 2016，p.186）。

山中氏の研究から古代寺院の造営と新しい地方行政組織である評・郡制には関係がありそうなことが分かった。旧来の国造領域を再編するかたちで，高来に新たな創出された評制がどの地域の勢力を

表２　関連年表

年	月	記事
大宝２（702）年		薩摩国成立カ（永山 2009）。
大宝２（702）年	８月	薩摩・多禰を征討する。
慶雲４（707）年	４月	京・畿内と諸国の寺々で読経させる。
和銅６（713）年	４月	大隅国を設置。
和銅６（713）年	７月	隼人を討伐した将軍など有効者に勲位を授ける。
霊亀２（716）年	５月	寺院併合令。
養老４（720）年	２月	隼人の反乱，大隅国守を殺害。
	３月	勅を出して三百二十人を得度出家させた。
	９月	蝦夷の反乱，按察使を殺害。
養老５（721）年	５月	七道按察使・大宰府に命じて諸寺巡察。併合。
神亀２（725）年	７月	諸寺で金光明経あるいは最勝王経を転読。
天平２（730）年	３月	薩摩・大隅国の班田の見合わせ。
天平７（735）年	８月	疫病　大流行。
		大宰府の大寺と管内の諸寺で金剛般若経読誦。
天平９（737）年		疫病　大流行。
天平９（737）年	８月	七道諸国で最勝王経読誦。
天平12（740）年	９月	藤原広嗣の乱。
天平13（741）年	３月	国分寺建立の詔。
天平14（742）年	正月	大宰府廃止。
天平17（745）年	６月	大宰府再置。
天平19（747）年	11月	国分寺建立督促の詔。
天平勝宝８（756）年	12月	26ヶ国の国分寺へ仏具を施入。
天平神護２（766）年	６月	日向・薩摩・大隅国で調・庸を柵戸から取り立てないよう命じる。

官人として登用したのか，古墳の動向から推測してみたい。

高来郡の前方後円墳は２基しか確認されていない。４世紀代の守山大塚古墳（**図３－５**，雲仙市吾妻町）は，島原半島のつけ根部に位置する（辻田・小野 2010）。その後，空白期があり，６世紀後半に場所をかえて，五万長者遺跡から北西2.2㌔に倉地川古墳（**図２－５**，雲仙市国見町）が築かれる。内部主体は単室の横穴式石室で，７世紀まで追葬や墓前祭祀が行われる（竹中・織田 2005）。その他，北東0.7㌔には高下古墳，西0.3㌔には八反田古墳があり，いずれも単室の横穴式石室である。特に高下古墳は６世紀中葉の築造で，７世紀代まで追葬が認められる。石室は，安山岩の巨石を用いており，玄室の長さ3.3㍍，幅2.8㍍と周辺の石室のなかでは，もっとも規模が大きく首長墓だと考えられている。五万長者遺跡の周辺が６世紀代から，ひとつの中心勢力であったことが分かる。一方，諫早湾の北岸から奥部では，６世紀後半～７世紀初頭にかけて複室の横穴式石室墳である長戸鬼塚古墳（**図３－13**，諫早市小長井町），大峰古墳（**図３－11**，諫早市小長井町），一本松古墳（**図３－７**，雲仙市愛野町）が築かれ，大峰古墳は，前方後円墳の可能性も指摘されている。さらに長戸鬼塚古墳や丸尾古墳（**図３－12**，諫早市小長井町），善神さん古墳（**図３－10**，諫早市高来町）では線刻壁画が認められる（長崎県 1997）。ここにも，ひとつの勢力が存在したようだ。この状況は奈良時代になっても大きな変化はないようで，条里の遺存地割を確認してみると，諫早湾周辺（**図３－６・８・９**）に田井原，小野，山田・守山，島原半島北岸（**図３－２～４**）に，伊古，神代，真正寺の条里が認められる（長崎県 1998）。これらの古墳や条里の状況から，島原半島北岸と諫早湾奥部周辺の２つの地域の豪族が，評の長官である評督や次官の助督，のちの郡の大領，少領として登用されたのであろう。山中氏の考えに従うのなら，これら地域の「共同体秩序の安定化」，「郡司級諸氏族間の地縁的結合」，「支配層としての結束強化」のために寺院が創建されたといえる。ただし，それだけでは，肥前国庁と同文関係にある瓦が720～730年前半に高来郡にもたらされた答えとは言いがたい。

高来評・郡がいつ成立したか，はっきりしないが，評制は，孝徳朝（大化５［649］年）に全国で全面施行された説が有力であり，その他，孝徳朝から持統朝にかけて段階的に施行された説がある。また，地方で寺院が増えるのは，天武14（685）年の諸国への仏舎造営の詔とも対応して７世紀第４四半期～８世紀第１四半期である。評制の施行や，地方寺院の造営状況からみると720年代という時期は，かなり新しい。

次に老司式軒瓦を伴う寺院の動向や文献史料による大宰府管内の様子から造営の背景を検討してみよう。寺院の動向が分かるものに，陣内廃寺がある。菱田哲郎氏は，観世音寺式伽藍配置である九州の観世音寺，陣内廃寺，東北の多賀城廃寺，郡山廃寺などの事例から「東西南北の要衝に布教の拠点としてⅡＡ類（観世音寺式，著者註）の伽藍配置を持つ寺院が設けられた可能性を指摘」（菱田 2005, p.41）した。さらに，『日本書紀』の記事から持統朝に蝦夷や隼人への布教，護国経典である金光明経が諸国へ配布され，正月に読誦されたことから「持統朝には国家領域が強く意識され，版図内にあまねく仏教を普及させ全国一律の法会の開始など，国家仏教の色彩が濃くなっていく経過を知る」ことができるとともに，「隼人と蝦夷という境界の住民に積極的に仏教をひろめるところに，国家統一の思想としても仏教が機能している」（菱田 2005, p.42）とした。

さらに研究を深化させた貞清世里氏・高倉洋影氏は，先に上げた寺院と秋田城Ⅰ・Ⅱ期寺院（後身堂の前廃寺），薩摩国分寺は，いずれも観世音寺式伽藍配置であり「隼人・蝦夷を含む外敵から仏教で日本列島を守護する，鎮護国家の寺院」（貞清・高倉 2010, p.43）であるとした。また，陣内廃寺は，「創建当時，隼人対策の最前線におかれた南端の異賊調伏の寺院であったのだろう」（貞清・高倉 2010, p.38）としている。

陣内廃寺は，隼人への仏教布教の拠点であり，異賊調伏の寺院との考え方が示されている。五万長者廃寺の場合はどうだろうか。隼人や大宰府管内の仏教に関わる記事を『続日本紀』から確認してみたい（**表２**）。

８世紀初頭，薩摩国・大隅国が成立する一方で，隼人の反乱が頻発しており，記録による限り最大規模の戦闘が養老４（720）年２月に発生している。鎮圧には１年数ヶ月を要したが，これ以後，反乱の記事はなくなり，隼人への支配体制が進んだと考えられる。ただし，天平２（730）年には，班田の見合わせ，天平神護２（766）年，日向・大隅・薩摩に柵戸の記事が見られること，さらに養老律令の職員令（井上他 1976）によれば，日向・薩摩・大隅の国守には，治安維持（「鎮捍」，「防守」）や外交（「蕃客」，「帰化」）の任務があったことなどから，８世紀代を通して隼人の公民化が律令政府にとって，ひとつの課題であったといえる。また，養老４年は，蝦夷でも反乱があり，列島の南では国司，北では按察使が殺害されるという律令体制を脅かす争乱が発生した１年であった。

仏教関係では，隼人反乱の翌月，養老４年３月に「勅を出して三百二十人を得度出家させた」とある。養老５（721）年５月には，霊亀２（716）年５月の寺院併合令を受けて，「七道の按察使および大宰府に命じて，諸寺を巡察させ，便宜により適宜併合」させている。これは，一般的に藤原武智麻呂が近江国の様子を述べたように一郡一寺どころか，一郷一寺ともいうべき乱立した寺院の併合を目的にしたとされている。ただし，大宰府管内では，例えば肥前国のように11郡中，６郡にしか古代寺院の存在は確認されておらず，郡内に一寺もない，もしくは創建されていても，瓦葺もままならない堂舎を目の当たりにしたのではないだろうか。

神亀２（725）年７月，国家平安のために諸国に詔して「諸寺院の境内はつとめて払い清めよ。そのうえで僧尼に金光明経を読ませよ。もしこの経がなければ，最勝王経を転読」とある。また，天平７（735）年８月，大宰府管内での疫病に対して「大宰府の大寺と別の国の諸寺に，金剛般若経を読誦」せよとある。天平９（737）年８月には，全国的な疫病の流行により，七道諸国の僧尼に最勝王経の読誦を命じている。720～730年代に諸寺で国家の平安や疫病平癒のために経典が読まれている。

五万長者廃寺の場合，瓦葺建物造営の理由が疫病対応ならば，隣接する彼杵郡・藤津郡にも認められて良い。肥前国の南端に位置する高来郡のみであることから，対隼人関係の可能性が考えられないだろうか。隼人反乱のさなか，管内の諸寺を巡察した大宰府は，肥後国では，南端に観世音寺式伽藍の陣内廃寺があるのに対して肥前国の南端に位置する高来郡には，瓦葺建物が存在しないことを確認したことであろう。肥前国としては，国家の平安や護国祈願のために，１堂であっても，瓦葺堂舎を整備する必要があったのでないだろうか。今回は，国庁の瓦について実物の観察ができなかったため技術支援の詳細は不明とするしかないが，この点は，今後の課題としたい。

以上のように，瓦葺建物は，在地の事情というよりも，仏教による隼人に対する異賊調伏や国家平安の祈願という中央の意向のもと造営されたと考えた。事実，五万長者廃寺の瓦葺建物は，軒瓦が１型式のみで補修瓦が認められないことから，１堂規模から七堂伽藍に発展することもなく存続期間は短かったと考えられる。これも，隼人への支配体制が進み，薩摩・大隅に国分寺が造営されることで，当初の意義が失われたことが原因であろう。

おわりに

－瓦葺建物と五万長者廃寺の創建－

改めて，今まで述べたことをまとめておく。

１　軒瓦の技法は，老司Ⅰ式の三宅廃寺やⅡ式と類似する。

2　右偏向唐草文は，肥前国庁出土瓦と同文の可能性を指摘した。

3　年代は，他の老司式との比較や肥前国庁での状況，さらには天平７・９年の疫病による影響や肥前国分寺で同文瓦が認められないことから，720～730年代前半と考えた。

4　瓦葺建物造営の背景として，陣内廃寺の動向や，隼人の反乱（養老４年），諸寺での国家平安祈願（神亀２年）などの政治・社会的な状況のもと，中央の意向で，隼人に対する護国祈願に関連して造営がなされたと理由付けた。

以上であるが，ここまで五万長者廃寺の創建ではなく，あくまで瓦葺建物の創建と造営事情について検討してきた。これは，近年，非瓦葺寺院の存在や，瓦の年代＝寺院の創建ではないという考えが提示されているからである（山中 2005，山路 2013）。彼杵郡衙推定地の周辺を調査した竹松遺跡では，瓦塔や鉄鉢形須恵器が出土しているが瓦の出土は認められないようである（註７）。詳細は報告書の刊行をまって検討すべきだが，彼杵郡の郡衙周辺寺院として非瓦葺寺院が存在した可能性がある。高来郡においても十園遺跡の開始期間は，７世紀末あるいは７世紀後半とも考えられている。郡衙との関係から五万長者廃寺は非瓦葺寺院として，720年代以前に創建された可能性を指摘しておきたい。いずれにしても，再度の調査により堂舎や寺域の確定が切に望まれる。

五万長者遺跡の瓦に関心を持ったのは，2002～2003年に行われた長崎奉行所（現歴史文化博物館）の調査に参加した時からである。当時，前職であった奈文研飛鳥・藤原宮跡発掘調査部から国際航業（現国際文化財）に移って３年ほどしか経っておらず，藤原宮式と良く似た五万長者遺跡の軒瓦に親しみを覚えたものである。一方，どのような事情で，西海の果てに老司式軒瓦が持ち込まれたのか，はなはだ疑問であった。

本論で述べたようにここ十数年の間に，藤原宮式や老司式の研究は格段に進んだ。それらを十分理解して論旨を展開できたか不安ではあるが，ひとまず，ここに長年の疑問にひとつの答えを提示することにする。

【註】

註１　五万長者遺跡は，伝五万長者屋敷跡とも呼ばれていたが1995年の長崎県による重要遺跡範囲確認調査時に五万長者遺跡に改称されている。また，従来までの研究は，川道寛氏によりまとめられている（川道編 1997）。

註２　「郡寺」とも呼ばれるが，この用語は文献史料上認められないこと，学術用語として多様な意味で用いられていることから，本論考では，山中敏史氏が設定した「郡衙周辺寺院」を用いる（山中 2005）。五万長者遺跡が「郡寺」であることは本馬貞夫氏により指摘されている（本馬 1996）。

註３　老司式・鴻臚館式軒瓦の研究史は岩永省三氏により詳細にまとめられている（岩永 2009）。

註４　資料調査は，2016年２月22日，雲仙市歴史資料館国見展示館において実施した。軒平瓦は，肥前国庁資料の拓本を原寸に拡大し，実物との比較照合をした。調査にあたっては，辻田直人氏のご配慮を得た。

註５　資料調査は，2016年２月24日，佐賀県文化財調査研究資料室において実施した。残念ながら，実物を確認することができなかった。調査にあたっては，立石和也氏のご配慮を得た。

註６　『続日本紀』は，青木和夫他校注1989～1998『続日本紀』一～四を参照した。文中の括弧内の引用箇所は，宇治谷孟1992『続日本紀　全現代語訳』（上・中）を用いている。

註７　読売新聞長崎版2015年10月27日。

【引用・参考文献】

青木和夫他校注　1989～1995『続日本紀』一～四　新日本古典文学大系12～15　岩波書店

石田由紀子　2010「藤原宮出土の瓦」『古代瓦研究Ⅴ－重弁蓮華文軒丸瓦の展開－　－藤原宮式軒瓦の展開－』奈良文化財研究所

石松好雄　2010「大宰府史跡出土の老司式軒瓦－老司Ⅱ式を中心に－」『坪井清足先生卒寿記念論文集－埋文行政と研究のはざまで－』下巻　坪井清足先生の卒寿をお祝いする会

井上光貞他校注　1976『律令』日本思想大系３　岩波書店
岩永省三　2009「老司式・鴻臚館式軒瓦出現の背景」『九州大学総合研究博物館研究報告』№７　九州大学総合研究博物館
宇治谷孟　1992『続日本紀　全現代語訳』（上）・（中）　講談社学術文庫
宇野愼敏　2015「肥前西部の古墳時代後・終末期古墳に見る地域間交流」『高野晋司氏追悼論文集』高野晋司氏追悼論文集刊行会
榎本義嗣　2009『老司瓦窯跡－第１・２・３次調査報告－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1062集　福岡市教育委員会
小田富士雄　1979「長崎県高下古墳」『九州考古学研究　古墳時代篇』学生社
小田富士雄　1981「伝五万長者屋敷跡」『九州古瓦図録』柏書房
小田富士雄　1995「肥前の奈良時代寺院跡『風土記の考古学』第５巻　同成社
小田富士雄　1998「古瓦からみた井上廃寺建立の諸問題」『井上廃寺Ⅰ』　小郡市文化財調査報告書122集　小郡市教育委員会
小田富士雄　2011「老司氏軒瓦の再検討」『古文化談叢』第66集　九州古文化研究会
小田富士雄　2013『古代九州と東アジアⅡ』同成社
梶原義実　2009『国分寺瓦の研究－考古学からみた律令期生産組織の地方的展開－』名古屋大学出版会
片岡宏二編　1998『井上廃寺Ⅰ』小郡市文化財調査報告書第122集　小郡市教育委員会
金田一精　1997「文様・技法からみた肥後の古瓦」『肥後考古』第10号　肥後考古学会
川道寛編　1997「五万長者遺跡」『県内重要遺跡範囲確認調査報告書』Ⅴ　長崎県文化財調査報告書第133集　長崎県教育委員会
栗原和彦　2002「瓦塼類」『大宰府政庁跡』九州歴史資料館
古代瓦研究会　2010『古代瓦研究Ⅴ－重弁蓮華文軒丸瓦の展開－　－藤原宮式軒瓦の展開－』奈良文化財研究所
九州歴史資料館　1981『九州古瓦図鑑』柏書房
九州歴史資料館　2000『大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧』
九州歴史資料館　2002『大宰府政庁跡』
九州歴史資料館　2005～2007『観世音寺　伽藍編・寺域編・遺物編１・遺物編２・考察編』
齋部麻矢　2010「九州における老司式軒瓦の展開」『古代瓦研究Ⅴ－重弁蓮華文軒丸瓦の展開－　－藤原宮式軒瓦の展開－』奈良文化財研究所
佐賀県教育委員会編　1978『肥前国府跡Ⅰ（第１次～第３次発掘調査報告書）』佐賀県教育委員会
坂本太郎他校注　1969『日本書紀』下　日本古典文学大系68　岩波書店
貞清世里・高倉洋影　2010「鎮護国家の伽藍配置」『日本考古学』第30号　日本考古学協会
佐原真　1972「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌』第58巻２号　日本考古学会
志賀崇　2004「Ⅲ－９　瓦葺建物の比率と時期」『古代の官衙遺跡Ⅱ　遺物・遺構編』　奈良文化財研究所
杉原敏之　2007「老司Ⅰ式軒瓦」『観世音寺―考察編―』九州歴史資料館
高橋　章　1983「鴻臚館系瓦の様相」『大宰府古文化論叢』下吉川弘文館
高橋　章　2007「観世音寺金堂の創建年代について（第１～３節）」『観世音寺　考察編』九州歴史資料館
竹内　亮　2016「古代の造寺と社会」『日本古代の寺院と社会』塙書房
竹中哲朗・織田健吾　2005『龍王遺跡（倉地川古墳）』雲仙市文化財調査報告書（概報）第１集　雲仙市教育委員会
竹中哲朗・辻田直人　2004『十園遺跡』国見町文化財調査報告書（概報）第４集　国見町教育委員会
竹中哲朗・辻田直人　2005『十園遺跡Ⅱ』国見町文化財調査報告書（概報）第５集　国見町教育委員会
辻田直人・小野綾夏　2010『守山大塚古墳』雲仙市文化財調査報告書第７集　雲仙市教育委員会
角田文衛編　1987『新修国分寺の研究　西海道』第５巻下　吉川弘文館
長崎県教育委員会　1997『原始・古代の長崎　資料編Ⅱ』
長崎県教育委員会　1998『原始・古代の長崎　通史編』
永山修一　2009『隼人と古代日本』同成社古代史選書６　同成社
菱田哲郎　2005「古代日本における仏教の普及－仏法僧の交易をめぐって－」『考古学研究』第52巻３号　考古学研究会
本馬貞夫　1996「五万長者屋敷跡」『図説長崎県の歴史』河出書房新社

松尾貞明　1952『多比良町郷土誌』多比良町郷土誌刊行領布会
松本隆昌編　2006『国史跡　肥前国庁跡保存整備事業報告書－遺物・整備編－』佐賀市文化財整備報告書第１集　佐賀市教育委員会
松本雅明　1960『陣内廃寺調査報告』城南町史編纂会
三舟隆之　2013「補論『郡衙周辺寺院説』批判」『日本古代の王権と寺院』名著刊行会
山路直充　2013「龍角寺創建の年代」『古墳から寺院へ－関東の７世紀を考える－』考古学リーダー22　六一書房
山中敏史編　2005『地方官衙と古代寺院―郡衙周辺寺院を中心として－』奈良文化財研究所
山中敏史　2005「地方官衙と周辺寺院をめぐる諸問題－氏寺説の再検討－」『地方官衙と古代寺院―郡衙周辺寺院を中心として－』奈良文化財研究所

【図版出典】

図１：藤原宮式（石田 2010），老司式（齋部 2010），五万長者（川道編 1997）　図２～３：著者作成
図４：五万長者（川道編 1997），肥前国庁（松本編 2006）　図５～６　五万長者（川道編 1997），著者一部加筆
写真１～３　著者撮影

平成28年度　長崎県考古学大会のお知らせ

長崎県考古学会事務局

1　期　日　　平成28年12月17日㈯・18日㈰

2　会　場　　大村市市民交流プラザ（大村市本町アーケード内）

3　趣　旨　　長崎県考古学会では，これまで有明海周辺地域を取り巻く弥生時代の遺跡とその文化交流について，九州全域の研究者たちの参加を得て幅広い議論を行ってきた。

また県内の古墳集成を行い，長崎地方の古墳文化の多様性についても論じてきた。

今大会では，九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に伴う大村市竹松遺跡の大規模調査で判明した，古代官衙を匂わせる遺構や遺物の数々，また10世紀の中国「越州窯青磁」の大量出土，豪族の居館跡や倉庫群の発見など，長崎県地方の古代・中世に関する重要な発見に着目したい。

また11世紀前後から西彼杵半島の鉱脈で生産され，全国に流通する石鍋等に着目し，海の航路を活用して行われた国内各地との交易や，広く中国大陸との東シナ海交易などに焦点を当て，竹松遺跡で発見された数々の遺構や遺物から，古代長崎を取り巻く国際状況とその交流について議論する。

この問題は，県内における考古学的成果だけで語ることのできない交流の諸問題を含んでおり，国内で活躍する第一線の幅広い研究者たちを招き，長崎県ならではの視点で研究討議を行いたい。

4　発表者並びに研究者　　調整中

5　内　容　　発表とパネルディスカッション

6　入場料　　無料

7　資料集　　当日資料として，発表者の論点をまとめた説明資料のほか，竹松遺跡の遺構・遺物，石鍋，石塔などの資料をまとめた資料集を刊行する。

大村湾沿岸地域一帯における瓦器椀の再検討

―肥前南部型瓦器椀を中心として―

柴　田　　亮

はじめに

11世紀から13世紀代の大村湾沿岸地域は，一定量の貿易陶磁が出土することで知られ，その要因には，大陸に近く日宋貿易の交易ルート上に位置しているという地理的要素が挙げられている（宮崎 1994）。この地域の中でも，東彼杵町に所在する白井川遺跡は貿易陶磁が出土遺物の６割を超える割合で出土することから，複数の研究者が拠点的性格を想定している（大庭 1999，橋本 2003等）が，大村湾沿岸地域についての流通論は，その後深化してこなかった。これには大きく二つの理由があると考えられる。

一つは流通の分析を行う際に，貿易陶磁に依拠しすぎたことである。大村湾沿岸地域で一定量出土する貿易陶磁は，遺跡や遺構の年代推定に有効であっただけでなく，貿易陶磁のもつ外来的性格が我が国での対外貿易活動に関連付けやすかった。また，大陸に近いという長崎県の地理的要素が対外貿易との関係を理解しやすくし，結果的に大村湾沿岸地域を日宋貿易という大きな構造の中に関連づけることを容易にしたのである。しかし，この容易さは，当地域がその貿易構造の中でどのような役割を果たしたのか，あるいはなぜそのような位置づけに至ったのか，といった歴史的背景を考察する視点から遠ざかるという問題点も生じさせてしまったと思われる。

そして，もう一つの問題は在地土器研究に関することである。先述のように，大村湾沿岸地域では在地土器の編年が確立されていないため，遺跡等の分析を行う際の年代的指標は主に貿易陶磁によらざるを得ない。しかし，貿易陶磁が耐久消費財と呼称され，一型式の時期幅が約50年という土師器等の在地土器型式に比べて，やや広く設定してあること（山本信夫編 2000）は周知のことである。また，在地土器研究は時間軸のみならず，地域内の工人集団や地域内での土器の供給圏といったモノの流通の実態を把握するために不可欠であろう。

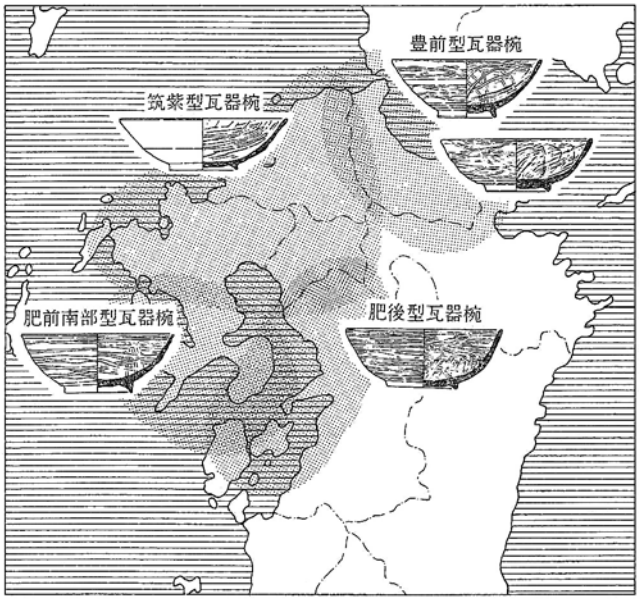
この二つの問題は有機的に関係するもので，両者を解決することでようやく大村湾沿岸地域は，我が国の中世社会における研究の俎上に上がることができると考えられる。そこで本論では，大村湾沿岸地域の在地土器について述べることとしたい。

１．研究史

前章では大村湾沿岸地域において在地土器研究を行う重要性を述べた。大村湾沿岸地域において瓦器椀については，森隆氏を始めとした（森 1992・1993の等），研究の蓄積がある。九州地域の瓦器研究については，美濃口雅朗氏によって研究史の概略がまとめられているため（美濃口 2006），ここでは大村湾沿岸地域の瓦器椀に関係する研究史を中心に概観していくこととしたい。

九州系瓦器椀（註１）研究の先駆けとなるのは森田勉氏の論考である。森田勉氏は，九州地方の瓦器椀について，成形技法等から筑前タイプと豊前タイプに大別し，前者は遠賀川流域以西から肥前西部地域まで，後者は遠賀川以東から宇佐地方までの豊前国全域に及ぶと指摘した（森田勉 1995b）。

森田氏の論を踏まえた森氏は，九州系瓦器椀を広域等質型の筑紫型とその他の縁辺在地型と捉え，製作技術から見た広域地域圏と，各属性から見た小地域圏を提示した。この中で，東彼杵郡東彼杵町



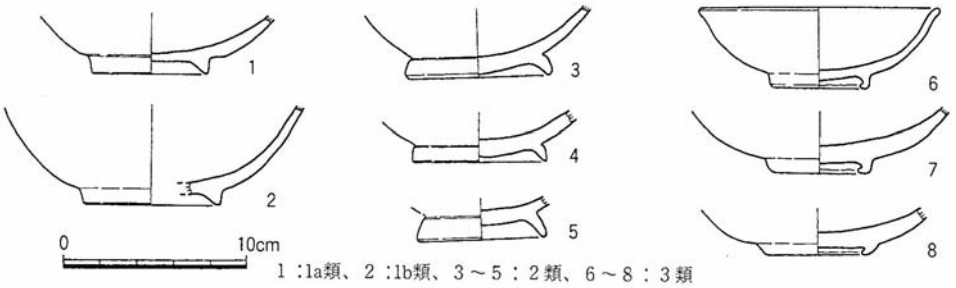
第１図　九州系瓦器椀の地域型分布図
（森1992から転載）

蔵本郷白井川に位置する白井川遺跡を標識遺跡として肥前南部型を抽出し，大村湾から天草諸島北岸まで分布すると述べた（**第１図**）。肥前南部型の特徴は，①高台径が小さく，体部が内湾気味に大きくひらく深椀基調の器形，②非押し出し技法（註２），③体部外面のヨコナデの稜線上に，横方向の幅広のヘラミガキを加える点，④カーボンの吸着が平均的である点，⑤内面のヘラミガキに規則性がない点を挙げた。肥前南部型の製作時期については12・13世紀を想定している（森 1992・1993ｂ）。

森田氏が提示した押し出し技法の分布圏にあった西北九州一帯において，肥前南部型は非押し出し技法を用いた型式と考えられていたが，徳永貞紹氏は佐賀平野一帯の瓦器椀について検討し，佐賀平野で出土する肥前南部型に押し出し技法の特徴は認められないとしながらも，体部の器形変化点に器壁が厚くなる箇所があることから，肥前南部型は押し出し技法で製作された可能性を指摘した（徳永 1996）。

美濃口氏は，徳永氏の指摘を受けて天草市浜崎遺跡出土の肥前南部型を再検討し，成形に押し出し技法が用いられた可能性を追認している（美濃口 2006）。また，肥前南部型が熊本市陣内上ノ園遺跡からも確認できることから，主に長崎県南西部の沿岸地域を中心として，天草地方や佐賀県南西部，散発的に周辺地域にも分布しており，共伴資料からみて概ね12世紀末～13世紀前半に位置づけられるとした。

筆者は，大村湾沿岸地域の出土遺物を網羅的に計量し，瓦器椀の出土量と肥前南部型の点数を示した。加えて，大村湾沿岸地域に天草型（**第２図**，註３）が出土することを提示した（柴田 2015）。



第２図　天草型分類図（美濃口 2006から転載）

２．問題の所在と研究の方向性

これまでの研究によって，肥前南部型と天草型の分布範囲や，肥前南部型の成形技法，帰属時期などが指摘されているものの，森氏が指摘するように肥前南部型の型式的特徴については，その系譜関係が明らかになっていない（森 1993b）。また，肥前南部型が出土する地域それぞれにおける，基礎資料の整理が不十分であるため，地域同士の比較検討が困難であることも問題点として挙げられる。

これらの課題を解決していくためには，まず基礎資料を整理することが必要である。筆者は以前，主に大村湾沿岸地域の遺跡を対象として遺物の数量分析を実施したが，対象遺跡の中で，分析に耐えうる瓦器椀がみられるのは白井川遺跡であった。また，先述のとおり，天草諸島では，浜崎遺跡から肥前南部型が出土したことが知られている。よって，本論では，白井川遺跡と浜崎遺跡の資料を中心に，両地域の検討を行うこととする（註４）。

３．資料の再整理

まず，対象となる遺跡について簡単な概略を述べ，遺物の検討を行う。

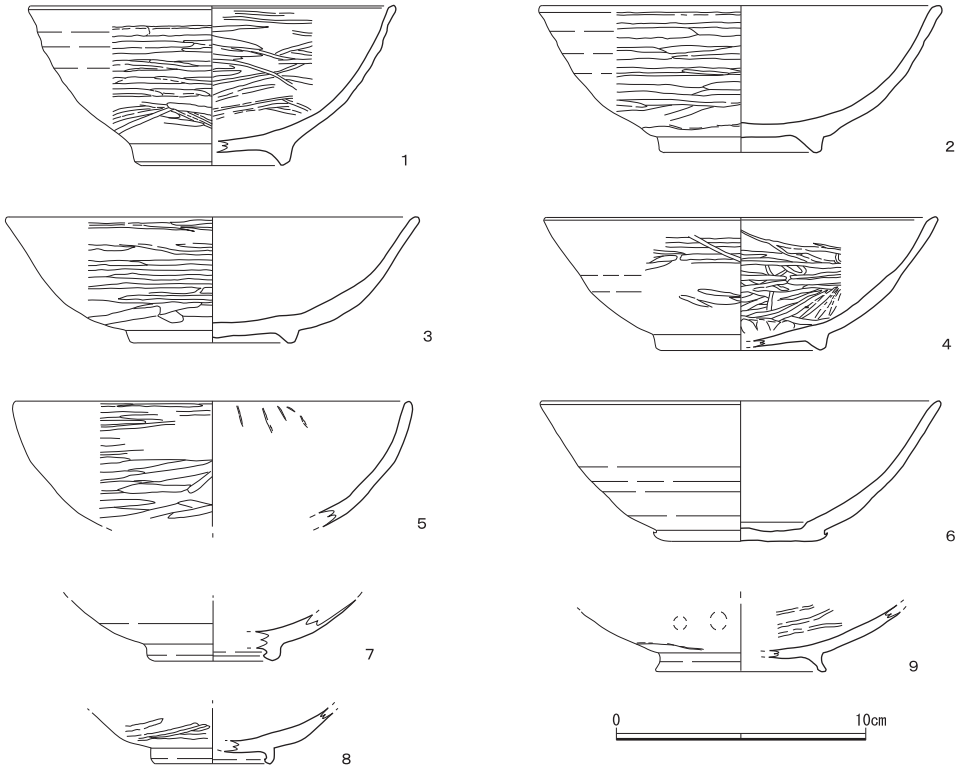
白井川遺跡は東彼杵郡蔵本郷に所在する遺跡である。彼杵川の両側は小高い地形になっており，谷地形を彼杵川が流れている。白井川遺跡は，この彼杵川の下流域に位置している。長崎県教育委員会によって調査が行われており，縄文時代から中世期の遺物が出土している（安楽編 1989）。この中で，中世前期の遺物は一定の出土量がみられ，その分析によって複数の研究者が拠点的性格を想定していることは先に述べた。

もう一つの浜崎遺跡は，熊本県天草市本渡町に所在する。本渡町は天草諸島のうち，もっとも南部にある下島に位置する。下島を有明海で隔てた北方には島原半島が位置しているが，両者の距離は直線距離でおよそ20㌔と非常に近いものである。下島の地形は，300～500㍍程度の低い山地を中心とした地形であり，山地から流れる川の下流域には，小規模な平野が作られる。浜崎遺跡は，下島の北東部に広がる最も広い平野部の上に立地する。瓦器だけでなく中世前期代の貿易陶磁が一定量出土しており，地域内の拠点的性格が想定されている（平田編 1993）。

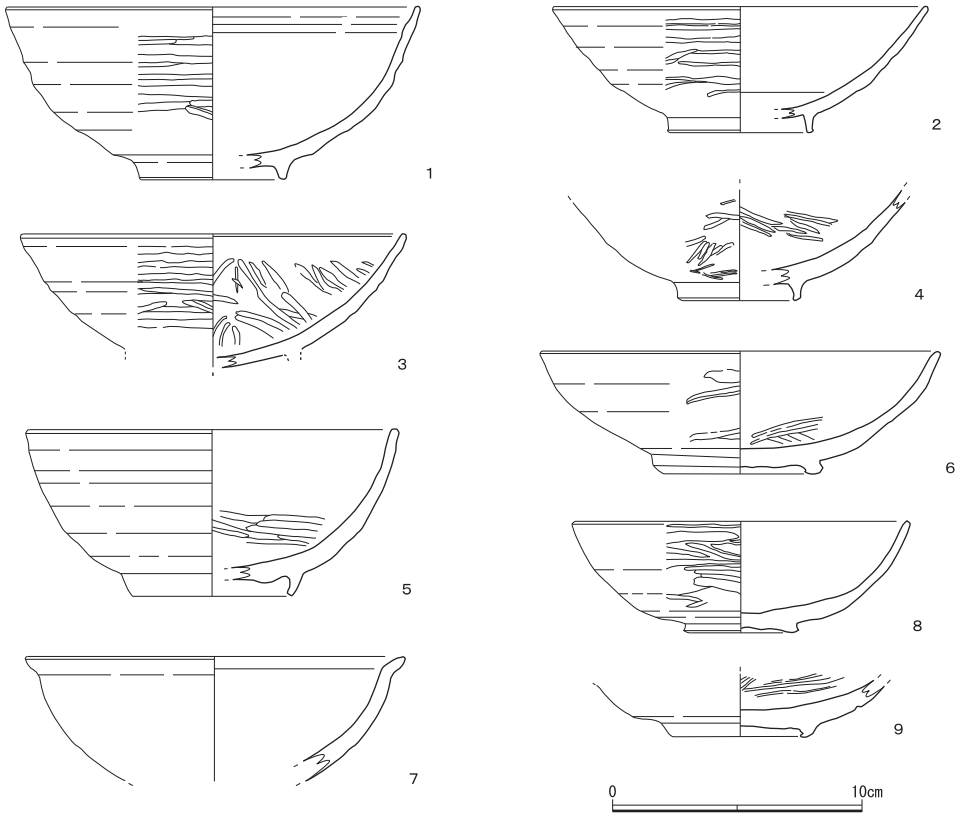
ａ．白井川遺跡（大村湾沿岸地域）

1は，深椀の形状で腰部がやや外側に張り，口縁部に向けて直線的に立ち上がる。体部外面の成形時にできた稜の上に横位のヘラミガキ，体部内面には不定方向のヘラミガキが施される。体部下半は，不定方向のミガキが施される。やや径の小さい高台であり，断面逆台形上を呈し，器壁は薄い。**2**は，体部外面の稜線上に横位のヘラミガキが施される点において**1**と共通するが，やや浅椀の形状を呈する。体部中位から緩やかにのびる口縁部であり，外面のミガキの単位がやや大きい。高台は逆三角形状で，貼付けた後のナデ痕が明瞭に残る。器壁はやや厚く，平均的な厚みであるが，体部中位部分で明確に稜が生まれる箇所が認められる。**3**は浅椀の形状を呈する。体部下半の器壁が厚く，張り出した腰部から緩やかに外反した口縁部がのびている。体部外面の稜線上に横位のヘラミガキが施されるが，ミガキが密な箇所とそうでない箇所が認められる。体部下半はミガキの単位が大きく，ミガキが荒くなる。高台は低く，断面が逆三角形状であり，高台内面には糸切り痕が残る。**4**は，浅椀の形状である。張り出した腰部からやや内湾した口縁部がのびる。体部中位に，明確に器壁が変化する箇所がある。体部外面のヘラミガキはあまり施されていないが，体部内面には不定方向のヘラミガキが密に施される。**5**は口縁部から体部まで残存する。腰部から体部中位まで器壁が直線的にのび，口縁部にかけて緩やかに内湾する。体部外面にはヘラミガキが施されており，口縁部付近はミガキの幅が細

第３図　肥前南部型瓦器椀・天草型瓦器椀出土遺跡分布図



第４図　白井川遺跡出土瓦器椀実測図（Ｓ＝1/3，筆者実測トレース）



第５図　浜崎遺跡出土瓦器椀実測図（Ｓ＝1/3，筆者実測トレース）

く，腰部にかけて次第にミガキの幅が広くなる。体部内面のミガキは明瞭でないが，ヘラ状工具を縦位に当てた痕跡が数条残っている。**6**は，底部が未成形だが器壁の厚みがほぼ均等で，丁寧に作られている。腰部から口縁部にかけて直線的にのび，口縁端部は緩やかに外反する。ヘラミガキは明瞭でなく，炭素の吸着も行われていないが，器形や作りの丁寧さから，瓦器の未製品と想定される。**7**は須恵質で，高台端部が内側に折り込まれている。明瞭なヘラミガキは見られず，腰部は外側に開く。**8**も**7**と同様に高台端部を内側に折り込んでいる。須恵質で腰部に横位のヘラミガキが見られるが，密には施されていない。**9**は全体的に器壁が薄い。高台形もほかの瓦器椀と異なり，外側に反る細いものであり，体部外面にユビオサエの跡が残る。

ｂ．浜崎遺跡（天草諸島）

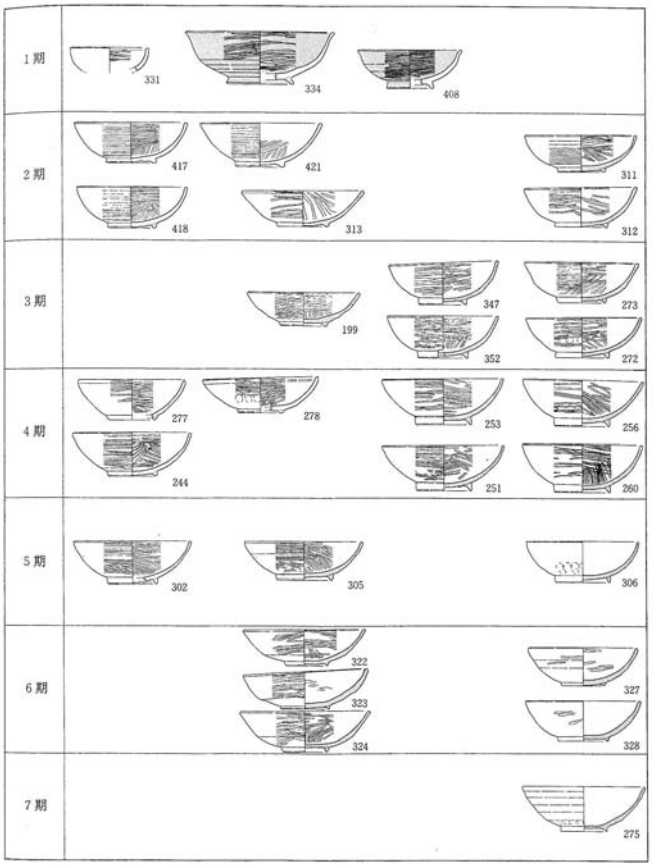
1は深椀状を呈する。体部に成形時にできた稜が顕著にみられる。腰部がやや張り出し，直線的に口縁部へのびる。口縁部内面はツマミナデによって，稜が認められる。体部外面には稜の上に横位のヘラミガキが施されているが，内面のミガキは明瞭ではない。高台形は逆三角形状である。**2**は器形が**1**と異なる浅椀状を呈し，腰部から口縁部にかけて直線的にのびている。高台も細く，断面長方形である。体部外面の稜の上に横位のヘラミガキを施すが，ミガキの数が少ない。内面のミガキは明瞭でない。**3**は浅椀状を呈する。腰部がやや丸みをもって張り，直線的に口縁部へのびている。体部外面は稜の上に横位のヘラミガキが施され，体部内面には斜位のヘラミガキがやや間隔を空けて施されている。**4**は腰部が外に張り出している。口縁部は残存していない。器壁が厚いが，高台は細く断面長方形を呈する。体部外面のヘラミガキは不定方向でミガキの数も少ない。体部内面も同様にヘラミガキの数は少ないが，方向は斜位である程度統一されている。**5**は深椀状を呈する。器壁が全体的に厚くぼってりとしており，特に内面見込みから腰部にかけて顕著である。口唇部も丸みを帯びた形状であり，口縁部付近も体部とほぼ器壁の厚みが変わらない。ミガキは少ないが内面に横位のものがやや認められる。高台は内側にやや入り込んでおり，器壁に比べると薄い。**6**は浅椀状であり，体部中位の器壁が薄くなっている。高台は潰れたような形状で非常に低い。ヘラミガキも粗雑で全体的に作りが悪い。**7**は口縁部から体部まで残存している。口縁部がくの字状に折れて外反している。**8**は浅椀状を呈する。見込みから腰部の器壁が厚く，腰部が外に張り出している。体部中位が細くなり，口縁部にかけて直線的に立ち上がる。体部外面にはヘラミガキが施されるが，ミガキの幅がやや広く方向も一定でない。底部は，高台が明瞭に作られておらず，非常に低い。**9**は，底部から腰部が残存している。底部は非常に低く，高台が内側に折り込まれている。体部外面のヘラミガキは明瞭ではないが，体部内面は横位のヘラミガキがやや施されている。

ｃ．考察

肥前南部型と考えられる個体は白井川遺跡で**第４図１～３**，浜崎遺跡では**第５図１～３**といえる。白井川遺跡出土瓦器椀全体を見ると，深椀タイプ（1，2）と浅椀タイプ（３）のものが認められるが，肥前南部型でもその２種類が認められる。浜崎遺跡でも深椀タイプ（１）と浅椀タイプ（2，3）が認められるが，浜崎遺跡の肥前南部型のうち浅椀タイプのものは，白井川遺跡のものと比較して腰部が張り出さず，直線的に口縁部まで伸びている。また，底部形態についても，浅椀タイプのものは細く断面長方形の高台であり，白井川遺跡出土の瓦器のように，断面逆三角形とはならない。両地域の肥前南部型を比較すると，体部外面の稜線上に施される横位のヘラミガキは共通するが，器形や底部形態などは共通点が認められない。この要因には，森氏が提唱したような瓦器椀の伝播していく過程に

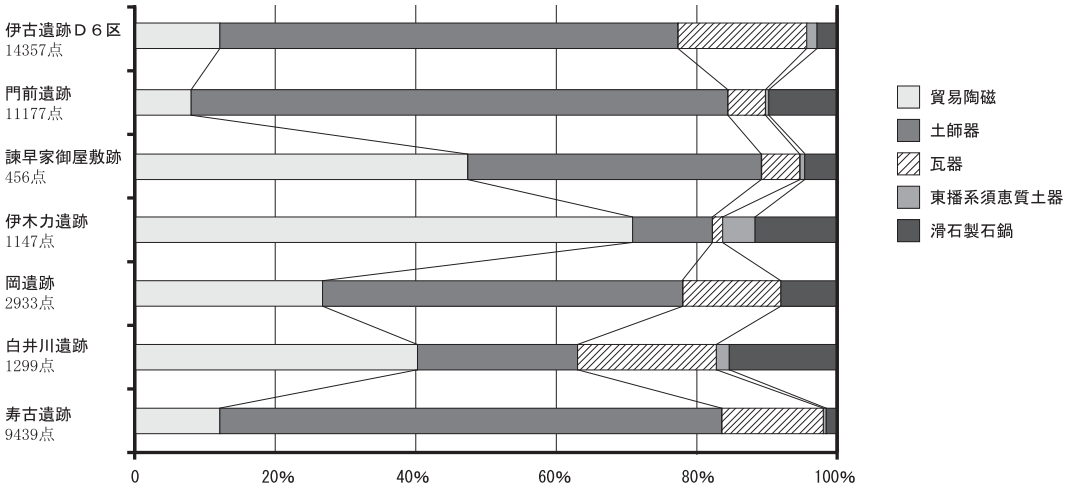
あると考えられる。

まずは肥前南部型の発現した場所について検討してみたい。肥前南部型が出土する地域では，大村湾沿岸地域や天草諸島のほかに，熊本平野（註５）や佐賀平野・武雄盆地があげられる（徳永 1991，1996）。徳永氏によれば，佐賀平野の瓦器椀には大きく分けて深椀・浅椀の２種類があり，技術的，形態的変化によって７期に分けられている。時期については，11世紀末に出現し14世紀前半まで存続するとしている（徳永 1991，**第６図**）。近年の研究で，九州系瓦器椀の製作は在来の土師器椀の技法を援用したという評価で定まってきており，器形的な系譜関係は，各地域によって異なっている。佐賀平野では瓦器椀の祖型は華南産白磁椀に求められ，瓦器が独自に発展したと理解されており（徳永 1991），量的にも卓越している。これに対して，大村湾沿岸地域での瓦器椀は全体の遺物量に対しての割合が概ね20%と低く（**第７図**，註６），量的に卓越していたとは考え難い。肥前南部型が大村湾沿岸地域で生まれたと考えるより，佐賀平野・武雄盆地一帯で発現した肥前南部型が大村湾沿岸地域に伝わったと考えた方が，蓋然性が高いと思われる。加えて，大村湾沿岸地域では，瓦器の前身に当たる，黒色土器の出土量も，全体的に希薄であることも，この裏づけになると考えられる（註７）。



第６図　佐賀平野の筑紫型瓦器椀編年図
（徳永 1991から転載）

瓦器椀の製作技術自体が大村湾沿岸地域に伝わった時期は明確でないが，先述のように浜崎遺跡出土の肥前南部型は共伴遺物から12世紀末～13世紀初頭に位置付けられている（美濃口 2006）。この12世紀末～13世紀初頭は，大村湾沿岸地域の流通構造が貿易陶磁の間接入手期（11世紀中頃～12世紀後半以降）から，在地勢力による直接入手期（13世紀代）へ変化する時期（柴田 2015）に近いことは重要であり，在地勢力の活動の活発化を背景として肥前南部型が大村湾沿岸地域に伝わった可能性が考えられる。天草型３類が大村湾沿岸地域から出土することも，在地勢力の活動の一端がうかがえる資料である。また，大村湾沿岸地域と天草諸島の肥前南部型に見られる器形や高台形のバラつきは，地域内の変動期に一時的に肥前南部型の製作技術が伝わったものの，製作した集団が在地の工人であったため，横位のヘラミガキなど特定の技術以外は在地的な製作技法によった結果と捉えることができる。大村湾沿岸地域で出土する瓦器椀のうち，肥前南部型の点数が限定的である点（**第１表**）も，肥前南部型が一時的に流入したものであることを補強する。



※門前遺跡は杉原 2009の集計表の数値を，伊古遺跡は貿易陶磁と滑石製石鍋以外は報告書の数値を，岡遺跡は報告書の数値を援用している。

第７図　大村湾沿岸地域の遺物の比率（初出柴田 2015）

表１　大村湾沿岸地域一帯の瓦器椀計量結果（初出柴田 2015）

		白井川遺跡		寿古遺跡		諫早家御屋敷跡		伊木力遺跡		伊古遺跡	
分類	器種	点数	重量/g	点数	重量/g	点数	重量/g	点数	重量/g	点数	重量/g
肥前南部型	椀	18	256	2	16					8	59
	皿										
天草型	椀	3	30	6	63	1	21			2	50
畿内系	椀	3	34								
	皿	1	15								
	不明										
畿内系模倣	椀									1	101
分類不明	椀	225	1393	1091	5712	24	392	17	84		
	皿	6	45	41	190						
	不明			224	2131						
総計		256	1773	1364	8112	25	413	17	84	11	210

４．結論

これまでの検討から，次のことが指摘できた。**１．肥前南部型は佐賀平野・武雄盆地一帯で発現し，大村湾沿岸地域，天草諸島に伝わった可能性が高い。２．大村湾沿岸地域，天草諸島の肥前南部型は，横位のヘラミガキ技法が共通するものの，器形，口縁部・底部形態は共通点が少なく，肥前南部型の出土量も少ない。３．2の理由には，大村湾内の流通構造が変化した際の，在地勢力の活動の活発化が想定でき，肥前南部型は一過的に大村湾沿岸地域や天草諸島へ伝わった可能性が高いと考えられる。**

以上，大村湾沿岸地域一帯の瓦器椀について検討を行った。今後は，佐賀平野・武雄盆地の瓦器椀と大村湾沿岸地域・天草諸島の瓦器椀の比較検討や，松浦地方・島原半島といった周辺地域の瓦器椀の検討を行い，西北九州における在地土器の様相をさらに把握していく必要があると考えられる。

謝辞

本論の執筆に際して，美濃口雅朗氏には瓦器椀について様々な御教示を賜っただけでなく，本論の細部にわたり，御指導をいただきました。資料の閲覧に関して，白井川遺跡については東彼杵町歴史民俗資料館の皆様に格別の御配慮をいただきました。浜崎遺跡については中山圭氏の御厚意により中世期の資料全般を閲覧する機会をいただき，本渡市歴史民俗資料館の皆様からも多岐に渡って御高配を賜りました。末筆ながら御協力をいただいた皆様に御礼を申し上げます。

【註】

註１ 森氏の名称に準じて，九州地方の瓦器椀は，「九州系瓦器椀」と呼称する。また，型式名称として使用する場合は，他の文献から引用する場合などをのぞいて，「肥前南部型」のように瓦器椀を省略した呼び方を行う。

註２ 押し出し技法は森田 1995a にて提示された，九州系瓦器椀の基本的製作技法である。一部異なる地域はあるものの，九州系瓦器椀に共通する製作技法である。

註３ 天草型は森隆氏，及び平田豊弘氏によって設定された（森 1993b，平田編 1993)。天草型は１類：断面三角形を呈する高めの高台が付き，体部下半にヘラケズリを施すもの,2類：須恵質であり，外側へ開いた高めの高台が付くもの，３類：高台を内側に折り込むもの，の３種類に大別されている。美濃口氏は天草型瓦器椀の再検討を行い，１類：腰部に稜を形成するもの（ａ類）としないもの（ｂ類）が認められる，２類：体部下半にヘラケズリされる個体が認められる，３類：高台の折り込みは意識的なものであり一定量確認できる。体部外面は回転ヘラケズリが認められ，体部と底部の境が確認されることから，押し出し技法による成形と判断され，基本的な成形技法は肥後型瓦器椀と共通する，との指摘を行った。時期に関しては，共伴する遺物から12世紀末～13世紀前半頃と推定し，その系譜関係は高台の形状から，南部九州産の黒色土器Ａ類・土師器椀を想定している（美濃口 2006)。

註４ 実測図を掲載した遺物は，出土した資料をすべて閲覧し，良好に残っているものを選別した。なお。両遺跡とも出土した瓦器椀は細片が多く，実測に耐えうる遺物が非常に少なかったことを記しておく。

註５ 熊本平野における肥前南部型は，散発的な出土であるため，今回は検討に含めていない。

註６ 遺物の計量結果は柴田2015に提示している。

註７ 美濃口氏の御教示による。また，美濃口氏から，肥前南部型特有の横位のヘラミガキが生まれた背景には，経年によるミガキの簡素化が想定される，との御教示をいただいた。筆者はまだ，佐賀平野，武雄盆地一帯の肥前南部型を実見していないため，この御指摘については対象資料の実見後，別稿にて論じることとしたい。

【引用・参考文献】

論文

大庭康時　1999「集散地としての博多」『日本史研究』448号　日本史研究会　pp.67-101

柴田　亮　2015「考古学的視点から見た肥前西部地域の流通構造」『考古学研究』第62巻第１号　考古学研究会　pp.44-62

徳永貞紹　1991「Ⅳ　総括　２，本村遺跡出土遺物の位置付け」『本村遺跡』佐賀県文化財調査報告書台102集　佐賀県教育委員会　pp.146-154

徳永貞紹　1996「佐賀平野の瓦器椀にみる中世土器生産の一様相」『中近世土器の基礎研究ＸＩ　日本中世土器研究会　pp.183-200

橋本久和　2003「九州出土の畿内産瓦器椀ノート」『中近世土器の基礎研究ＸⅦ』日本中世土器研究会　pp.69-95

橋本久和　2009『中世考古学と地域・流通」真陽社

美濃口雅朗　2006「九州における瓦器椀研究の成果と課題」『中近世土器の基礎研究ＸＸ』　日本中世土器研究会　pp.67-95

宮崎貴夫　1994「長崎県における貿易陶磁研究の現状と課題―主に県本土地域を中心として―」『長崎県の考古学―中・近世研究特集―』長崎県考古学会　pp.79-97

森　　隆　1992「中世土器の生産にみる地域型の提唱と工人集団の系譜について　―西日本の土器椀生産を中心とした―」『中近世土器の基礎研究Ⅷ』　日本中世土器研究会　pp.3-54

森　　隆　1993a「土器椀の生産と流通」『中近世土器の基礎研究Ⅸ』　日本中世土器研究会　pp.169-186

森　　隆　1993b「北部九州の瓦器生産」『古文化談叢』第30集（中）　九州古文化研究会　pp.665-698
森田　勉　1995a（初出 1977）「大宰府出土の土師器に関する覚え書き(2)」『大宰府陶磁器研究ー森田勉氏遺稿集ー』　森田勉氏遺稿集・追悼集刊行会　pp.31-35
森田　勉　1995b（初出 1984）「筑前型瓦器椀の成立過程」『大宰府陶磁器研究ー森田勉氏遺稿集ー』　森田勉氏遺稿集・追悼集刊行会　pp.63-70

報告書
安楽勉編　1989『白井川遺跡ー彼杵中央地区圃場整備事業にかかる調査ー』長崎県東彼杵町教育委員会
平田豊弘編　1993『浜崎遺跡』熊本県本渡市文化財調査報告書第６集　熊本県本渡市教育委員会
山本信夫編　2000『大宰府条坊跡ＸＶー陶磁器分類編ー』太宰府教育委員会

平戸領内における17世紀海外輸出陶磁器の一考察
―雲竜文碗を中心として―

溝　上　隼　弘

はじめに

17世紀中頃から17世紀末にかけて，肥前地域では東南アジアをはじめとする各地へ陶磁器の海外輸出を行っていた。その記録上の初見は正保４年（1647）であり，唐船がカンボジアに向けて「粗製の磁器174俵」を積み出したことが海外輸出の始まりと想定している（山脇 1988）。1650年には，オランダ船がトンキンのオランダ商館に向けて「種々の粗製磁器145個」を積んで長崎を出帆した。1652年にもオランダ船が「176個の日本製の磁器平鉢，皿，瓶」，同年トンキン華僑の船が「かなりな量の粗製磁器」をトンキン商館及びトンキンへ輸出した（山脇 1988）。それ以降，膨大な数の陶磁器が受注され，有田以外の波佐見諸窯，三川内諸窯，佐賀県嬉野諸窯及び熊本県天草の窯にまで生産が拡大し輸出された（大橋 1982）。東南アジア各地の発掘調査においても出土事例が報告されており（大橋 1990他），有田を中心とした肥前地域においての磁器生産技術の発展に多大な影響をもたらした。それは平戸領内の三川内地区の三皿山（三河内・木原・江永）でも同様の様相を示すことが発掘調査によって確認され（佐世保市 1975・1983・1999・2014），近年，早岐港（早岐瀬戸遺跡）から三川内諸窯以外の有田産，波佐見産と考えられる17世紀の海外輸出陶磁器の出土事例も報告されている（馬場 2015）。

本稿では，平戸領内の窯跡から出土した17世紀中頃から17世紀末にかけて生産された海外輸出陶磁器である雲竜文碗（註１）の既報告資料と未報告資料の再検討（註２）を行い，当時の平戸領内各皿山の生産体制について考察するものである。

１．雲竜文碗の研究略史

17世紀の海外輸出陶磁器の一つである雲竜文碗の研究史として，まず大橋康二氏が肥前地域内における分類と編年研究を行っている。有田内山にある長吉谷窯の発掘調査資料から雲竜見込荒磯文碗の高台内に書かれた万治３年（1660）銘に注目し，生産年代の根拠とした。さらに海外輸出用と考えられる染付竜鳳・雲竜見込荒磯文碗の文様及び器形の相違に着目し，Ⅰ類～Ⅵ類に分類し，雲竜見込荒磯文碗のうち，左右の波濤が弧状に描かれるものに比べ，波状に描かれたものが古式とし，波状に描かれたものをⅢａ類，弧状に描かれたものをⅢｂ類，さらにⅢｂ類が崩れたものをⅢｂ′類とした。そして染付見込荒磯文碗・鉢の生産窯は有田内山諸窯に始まり，その後有田外山や不動山へと焼成窯は拡がり，内山でⅢａ類に続く，Ⅲｂ類を焼く時期に，三川内諸窯や波佐見諸窯においても生産するようになり，Ⅲｂ′類が焼かれたのではないかと推測し，Ⅲｂ類とⅢｂ′類の生産年代には重複があったとみられるが，Ⅲｂ′類が新しいと予想した（大橋 1982）。

次いで，野上建紀氏は雲龍文碗の大橋分類を再検証した（野上 2002）。長吉谷窯出土の万治３年紀年銘資料がⅢａ類であるとし，長崎県万才町遺跡の寛文３年（1663）の大火に伴う資料の中にも見込荒磯文碗・鉢のⅢａ類を確認し，1660年代の一括資料と推測される鹿児島県吹上浜採集品に含まれる見込荒磯文碗もⅢａ類が多いことや各地の古窯跡出土の資料や消費地，流通過程の出土資料を検証し，それぞれの間に重複期間があるもののⅢａ類からⅢｂ類さらにⅢｂ′類へという変遷を追認している。

また雲竜文碗の口縁部内側，内側面文様，見込文様，外側面文様，高台内銘から４種類の文様の組み合わせを分類し，有田内山，有田外山，その他の窯場の文様の組み合わせ及び口径の傾向を分析した。その中で文様の組み合わせとして，鍋島藩の有田内山と平戸藩の長葉山窯に共通する要素があることから，長葉山窯が1650年代後半遅くとも1660年代の早い段階であることを指摘した。三川内地区内で長葉山窯及び長葉山窯に続くと思われる三川内東窯では，見込雲竜文（野上見込ｄ-２類）あるいは見込団竜文（野上見込ｄ-３類）の著しく崩れた雲竜文碗が大量に出土しており，長葉山窯では当初見込荒磯文よりも団竜文が主体であったことと関わりがあるものと推測した。このことは有田内山で崩れた文様が模倣されたというよりは，同産地内で文様の崩れが進んだことを示唆した（野上 2002)。

このように肥前地域における雲竜文碗の生産は有田内山で始まり，徐々に各皿山，各藩の窯場に波及していったと考えられているが，平戸領内における17世紀の海外輸出陶磁器の生産体制は不明な点が多く，平戸領内の三皿山（窯跡）において，雲竜文碗の見込文様及び生産量について，詳細な分析を行う必要があると考える。

２．17世紀の海外輸出陶磁器について

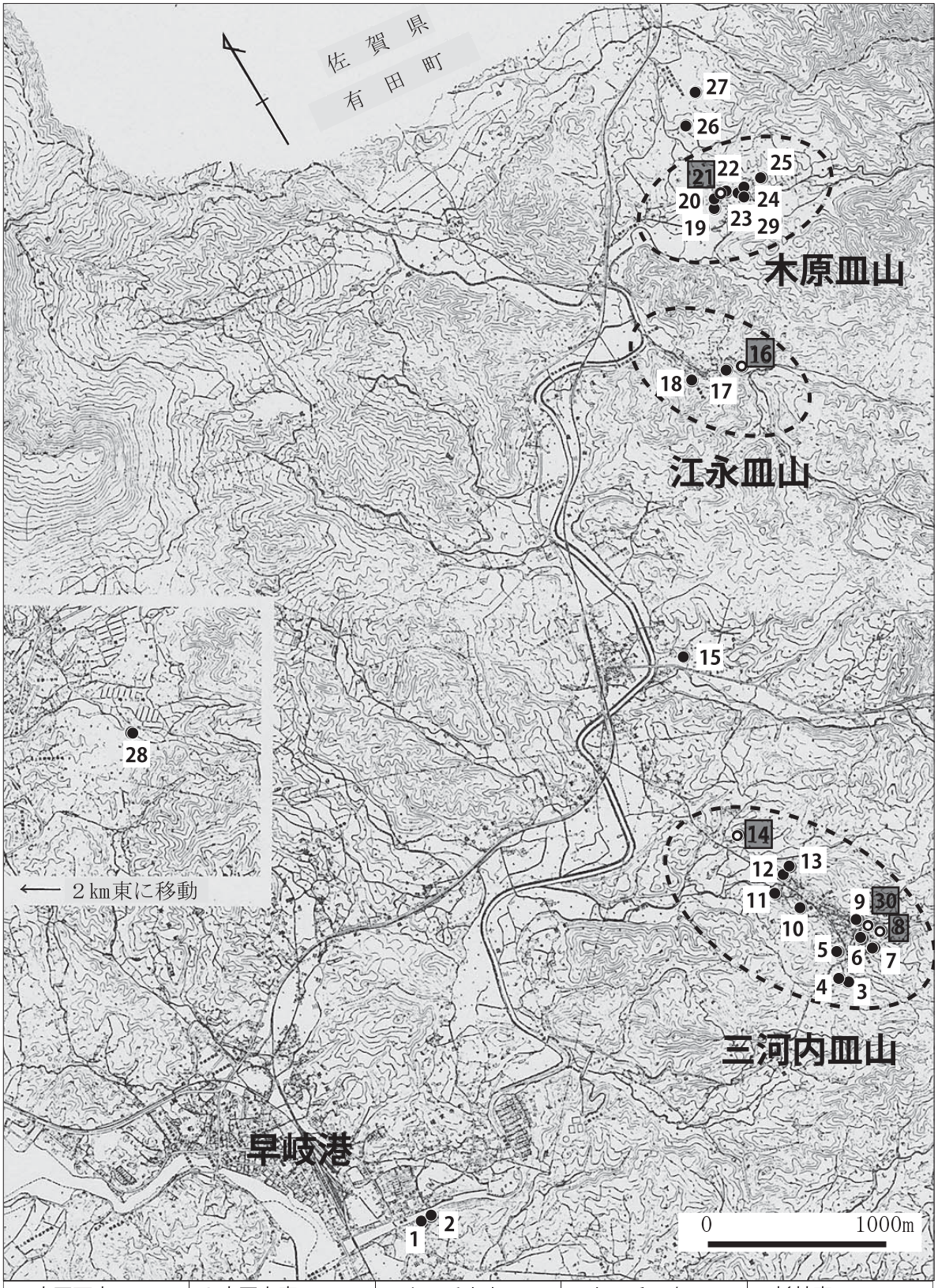
肥前地域における海外輸出陶磁器の生産と流通は，中国の情勢や日本の外交と深く関与している。明末清初の王朝交代によって中国国内の内乱と清王朝による海禁政策の中で中国製磁器の供給量が激減した。中国商人やオランダ東インド会社は肥前陶磁器にその補完を求め，肥前を中心として海外輸出陶磁器が大量生産され，主に東南アジアへ海外輸出された。その後，清朝の政治状況が安定したことにより，1684年に遷界令が解かれ，清朝の陶磁器の海外輸出が再開され，日本に対する陶磁器の需要がなくなり，肥前陶磁器の海外輸出も減少傾向へと遷移したとされる。

３．17世紀の平戸藩の皿山運営

これまでの研究によれば（佐世保史談会 2002他），1637年（寛永14）に平戸藩の命により，（今村）三之丞はすでに稼働していた長葉山窯に藩用製陶所を設置し，1641年（寛永18）に平戸藩は今村三之丞を三河内皿山棟梁兼代官に任命した。1643年（寛永20）には，三川内地区の３箇所に役所（三河内＝役所，木原・江永＝出張所）を設置した。さらに三河内皿山の体制が整った1650年（慶安３）には，中野窯の陶工を三河内皿山へ移転させ，1668年（寛文８）に，陶磁器の供給量の増加と燃料山林の確保，さらに陶磁器生産体制の強化を目的として，三河内皿山の谷の最奥部に御細工所・代官所・番宅など５棟を新たに築造した（三川内東窯)。これは陶業の一切を管理する機能を長葉山窯から三川内東窯へ移転させ，平戸藩による本格的な統制を行うためである。その後，1670年（寛文10）に，木原皿山の木原地蔵平窯から江永古窯へと分窯を行い，三河内三皿山（三河内・木原・江永）が成立し，平戸領内における陶磁器の量産体制が確立したとされる。

４．平戸領内における雲竜文碗の出土事例と出土遺跡の概要（註３）

肥前地域において雲竜文碗が出土している窯跡は43箇所以上確認されており（野上 2002)，平戸領内の窯跡及び関連遺跡における雲竜文碗の出土事例は５箇所である。その出土窯跡は現在の長崎県佐世保市三川内地区に集中しており，三河内皿山２箇所，木原皿山１箇所，江永皿山１箇所で生産されていたことが確認される。次項に対象の遺跡を紹介し，その分析結果を基に考察を行いたい。



1.広田下窯	2.広田上窯	3.上両千東窯	4.上両千西窯	5.杉林窯
6.三川内西窯	7.山の神窯	8.三川内東窯	9.潜石窯	10.小谷窯
11.神林窯	12.三川内下窯	13.吉ノ田窯	14.長葉山窯	15.牛石窯
16.江永古窯	17.江永東窯	18.江永西窯	19.庵の前窯	20.庵の横窯
21.木原地蔵平西窯	22.木原地蔵平東窯	23.木原西窯	24.谷窯	25.木原東窯
26.柳の本窯	27.葭之本窯	28.藤原窯	29.木原下窯	30.代官所跡

図版１　三川内地区の窯跡及び関連遺跡

雲竜文碗出土箇所

４－１　三河内皿山

⑴　長葉山窯跡（佐世保市 1999）

平成８・９年（1996・1997）に行われた発掘調査で２基の窯を検出し，１号窯→２号窯の順で開窯しており，２号窯の物原（２・３層）及び１区（Ｘ１西土坑）において，雲竜見込団竜文碗（**第６図１～４**），２号窯の物原（２層）で雲竜見込荒磯文碗（**第６図５**）が出土している。

⑵　三川内東窯跡（佐世保史談会 2002・佐世保市 2014）

平成８・９年(1996・1997)に発掘調査, 平成26年(2014)に工事に伴う表採を行っており，雲竜寿字文碗(**第６図６**)，寿字文（**第６図７**），雲竜見込団竜文碗（**第６図８～９**），雲竜見込竜文碗（**第６図10～16**），竜鳳凰見込荒磯文碗（**第６図20**），雲竜見込荒磯文碗・鉢（**第６図17～19，第６図21～25**）が出土している。

⑶　代官所跡（佐世保史談会 2002）

平成８・９年（1996・1997）に三川内東窯跡と合わせて発掘調査を行っており，雲竜見込荒磯文碗(**第７図26・27**)，雲竜見込竜文碗（**第７図28・29**），雲竜蝶文鉢（**第７図30**），草花文鉢（**第７図31**）が出土している。

４－２　木原皿山（佐世保市 1983）

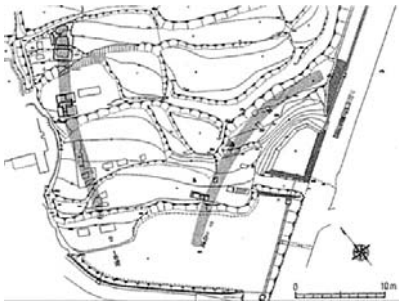
⑴　木原地蔵平東窯跡

昭和52年（1977）に発掘調査が行われており，調査において，２基の窯跡を確認され，Ｂ窯→Ａ窯の順で開窯している。Ａ窯から出土した雲竜見込荒磯文碗(**第７図32～37**)が出土している。

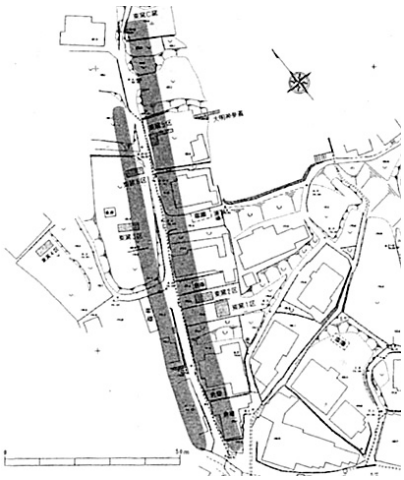
４－３　江永皿山（佐世保市 1975）

⑴　江永古窯

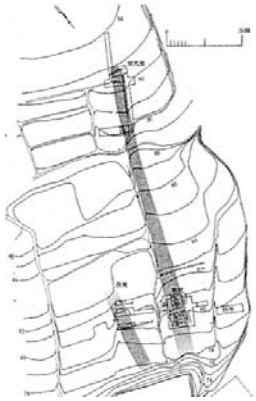
昭和49年（1974）に調査が行われており，３基の窯跡が重複して築かれており，調査ではＡ～Ｃ窯の名称が設定され，Ｃ窯→Ｂ窯→Ａ窯の順で開窯している。1Tr 北６層，1T3a 層，1T3a 層，2T3a 層，2T1層から雲竜見込荒磯文碗（**第７図38～42**）が出土している。



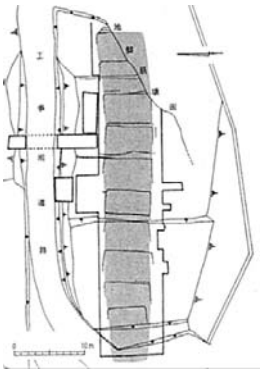
第２図　長葉山窯跡平面図



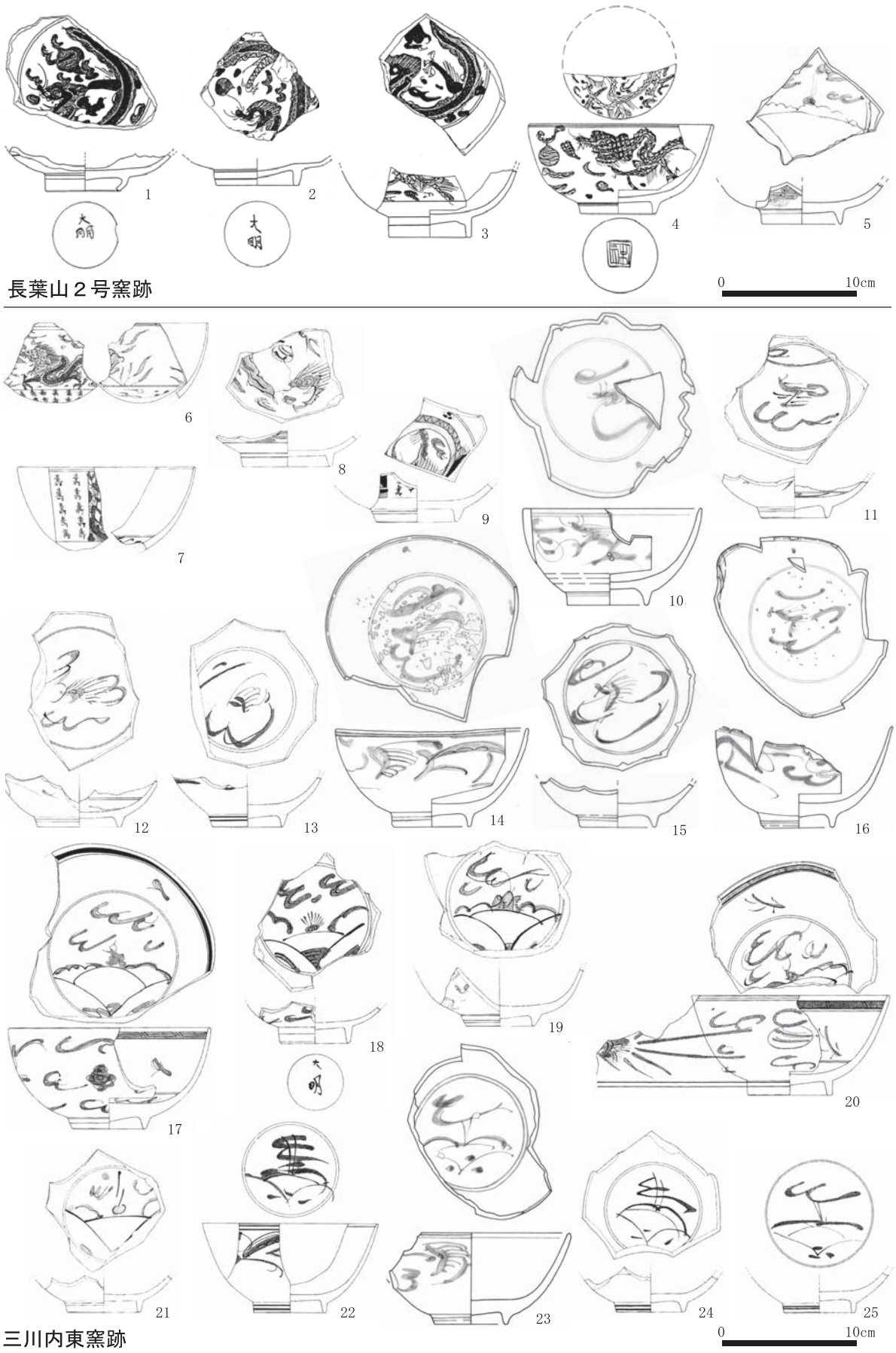
第３図　三川内東窯跡平面図



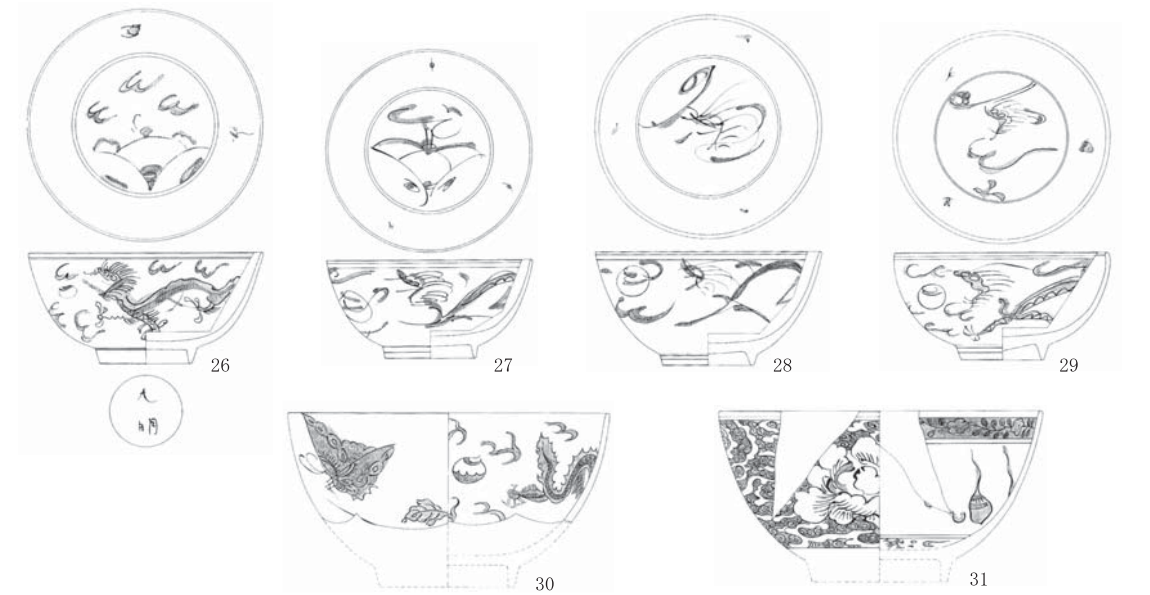
第４図　木原地蔵平東窯平面図



第５図　江永古窯平面図

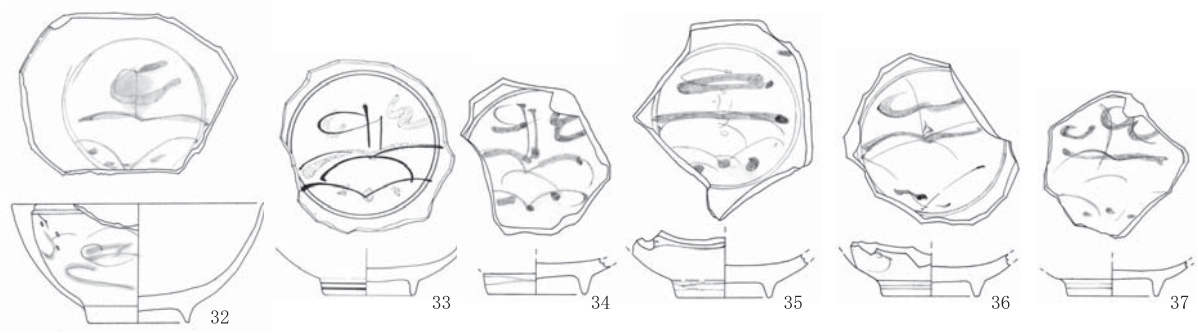


第６図　三河内皿山出土　雲竜文碗・鉢



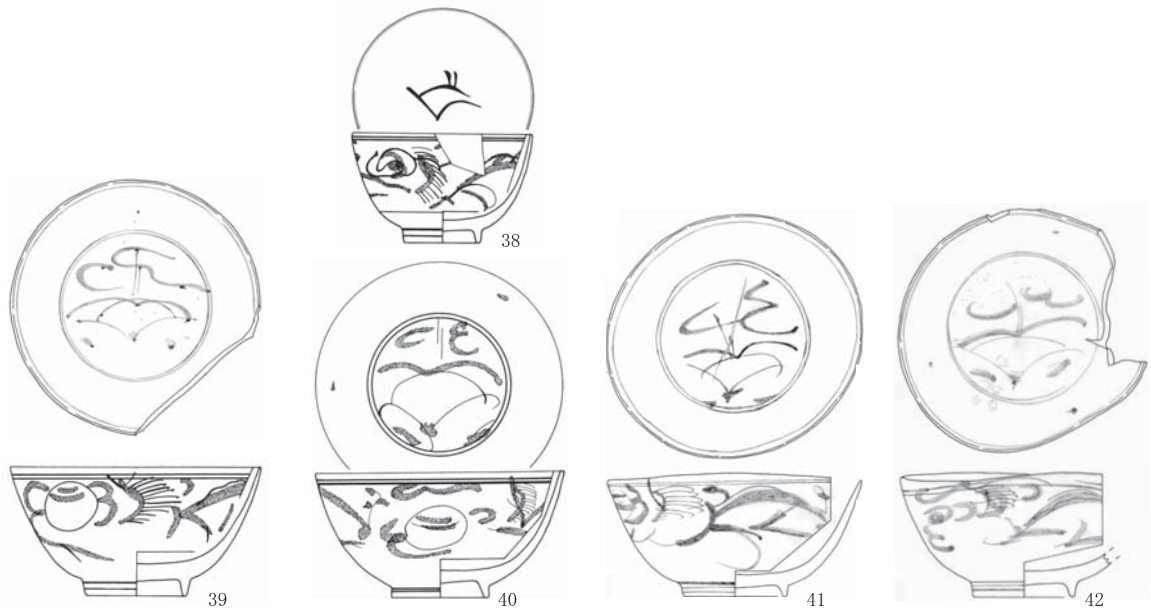
伝 代官所跡

0 10cm



木原地蔵平東窯

0 10cm



江永古窯

0 10cm

第７図　三河内・木原・江永皿山出土　雲竜文碗・鉢

５．出土資料の分析

５－１　分析方法

⑴　平戸領内の三皿山における各窯跡から出土した雲竜文碗を窯場別，見込文様別の集計表として示し，見込文様の分類は（2013　有田町歴史民俗資料館）を基準とした。高台径の残存率1/2以上を最低個体数とし，焼成不良，融着で見込文様が判別できないものについては不明とした。なお，統計分析は各窯跡の発掘調査報告書掲載資料及び未掲載資料を含め資料全点で行った。

５－２　分析結果

⑴　三川内東窯から他窯よりも多くの雲竜文碗が出土した。

⑵　雲竜見込竜文碗は三川内東窯でのみで出土し，長葉山窯では確認されなかった。

⑶　木原地蔵平東窯及び江永古窯では雲竜見込荒磯文碗のみが出土した。

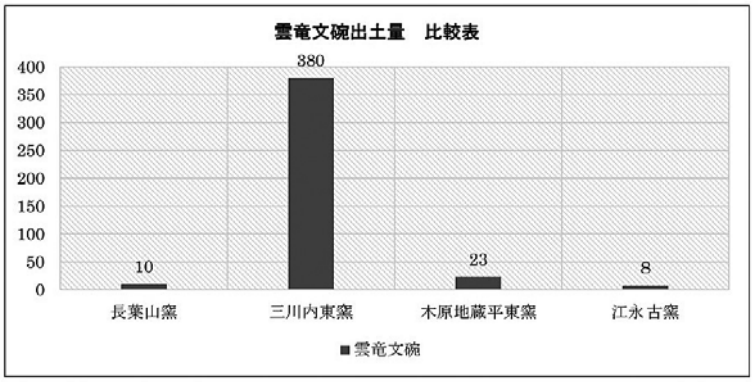
⑷　確認された雲竜文碗は９割以上が三河内皿山から出土した。

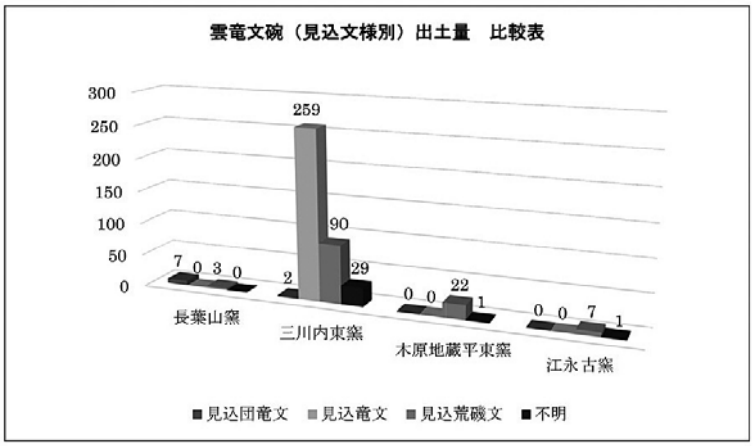
表１　三河内三皿山の雲竜文碗分析表

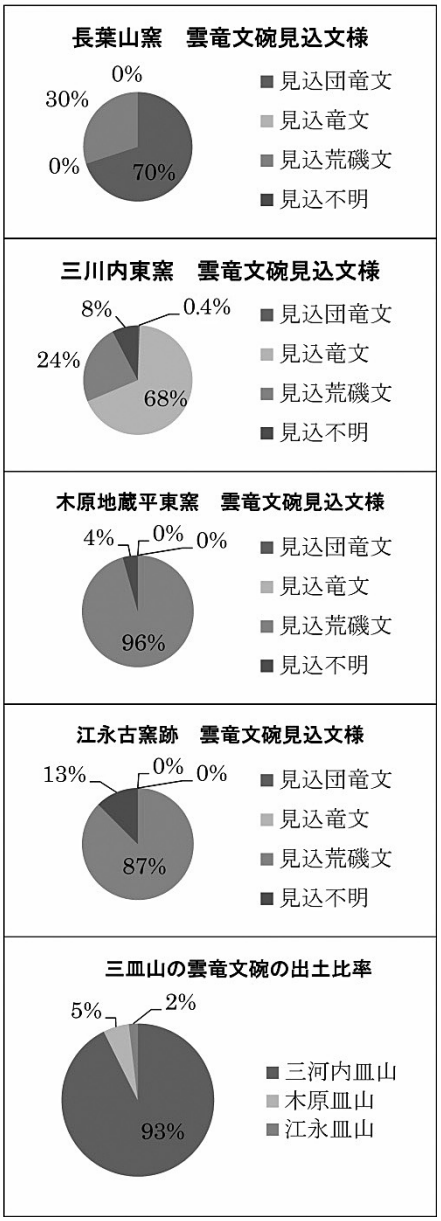
各窯跡出土の雲竜文碗見込文様　比較表　（個体数）

	雲竜見込団竜文碗	雲竜見込竜文碗	雲竜見込荒磯文碗	雲竜文碗(見込不明)	合計
長葉山窯	7	0	3	0	10
三川内東窯	2	259	90	29	380
木原地蔵平東窯	0	0	22	1	23
江永古窯	0	0	7	1	8

※高台径残存1/2以上を数量とした







６．史料にみる17世紀の三皿山

野元家文書の『御旧記収録　二』1688年（元禄元）の条に，「一，早岐三河内皿山釜数拾二間有之候処，釜数六間ニナル，江永皿山木原皿山両所三拾弐間有之処，弐拾九間ニナル」とあり，元禄元年に各皿山の窯室の削減縮小が記録されている（岩崎 2002）。また，1684年（貞享元）以降の長崎への唐船の増加に伴う中国陶磁器の日本国内への大量流入が確認されており（長崎市2014），そのような要因で三皿山の窯室が減少したと考えられる。さらに，三河内皿山の窯室は12間から６間となる６間減少（50%減）であるのに対し，江永・木原皿山の窯室は32間から29間となる３間減少（9.3%減）に留まっており，窯室の減少幅に大きな隔たりがある。これは中国清朝の展開令以降の海外輸出陶磁器の急激な需要の減少により，供給量が減少したことによって，自ずと窯室を削減したと推察されるため，窯室の削減率が多い三河内皿山が海外輸出陶磁器を主として生産していたことを裏付ける。

７．考　察

前述の出土資料の統計分析の結果，平戸領内において三河内皿山の三川内東窯が，17世紀の海外輸出陶磁器である雲竜文碗を主体的に量産していたと推察される。確かに調査面積や出土量が各窯の生産量に直結するかは検討を要するが，焼成不良品を含む各窯跡での残存率は生産量に近い関係であるという前提に基づけば，三川内東窯は他窯と比較しても雲竜文碗の出土点数が絶対的に多い。さらに，野元家文書の『御旧記収録　二』による各皿山の窯室の減少率に違いがみられることからも，平戸領内においては，三川内皿山の特に三川内東窯で重点的に海外輸出陶磁器である雲竜文碗を生産させた可能性が高いと結論付けられる。

また，雲竜見込竜文碗は三川内東窯で大量に出土しており，平戸藩内の窯跡では他に出土事例がないことから三川内東窯の標準資料となりえる。

そして，平戸藩が1688年（寛文８）に長葉山窯から三川内東窯へ窯場を移転させた要因の一つとして，雲竜文碗の出土量が三河内皿山内の長葉山窯と三川内東窯を比較しても三川内東窯で大幅に増加することから海外輸出を念頭においた生産強化を求めた結果であると推察する。民窯の性質を持った海外輸出陶磁器（雲竜文碗）であっても，三河内三皿山が一律に生産していないことから，平戸藩が各皿山別に生産管理の統制を行っていたことを示唆する。

８．おわりに

今回は平戸領内の各窯跡から出土した雲竜文碗を中心として生産地の細分化した生産体制について考察を試みた。平戸領内における17世紀中頃から17世紀末期の雲竜文碗以外の海外輸出品や国内向け製品の生産状況等については今後の課題として残る。また，近世陶磁器の生産・流通・消費を解明していくためにも，平戸領内の生産地としての各皿山窯跡の出土資料の整理と分類，分析が今後も必要となるであろう。

表２　出土資料一覧表

番号	名　称	口径･底径･器高(㎝)	皿山	窯場	調査区	層位	報告書番号	備考
1	雲竜見込団竜文碗	－／5.6／－	三河内	長葉山窯	２号窯物原	３層	1999／第21図165	
2	雲竜見込団竜文碗	－／6.0／－	三河内	長葉山窯	２号窯物原	２層	1999／第23図189	
3	雲竜見込団竜文碗	－／6.1／－	三河内	長葉山窯	２号窯物原	３層	1999／第21図166	
4	雲竜見込団竜文碗	13.8／5.6／6.8	三河内	長葉山窯	２号窯１区	Ｘ１室西土坑	1999／第24図202	
5	雲竜見込荒磯文碗	－／6.0／－	三河内	長葉山窯	２号窯物原	２層	1999／写真７	実測
6	雲竜寿字文碗	－／－／－	三河内	三川内東窯	２区	２層	2002／第30図143	
7	寿字文碗	－／－／－	三河内	三川内東窯	２区	４層	2002／第36図214	
8	雲竜見込団竜文碗	－／6.2／－	三河内	三川内東窯	２区	３層	2002／第34図197	
9	雲竜見込団竜文碗	－／6.4／－	三河内	三川内東窯	２区	１層	2002／第29図118	
10	雲竜見込竜文碗	－／6.0／－	三河内	三川内東窯	－	２・３層	2014／第８図19	
11	雲竜見込竜文碗	－／5.2／－	三河内	三川内東窯	２区	４層	2002／第35図204	
12	雲竜見込竜文碗	－／6.4／－	三河内	三川内東窯	２区	２層	2002／第30図136	
13	雲竜見込竜文碗	－／5.6／－	三河内	三川内東窯	３区	２層	2002／第37図236	
14	雲竜見込竜文碗	－／5.8／－	三河内	三川内東窯	－	表採	2014／第11図55	
15	雲竜見込竜文碗	－／5.6／－	三河内	三川内東窯	－	表採	2014／第11図58	
16	雲竜見込竜文碗	－／5.0／－	三河内	三川内東窯	－	２・３層	2014／第８図16	
17	雲竜見込荒磯文鉢	16.2／5.8／8.3	三河内	三川内東窯	２区	２層	2002／第31図147	
18	雲竜見込荒磯文碗	－／5.4／－	三河内	三川内東窯	２区	４層	2002／第35図205	
19	雲竜見込荒磯文碗	－／6.0／－	三河内	三川内東窯	２区	２層	2002／第31図150	
20	竜鳳凰見込荒磯文碗	－／6.8／8.1	三河内	三川内東窯	２区	３層	2002／第35図203	
21	雲竜見込荒磯文碗	－／5.9／－	三河内	三川内東窯	２区	２層	2002／第31図151	
22	雲竜見込荒磯文碗	14.0／5.8／7.1	三河内	三川内東窯	３区	３層	2002／第38図250	
23	雲竜見込荒磯文碗	－／5.4／－	三河内	三川内東窯	－	表採	2014／第10図39	
24	雲竜見込荒磯文碗	－／5.5／－	三河内	三川内東窯	３区	３層	2002／第38図256	
25	雲竜見込荒磯文碗	－／5.8／－	三河内	三川内東窯	３区	３層	2002／第38図254	
26	雲竜見込荒磯文碗	14.6／5.6／7.0	三河内	代官所跡	４区	溝上層	2002／第51図572	
27	雲竜見込荒磯文碗	12.6／5.6／6.2	三河内	代官所跡	５区	溝上層	2002／第51図576	
28	雲竜見込竜文碗	14.0／5.6／7.2	三河内	代官所跡	６区	溝上層	2002／第51図571	
29	雲竜見込竜文碗	13.4／5.0／6.7	三河内	代官所跡	７区	溝上層	2002／第51図573	
30	雲竜蝶文鉢	20.0／－／－	三河内	代官所跡	８区	溝上層	2002／第51図568	
31	草花文鉢	20.0／－／－	三河内	代官所跡	９区	溝上層	2002／第51図569	
32	雲竜見込荒磯文碗	14.5／5.8／6.9	木原	木原地蔵平窯	10区	不明	1978／未報告資料	実測
33	雲竜見込荒磯文碗	－／5.2／－	木原	木原地蔵平窯	11区	１層	1978／第24図２	
34	雲竜見込荒磯文碗	－／5.7／－	木原	木原地蔵平窯	12区	０層（表土）	1978／未報告資料	実測
35	雲竜見込荒磯文碗	－／5.4／－	木原	木原地蔵平窯	物原	３層	1978／第20図５	実測
36	雲竜見込荒磯文碗	－／5.5／－	木原	木原地蔵平窯	物原	０層（表土）	1978／未報告資料	実測
37	雲竜見込荒磯文碗	－／5.3／－	木原	木原地蔵平窯	物原	０層（表土）	1978／未報告資料	実測
38	雲竜見込荒磯文碗	－／4.4／6.4	江永	江永古窯	１Ｔ北	６層	1975／図版８－８	
39	雲竜見込荒磯文碗	14.3／5.8／7.2	江永	江永古窯	１Ｔ	３ａ層	1975／図版６－１	実測
40	雲竜見込荒磯文碗	14.3／5.6／7.1	江永	江永古窯	２Ｔ	３ａ層	1975／図版10－７	
41	雲竜見込荒磯文碗	－／6.0／6.6	江永	江永古窯	２Ｔ	１層	1975／図版55－３	実測
42	雲竜見込荒磯文碗	－／5.9／6.9	江永	江永古窯	２Ｔ	１層	1975／未報告資料	実測

【註】

註１　碗の名称について，通常口径16㎝以上，口径に占める高さの比率が1/3以上のものを鉢と呼ぶが，平戸領内の窯跡において出土点数が少ないことから本稿では統一して碗と呼称する。

註２　未報告資料については佐世保市教育委員会の文化財整理室に収蔵されているものを筆者が実見・実測・統計調査を行った。ただし，江永古窯に関して報告書に記載されている出土資料（重量）と収蔵されている出土資料（重量）に差異がある為，留意が必要である。

註３　図版の一部については佐世保市教育委員会及び佐世保史談会の調査報告書から転載した。

【参考文献・引用文献】

有田町歴史民俗資料館　2013『アジアが初めて出会った有田焼』

家田淳一　2000「有田出土の輸出磁器」『古伊万里の道』九州陶磁文化館

岩崎義則　2002「三川内焼の生産と流通」『佐世保市史　通史編　上巻』佐世保市史編さん委員会　pp668

大橋康二　1982「伊万里染付見込荒磯文碗・鉢に関する若干の考察」『白水』No. 9，pp26-34，白水会

大橋康二　1990「東南アジアに輸出された肥前陶磁」『海を渡った肥前のやきもの展』pp88-176，九州陶磁文化館

大橋康二・坂井隆　1994『アジアの海と伊万里』新人物往来社

大橋康二　1997「ホイアン出土の陶磁器」『ホイアンの考古学』昭和女子大学国際文化研究

大橋康二　2011「セラミックロードについて」『海を渡った古伊万里』青幻舎

大橋康二　2012「将軍家献上の鍋島・平戸・唐津」『将軍家献上の鍋島・平戸・唐津』九州陶磁文化館

大橋康二　2014「近世の平戸焼と現川焼の特質について」『東洋陶磁　第43号』東洋陶磁学会

九州近世陶磁学会　2000『九州陶磁の編年』

九州近世陶磁学会　2010『世界に輸出された肥前陶磁器』

九州陶磁文化館　1990『海を渡った肥前のやきもの展』

佐世保市教育委員会　1975『江永古窯跡発掘調査報告書』

佐世保市教育委員会　1983『佐世保市三川内古窯跡緊急確認調査報告書―木原地蔵平窯跡の発掘調査―』

佐世保市教育委員会　1999『長葉山窯跡発掘調査報告書』

佐世保市教育委員会　2014『市内遺跡発掘調査報告書』佐世保市文化財報告書第11集

佐世保史談会　2002『平戸藩御用窯総合調査報告書』

鈴田由紀夫　2000「古伊万里輸出年表」『古伊万里の道』九州陶磁文化館

高橋久満治　1911『三川内窯業沿革史』

長崎市教育委員会　2014『唐人屋敷跡』

馬場晶平　2015「佐世保市早岐瀬戸遺跡発掘調査速報」『近世肥前磁器研究の諸問題』近世陶磁学会

中島浩気　1936『肥前陶磁史考』

野上建紀　2002「近世肥前窯業生産機構論―現代地場産業の基盤形成に関する研究―」

野上建紀　2013「アジアが初めて出会った有田焼」『アジアが初めて出会った有田焼』有田町歴史民俗資料

藤原友子　2000「古伊万里の道展について」『古伊万里の道』九州陶磁文化館

松尾秀昭　2015「肥前・三川内の磁器の始まり」『江戸前期における日本磁器の始まりと色絵の始まり』近世陶磁研究会

山口正人　1985「三川内皿山に於ける分窯形態」『談林』No. 27，pp４-８

山脇悌一郎　1988「貿易編―唐・蘭船の伊万里焼輸出」『有田町史　商業編１』有田町

渡辺康輔　1958『三川内焼窯元今村氏文書』親和文庫

【謝　辞】

本稿を執筆するにあたり，川内野篤氏，髙島裕之氏，野上建紀氏，松尾秀昭氏，村上伸之氏，柳田裕三氏にご協力をいただきました。末筆ながら記して感謝申し上げます。

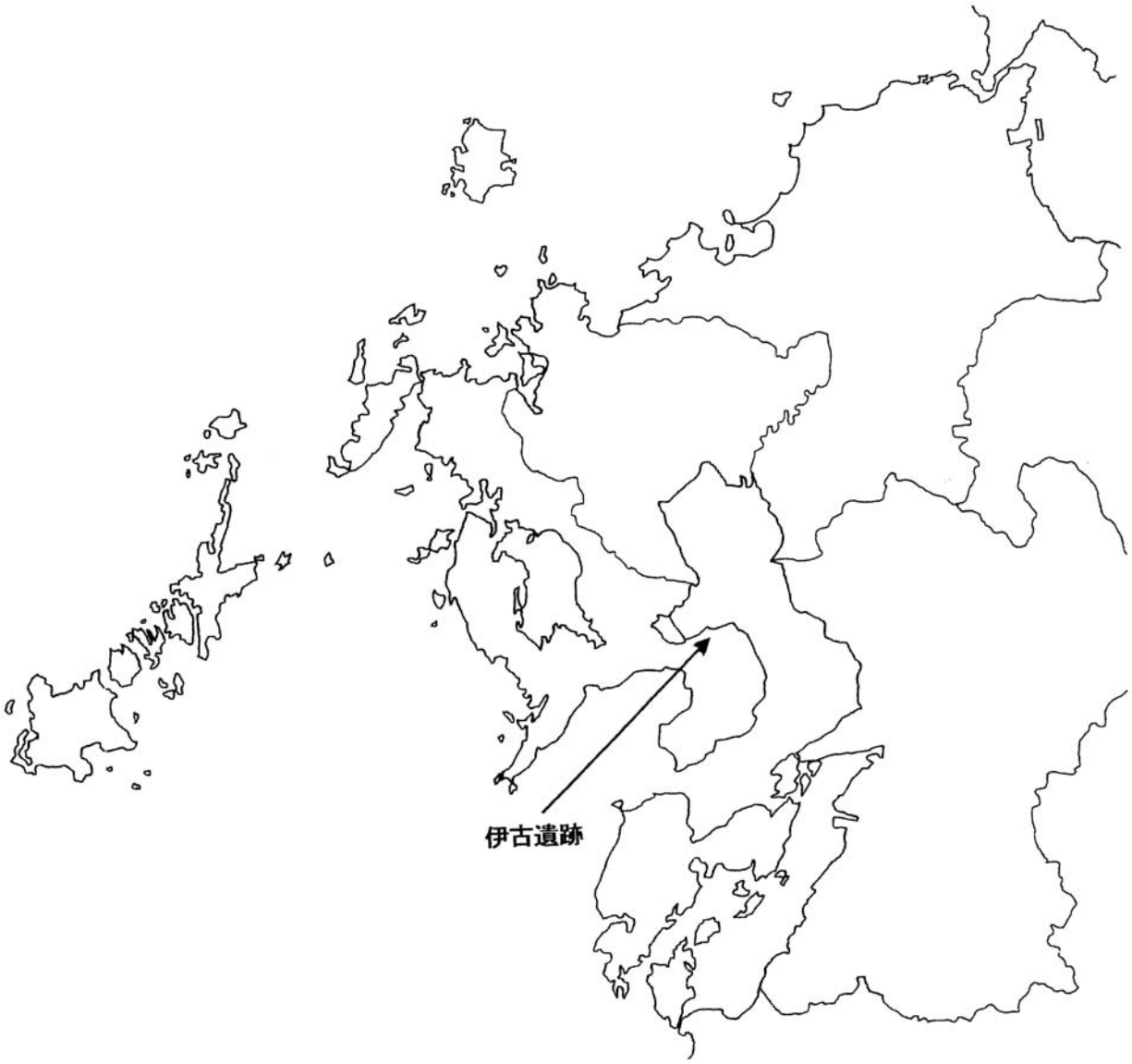
【資料紹介】伊古遺跡出土遺物について

村　子　晴　奈

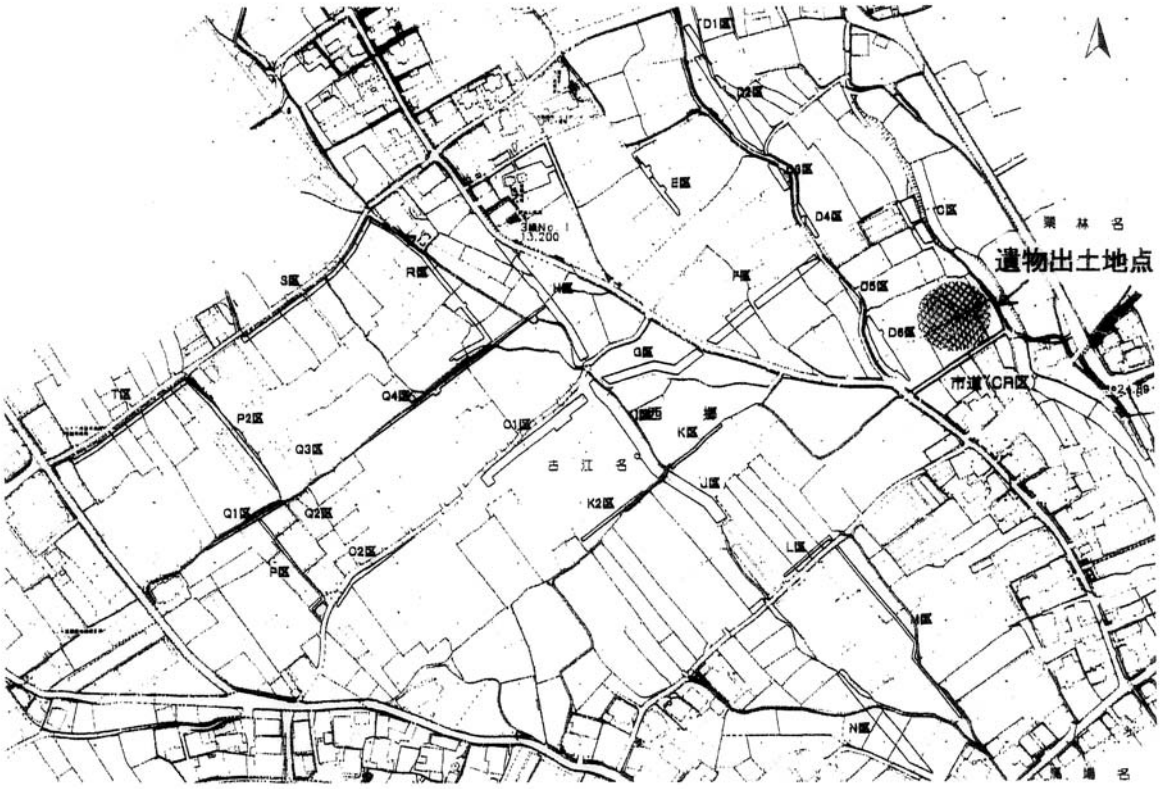
はじめに

伊古遺跡は，長崎県雲仙市瑞穂町（**第１図**）に所在し，島原半島北側に広がる雲仙普賢岳の火山性山麓扇状地上に位置する。遺跡の東側には比高差５㍍ほどの舌状の丘陵が延び，西側には西郷川が流れ，有明海へと注いでいる。川と丘陵に挟まれた平坦部に遺跡が展開しており，瑞穂町内で最も広い平野に所在し，現在は区画された水田が広がっている。

県営圃場整備事業に伴い，平成17年度～平成20年度に道路及び用排水路建設部分について調査を行った。伊古遺跡については，既に報告されている（山下 2008・辻田 2009・辻田他 2010）が，未整理な部分も多い。今回，Ｄ６区東側から出土した弥生時代の遺物を中心に再整理をし，検討を行った。



第１図　伊古遺跡位置図（Ｓ＝1/1,500,000）



第２図　伊古遺跡調査区配置図（Ｓ＝1/2,500）

１．遺跡の概要

伊古遺跡は縄文時代草創期～中世までの複合遺跡である。縄文時代草創期の細石刃製作過程に伴うもの（細石核・細石刃・剥片・チップ）や，弥生時代の甕棺墓（肥後系の甕が用いられている）及び，木製品水漬遺構と想定される遺構が検出された。また，弥生時代終末～古墳時代初頭の溝内からは，古式土師器が集中して出土した。その他に，中世の河川跡も検出されており，河川内には一括廃棄したと考えられる輸入青磁（龍泉窯系，同安窯系）・白磁や瓦器碗，滑石製石鍋，土師質土器などが出土した。どの時代でも遺物や遺構が非常に多く，縄文時代草創期～中世まで，連綿と人々の生活が営まれていた様子がうかがえる。

２．出土遺物（第３図，第１表，第２表）

今回，Ｄ６区と市道（CR-１区）に挟まれた部分から出土した遺物の再整理を行った（**第３図**）。その結果，甕棺，在地系土器や，他地域から搬入されたと考えられる土器及び，石包丁が確認された。

1は広口壺である。弥生時代中期後半の佐賀県武雄地域のものと類似する。また，**2～4**は脚台付甕である。**2**，**4**は在地のものと考えられるが，**3**は胎土に金雲母を含む。在地のものは胎土に島原半島で産出される角閃石を含むものが多く，金雲母はほとんど含まれない。そのため，**3**の脚台付甕は在地のものとは異なる。**9**は朝顔型口縁の壺である。胴部は免田式土器の特徴を持つ，算盤形を呈する。しかし，免田式に見られる重弧紋や鋸歯紋などは施されていない。**10**の長頸壺は形態的に畿内第二様式の壺に系譜を求められるものと考えられる。同様の遺物は南島原市の今福遺跡（町田・宮崎1986）からも出土している。**15**，**16**は肥前型器台である。**15**は円形の透かし及び方形透かしが施される。**16**は方形透かしのみである。弥生時代後期後半～終末ものと考えられる。

17～24は大型甕及び壺である。弥生時代後期のものである。

25，**26**は石包丁である。地元産出の角閃石安山岩やそれ以外の安山岩でやや硬質の石材を素材とする。片刃で，穿孔方法は石製の穿孔具で，両側からの回転によるものである。

1～26の遺物は，弥生時代中期後半～弥生時代後期末のものであることが分かった。弥生時代における伊古遺跡の最盛期から古墳時代へと移行する時期のものと考えられる。

３．伊古遺跡周辺地域における弥生時代遺跡について

伊古遺跡を含む島原半島北部には，弥生時代中期前半～古墳時代初頭の遺跡が多く存在する。その代表的な遺跡として，陣ノ内遺跡（雲仙市瑞穂町），小中野Ａ遺跡（雲仙市国見町）・小中野Ｂ遺跡（雲仙市国見町），佃遺跡（雲仙市国見町），十園遺跡（雲仙市国見町）があげられる。

陣ノ内遺跡は，伊古遺跡から西側に約2.5㌔㍍離れた地点に存在する。弥生時代後期～古墳時代初頭を主体とする集落跡で，伊古遺跡とほぼ同時期に存在した遺跡である。また，伊古遺跡から東に約3.5㌔㍍離れた地点には，佃遺跡が存在する。弥生時代中期後半～古墳時代初頭を主体とする集落跡であり，陣ノ内遺跡，伊古遺跡とほぼ同時期に存在した遺跡である。佃遺跡より東南に約２㌔㍍離れた地点には，弥生時代中期前半頃の城ノ越式土器が出土した小中野Ａ遺跡及び小中野Ｂ遺跡が存在する。島原半島では弥生時代前期～中期前半頃の遺跡数が極端に少ないため，城ノ越式段階の遺物が出土する遺跡はごく稀である。また，佃遺跡と小中野Ａ遺跡及び小中野Ｂ遺跡の中間地点には十園遺跡が存在する。十園遺跡では，北部九州系統の丹塗り土器が出土しており，平面形状が円形の住居址と方形の住居址とが共存していることから，北部九州系統の人々との共存が図られる遺跡である。

この様に，伊古遺跡から半径約４㌔㍍圏内に弥生時代中期前半～古墳時代初頭の集落跡が形成されている。今回紹介した遺跡は，島原半島北部の弥生時代を代表する遺跡といえるが，その拠点的集落の周辺には小規模な集落が形成されていると考えられる。この小規模集落についての全容は現段階ではまだ明確にはされていない為，今後の調査成果に期待したいと思う。

４．まとめ

今回取り上げた遺物は，Ｄ６区と市道（CR-１区）に挟まれた部分である。佐賀県武雄地域のものと類似する広口壺（**第３図１**），畿内第二様式の壺に系譜を求められる長頸壺（**第３図10**）などは他地域から搬入されたものであろう。また，脚台付甕（**第３図２**，**４**），肥前型器台（**第３図15**，**16**），石包丁（**第３図25**，**26**）は在地のものと考えられる。調査では水田跡は確認されていないが，石包丁が出土していることから，集落の生産基盤は，水稲耕作であった可能性が考えられる。

伊古遺跡Ⅲ（辻田他 2010）でも，肥後系の免田式土器や黒髪式の甕棺，北部九州系の須玖Ⅱ式の甕，南筑後地方の長胴甕など，在地のものではなく，他地域から搬入されたと考えられる遺物が出土している。伊古遺跡の人々が有明海を通して他地域との交流を活発に行っていた証拠であると考えられる。

島原半島には，弥生時代中期後半以降になると，遺跡数が増加の傾向をみせる。島原半島南部でも今福遺跡（南島原市北有馬町），高原遺跡（南島原市有家町）などその地域を代表する遺跡が点在するようになる。また，この時期のほとんどの遺跡から肥後地域や北部九州地域から搬入されたと考えられる遺物が多数出土する。これらのことから，有明海あるいは陸路を通じて他地域との交流が活発に行われていたということが考えられる。

これまでも，島原半島と他地域との繋がりについて論じられてきた。しかし，依然として不明瞭な

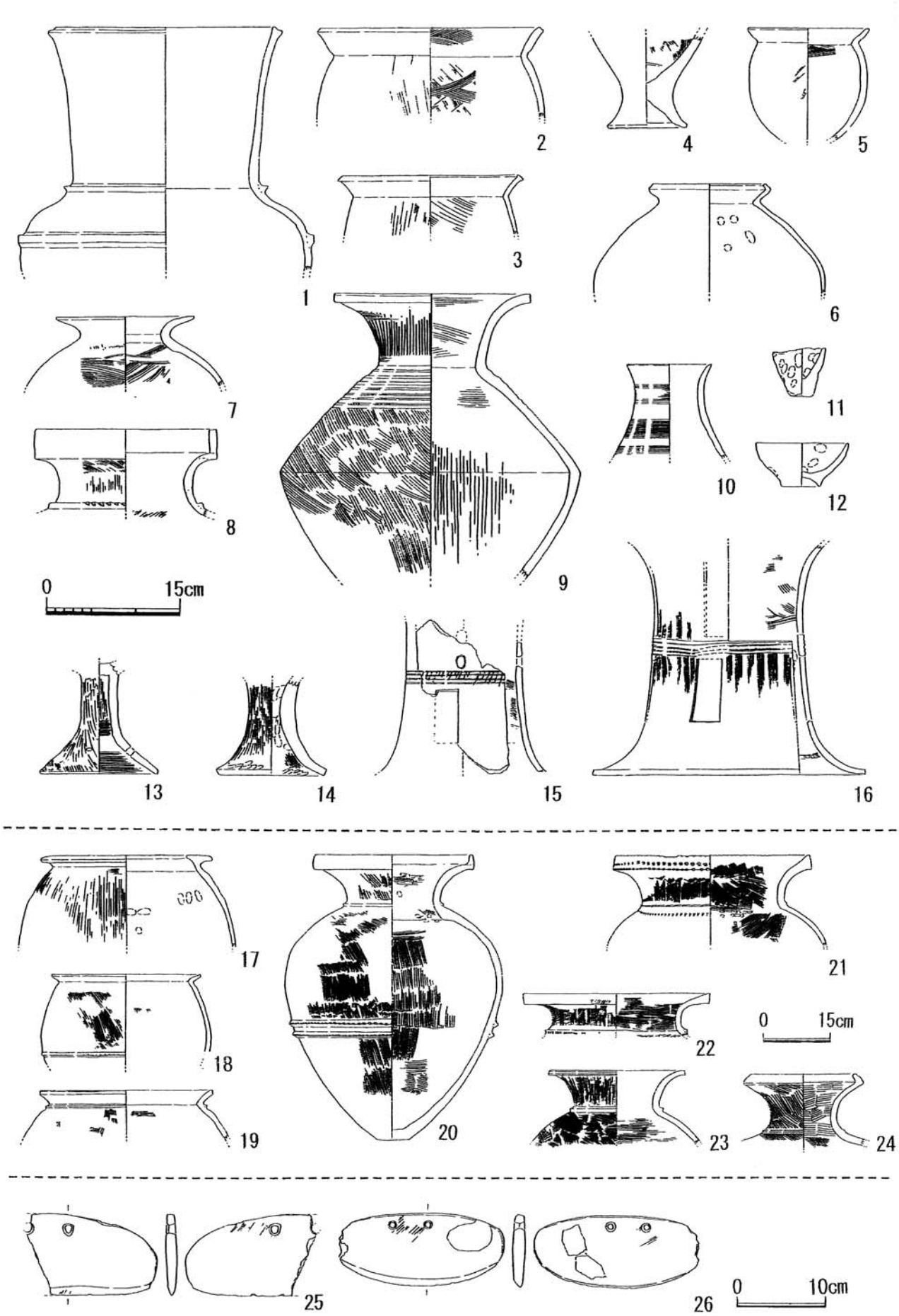
点が存在する。伊古遺跡を含む島原半島の弥生時代の遺跡がどのように形成され，他地域との交流がどのように行われたのか，まだまだ検討の余地があると思われる。今後の課題として，これからも遺物の再整理を行いながら，検討していきたい。

古門先生，還暦おめでとうございます。心よりお喜び申し上げます。これからもお身体を大切に，益々ご活躍くださいますようお祈り申し上げます。

最後に，今回の執筆にあたり，辻田直人，早稲田一美，柳原亜矢子，本田円香，橋本清美，林田好子の各氏にご教示及びご協力頂きました。末筆ながら，感謝申し上げます。

【引用・参考文献】

上田龍児　2004「長崎県・景華園遺跡の研究」『福岡大学考古学研究室調査研究報告第３冊』福岡大学人文学部考古学研究室
熊本県立装飾古墳館　1993『第３回企画展示図録　弥生人の祈り－免田式土器の謎－』熊本県立装飾古墳館
島津義昭・村上恭通　1992『二子塚』熊本県文化財調査報告第117集　熊本県教育委員会
辻田直人　2009『伊古遺跡Ⅱ』雲仙市教育委員会文化財調査報告書第６集　長崎県雲仙市教育委員会
辻田直人・小野綾夏・大野瑞恵・村子晴奈　2010『伊古遺跡Ⅲ』雲仙市文化財調査報告書第８集　長崎県雲仙市教育委員会
原田保則　1986『六角川河川改修工事に伴う埋蔵文化財調査報告書（上巻）　みやこ遺跡』武雄市文化財調査報告書第15集　佐賀県武雄市教育委員会
町田利幸・宮崎貴夫　1986『今福遺跡Ⅲ』長崎県文化財調査報告書第84集　長崎県教育委員会
山下美郷　2008『伊古遺跡（中世編）』雲仙市文化財調査報告書（概報）第５集　雲仙市教育委員会



第３図　伊古遺跡出土遺物　１～16（Ｓ＝1/6）・17～24（Ｓ＝1/12）・25～26（Ｓ＝1/3）

第１表　出土遺物観察表（土器）

番号	種別	法量（cm）		技法的特徴	胎土／色調	備考
1	壺	口縁部径(復元) 残存高	24.4 27.0	外面　口縁・胴部：横位ナデ　頸部：縦位ハケ後横位ナデ 内面　横位ナデ	石英，長石，雲母 外面：明赤褐色（Hue 2.5 YR 5/8） 内面：明赤褐色（Hue 2.5 YR 5/8），橙色（Hue 5 YR 6/6）	焼成良好
2	台付甕	口縁部径(復元) 残存高	24.6 10.1	外面　口縁部：ナデ　胴部：縦位ハケ後ナデ 内面　口縁部：斜位ハケ　頸部：ナデ 胴部：縦位ハケ後部分的にナデ	角閃石，赤・白色粒子，石英 外面：浅黄橙色（Hue 10 YR 8/3），灰黄褐色（Hue 10 YR 6/2） 内面：浅黄橙色（Hue 7.5 YR 8/4）	焼成良好
3	台付甕	口縁部径(復元) 残存高	19.6 6.6	外面　口縁部：横位ハケ後ナデ　胴部：縦位ハケ 内面　口縁部：斜位ハケ後ナデ　胴部：ハケ	金雲母，白色粒子，石英 外面：浅黄橙色（Hue 10 YR 8/4） 内面：浅黄橙色（Hue 10 YR 8/4）	焼成良好
4	台付甕 （脚台部）	残存高 底径	10.3 9.1	外面　口縁部：横位ハケ後ナデ 胴部：縦位ハケ 内面　口縁部：斜位ハケ後ナデ　胴部：ハケ 脚台部：ナデ	角閃石，石英，赤・白色粒子 内外面：にぶい黄橙色（Hue 10 YR 7/4） 外面：黒褐色（Hue 10 YR 3/1），橙色（Hue 7.5 YR 6/6） 内面：明赤褐色（Hue 5 YR 5/6），灰色（Hue 10 YR 4/1）	焼成良好
5	小型壺	口縁部径(復元) 残存高	13.2 12.5	外面　口縁部：ナデ　胴部：斜位ハケ後ナデ 内面　口縁部：ナデ　胴部上位：斜位ハケ 胴部中位～下位：ハケ後ナデ	角閃石，白色粒子，石英　外面：明赤褐色（Hue 5 YR 5/6） 黒色（Hue 7.5 YR 1.7/1），にぶい黄橙色（Hue 10 YR 7/3） 内面：赤褐色（Hue 5 YR 4/6）	焼成良好 丹塗り 煤付着
6	二重口縁壺	口縁部径(復元) 残存高	12.6 12.0	外面　ナデ 内面　口縁部：ナデ　胴部上位：指頭圧痕 胴部中位：ナデ	角閃石，白・赤色粒子　外面：明赤褐色（Hue 5 YR 5/6） にぶい黄橙色（Hue 10 YR 7/4），褐灰色（Hue 10 YR 4/1） 内面：明赤褐色（Hue 5 YR 5/6）	
7	壺	口縁部径(復元) 残存高	15.4 7.7	外面　口縁部：ナデ　胴部：斜位ハケ，横位ハケ 内面　口縁部：ナデ　胴部：横位ハケ，斜位ハケ	角閃石，白色粒子，金雲母，石英 内外面：にぶい黄橙色（Hue 10 YR 7/4），黒褐色（Hue 7.5 YR 3/1） 内面：明赤褐色（Hue 5 YR 5/6）	
8	二重口縁壺	口縁部径(復元) 残存高	20.0 9.9	外面　口縁・突帯部：ナデ 内面　口縁部：ナデ　頸部下位：斜位ハケ	角閃石，赤色粒子，石英 外面：明黄褐色（Hue 10 YR 7/6），褐灰色（Hue 10 YR 4/1） 内面：浅黄橙色（Hue 10 YR 8/4）	焼成良好
9	壺	口縁部径(復元) 残存高	22.2 31.9	外面　口縁部：ナデ　頸部：縦位ハケ後ナデ 胴部上半：斜位ハケ　下半：斜位ハケ後ナデ・ミガキ 内面　口縁部：ナデ　頸部：横位ハケ　胴部：ハケ後ナデ	角閃石，赤色粒子，石英，長石 外面：橙色（Hue 7.5 YR 7/6），にぶい黄橙色（Hue 10 YR 7/4） 内面：浅黄橙色（Hue 10 YR 8/4），褐灰色（Hue 10 YR 6/1）	
10	長頸壺	口縁部径(復元) 残存高	9.4 10.5	外面　口縁部：ナデ　頸部：縦位ハケ後ナデ，沈線文 内面　ナデ	角閃石，白・赤色粒子，石英，金雲母 外面：浅黄橙色（Hue 10 YR 8/4），褐灰色（Hue 10 YR 4/1） 内面：にぶい黄橙色（Hue 10 YR 7/4）	焼成良好
11	甕 （ミニチュア）	口縁部径 器高 底径	5.9 5.4 2.0	外面　指頭圧痕 内面　指頭圧痕	角閃石，白色粒子 内外面：浅黄橙色（Hue 10 YR 8/3），褐灰色（Hue 10 YR 4/1）	
12	浅鉢 （ミニチュア）	口縁部径 器高 底径(復元)	10.1 4.9 4.2	外面　ナデ，指頭圧痕 内面　ナデ，指頭圧痕	白色粒子，雲母粒子 内外面：浅黄橙色（Hue 10 YR 8/3），赤褐色（Hue 2.5 YR 4/6）	丹塗り
13	高坏 （脚台部）	残存高 底径	12.4 13.4	外面　横位ナデ後縦位ハケ　脚注部：ミガキ 内面　脚注部：横位ナデ後縦位ヘラケズリ 裾部：回転ハケ後ナデ	赤色粒子，石英 外面：橙色（Hue 7.5 YR 6/6） 内面：橙色（Hue 7.5 YR 6/6）	穿孔
14	器台	残存高 底径	10.5 12.4	外面　脚注部：縦位ハケ後ナデ・ミガキ 裾部：ナデ，ミガキ 内面　脚注部：ヘラケズリ　裾部：斜位ハケ，ナデ	石英 外面：浅黄橙色（Hue 10 YR 8/4） 内面：にぶい黄橙色（Hue 10 YR 7/4）	
15	器台	胴部径(復元) 残存高	13.0 17.2	外面　胴部上半：ナデ　胴部下半：横位ハケ後ナデ 内面　胴部上半：ナデ　胴部下半：斜位ハケ後ナデ	角閃石，白・赤色粒子，石英， 内外面：にぶい黄橙色（Hue 10 YR 7/3） 外面：赤褐色（Hue 5 YR 4/6），褐灰色（Hue 7.5 YR 4/1） 内面：橙色（Hue 5 YR 6/6）	
16	器台	残存高 底径(復元)	25.7 30.6	外面　横位ハケ後ナデ　胴部中位：従位ハケ，沈線文 内面　胴部上位：横位ハケ，縦位ハケ，ナデ 胴部下位：指頭圧痕，横位ハケ後ナデ	角閃石，白・赤色粒子，石英 外面：にぶい黄橙色（Hue 10 YR 7/4），褐灰色（Hue 10 YR 6/1） 内面：にぶい黄橙色（Hue 10 YR 7/4）	
17	甕	口縁部径 残存高	38.4 20.2	外面　口縁部：ナデ　胴部：縦位ハケ後ナデ・ミガキ 内面　口縁部：ナデ　胴部：ナデ後ミガキ，指頭圧痕 胴部下位：指頭圧痕，横位ハケ後ナデ	石英，長石，雲母 外面：浅黄橙色（Hue 10 YR 8/4） 内面：にぶい黄橙色（Hue 10 YR 7/4）	
18	甕	口縁部径(復元) 残存高	33.2 20.2	外面　口縁部：横位ナデ　胴部：斜位ハケ後ナデ 内面　口縁部：横位ナデ　胴部：縦位ハケ後横位ナデ	角閃石，白・赤色粒子，金雲母，石英 外面：浅黄橙色（Hue 10 YR 8/3） 内面：橙色（Hue 7.5 YR 6/6）	焼成良好 三角突帯
19	甕	口縁部径(復元) 残存高	38.4 11.8	外面　口縁部：ナデ　胴部：ハケ後ナデ 内面　口縁部：ナデ　胴部：ハケ後ナデ	角閃石，白色粒子，石英,5㎜以下の長石 外面：にぶい黄橙色（Hue 10 YR 7/4） 内面：黄褐色（Hue 10 YR 5/6）	
20	壺	口縁部径(復元) 器高 底径	34.7 64.2 7.0	外面　口縁部：横位ナデ　胴部：ハケ 内面　口縁部：横位ナデ　胴部：ハケ 頸部：横位ハケ，指頭圧痕，横位ナデ	角閃石，赤・白色粒子，石英，長石，雲母 外面：にぶい黄橙色（Hue 10 YR 7/4） 内面：黄褐色（Hue 10 YR 5/6）	突帯
21	壺	口縁部径 残存高	43.2 20.4	外面　口縁部：横位ハケ後ナデ　胴部：ハケ後ナデ 内面　口縁部：斜位ハケ後ナデ　胴部：斜位ハケ	角閃石，白色粒子，石英，長石，雲母 外面：橙色（Hue 5 YR 6/6） 内面：明赤褐色（Hue 5 YR 5/6）	突帯
22	壺	口縁部径(復元) 残存高	41.8 9.6	外面　口縁部：斜位ハケ　頸部：縦位ハケ 内面　横位ハケ，ナデ	角閃石，白・赤色粒子，金雲母 内外面：赤褐色（Hue 5 YR 4/6），橙色（Hue 5 YR 6/6）	
23	壺	口縁部径 残存高	29.8 16.8	外面　口縁部：ナデ　頸部：横位ハケ　胴部：横・斜位ハケ 内面　口縁部：ナデ　頸・胴部：横位ハケ後ナデ	角閃石，赤・白色粒子，石英，雲母 外面：橙色（Hue 7.5 YR 6/6） 内面：橙色（Hue 7.5 YR 6/6）	突帯
24	壺	口縁部径 残存高	23.2 16.7	外面　口縁部：ナデ　頸部：タタキ後ナデ　胴部：斜位ハケ 内面　口縁部：ナデ　頸部：タタキ後ナデ・ミガキ 胴部：斜位ハケ	角閃石，赤・白色粒子 外面：橙色（Hue 5 YR 6/6） 内面：明赤褐色（Hue 5 YR 5/6）	突帯

第２表　石包丁計測表　　※長さ・幅・厚さ（cm）

番号	石材	穿孔方法	刃部	備考	長さ	幅	厚さ	重さ（g）
25	安山岩系石材	両側穿孔	片刃	刃部摩擦	7.35	4.6	0.6	27.4
26	角閃石安山岩	両側穿孔	片刃	刃部に光沢有り	4.1	9.25	0.7	41.1

【近況報告随筆】新生児と土偶

古　澤　義　久

2010年11月，幸いなことに筆者は新生児の出産に立ち会うことができた。産声をあげて誕生した新生児をみて，どうかこの児が健康に成長できるようにといった祈りに近い気持ちを抱くとともに，新生児特有の様態をみて，別の感情が湧き出てきた。

「コンドンで出土した土偶に良く似ている。」

※　　※　　※

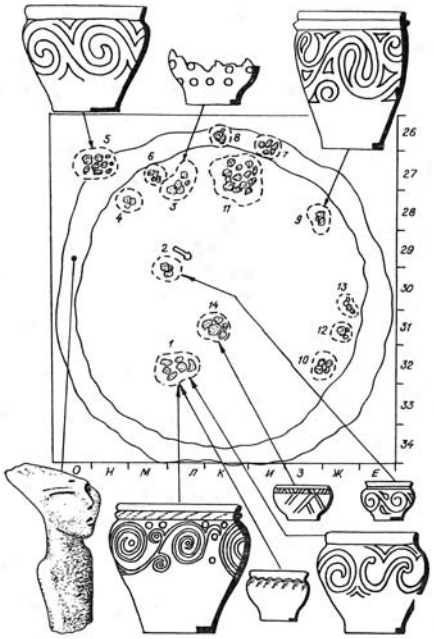
コンドンはアムール河下流のロシア連邦ハバロフスク地方コムソモリスク・ナ・アムーレから北西約100km のエヴォロン湖附近に位置する新石器時代の遺跡である。1962年から1972年にかけて14基の竪穴住居址が発掘調査された。1963年に発掘調査された３号住居址で土偶が出土している（**第１図**）。３号住居址は平面円形の竪穴住居址で，住居址内堆積層は３層に分層される。土偶が出土したのは，住居址北西側の立ち上がり部で，床面を覆う第３層から出土した（**第２図**）。第３層で確認された土器集中部（コンプレクス）は14箇所で，いずれも新石器時代後期のヴォズネセノフカ文化期に属する土器が出土している。土偶は半身像で，頭部と胴部が並んで破片で出土した。高さ12㎝である（Окладников , Деревянко1973, Okladnikov1981, Окладников 1983）。後頭部は後方に伸び，眉と鼻はつなげて表現され，目は細くつりあがっている。口はおちょぼ口で半開きの小さな口である。額に孔がある。腕の表現はほとんどない。

ヴォズネセノフカ文化期の土偶としてはスーチュ島出土の土偶（**第３図**）も著名である。コンドン出土土偶と同様に半身像であり，高さ6.6㎝で，後頭部は後方に伸び，細くつりあがった目で，広い頬骨を持ち，鼻と口は穴で表現されている（Okladnikov 1981）。このような後頭部が後方に伸び，細くつりあがった目を持つ半身像の土偶はヴォズネセノフカ文化期に特徴的な土偶であるといえる。

Ａ.Π.オクラドニコフはコンドン出土の土偶について女性（женщина）であるとみており（Окладников，Деревянко 1973），さらに限定的には，モンゴロイドの外見を持つ娘（девушка）であるとしている（Окладников 1983）。しかし，筆者としては，コンドン出土土偶は新生児の特徴に，より合致するのではないかと考えている。新生児は頭蓋骨が柔らかく，狭い産道を通るときに，後頭部が後方に伸びることが多い。また，目も充分に開けられないため，細く，口も半開きであることが多いという新生児の特徴もコンドン出土土偶と一致する。そこで，筆者としては印象論に過ぎないが，コンドン出土土偶をはじめとするヴォズネセノフカ文化期の一部の土偶は新生児をモチーフにしたのではないかと密かに考えている。コンドン土偶の額にみられる孔は解釈が難しいが，もしかすると，頭蓋骨の発達が充分ではないため生じた隙間である大泉門であるかもしれない。

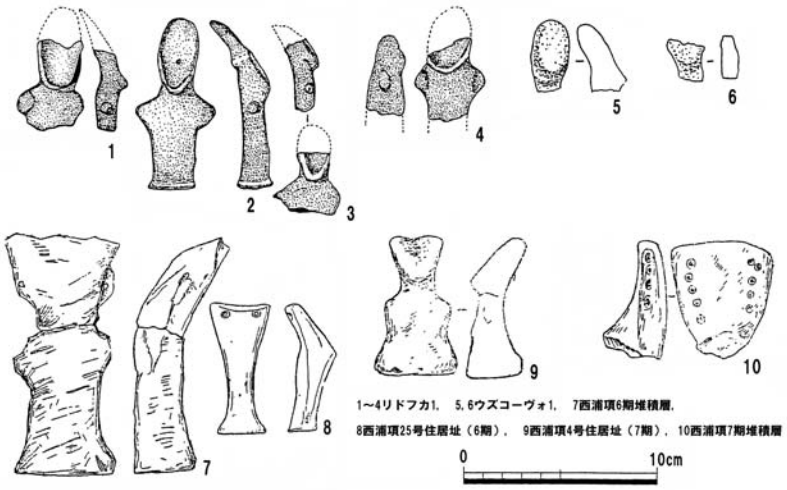
後頭部が後方に伸びるという点では，人為的な頭蓋骨変形の可能性も考えておかなくてはならないが，これまでのところ，ヴォズネセノフカ文化期で頭蓋骨変形を行ったという積極的な証拠はない。後方に伸びる後頭部を持つ土偶は東北アジア全体では，沿アムール地域のヴォズネセノフカ文化期の土偶以外に，リドフカ１，クルグラヤ・ドリナ，ブラゴダトノエ３（Дьяков 1989），ウズコーヴォ１（Крупянко，Перегудона 2001）などでみられる沿海州のリドフカ文化の土偶や豆満江下流域の西浦項６・７期の土偶（金用玕・徐国泰 1972,《朝鮮遺蹟遺物図鑑》編纂委員会 1988）なども知ら

第１図　コンドン３号住居址出土土偶



第２図　コンドン土偶出土状況

第３図　スーチュ島出土土偶



第４図　リドフカ文化，西浦項６・７期の土偶

れる。リドフカ文化や西浦項６・７期の土偶は後頭部が後方に伸びるが，顔面には目鼻が表現されないという特徴がある（**第４図**）。金材胤は沿アムール地域のヴォズネセノフカ文化期の土偶と沿海州のリドフカ文化等の土偶に関連があると想定しているが（金材胤 2008），リドフカ文化や西浦項６・７期は青銅器時代で，ヴォズネセノフカ文化よりも後行し，時期的な併行関係にないので，直接の関係は想定しがたいだろうと筆者はみている。ただし，土器においては新石器時代終末期に沿アムール地域から沿海州へ影響関係がみられるので（Клюев，Яншина 2002），リドフカ文化や西浦項６・７期の土偶の祖形に影響を与えた可能性はあるかもしれないと考えている（古澤 2014）。もし，関連があるとすれば，リドフカ文化や西浦項６・７期の土偶も新生児との関係を考えなければならないだ

ろう。

※　　※　　※

その後，さらに幸いなことに，つい最近2016年３月にも新生児の出産に立ち会うことができた。陣痛から出産までの時間が短く，無事の出産に安堵するとともに，ぷっくりと腫れぼったく，むくんで閉じた新生児の目をみて，またしても別の感情が湧き出てきた。

「目が遮光器土偶にそっくりだ。」（註１）

※　　※　　※

遮光器土偶は日本列島縄文時代の土偶を代表する著名な土偶で，東北地方北部を中心とする地域に縄文時代晩期前半に盛行した土偶である。周知のとおり，遮光器土偶の名称の由来は，目の表現が遮光器を示しているという説にあるように，目が特徴的な土偶である。

遮光器土偶の目が何を表現しているかについてはさまざまな説があるが，新生児の目を表現しているという説も既に提示されたことがある。美術評論家の瀧口修造は「私は，この大きな目の偶像からは常闇を感じる。かれらの凝視しているのはまるで巨大な闇であるように，あるいは生れ落ちた瞬間，まだ明るみに慣れない嬰児の目のようだとも言える」と述べている（瀧口 1959）。しかし，新生児の目の表現であるとする説以外にも多様な説が提示されている。

亀ヶ岡で大型遮光器土偶（**第５図**）が発見されたとき，神田孝平はその目について「眠リタル姿ニ似タリ」と述べた（淡厓 1887）。名称の基となった遮光器説は，坪井正五郎によって提示された説である。坪井は当初，防寒具であると考えていたが（坪井 1890），その後，雪から反射する光を遮って目を保護する遮光器を表現していると考え（坪井 1891），遮光器土偶という名称の基となった。しかし，この遮光器説には早くから反論が提示されており，N. G. マンローは原始時代の人民は目を重要視するので，人の目を大きく表現しても不思議ではないとし，死んだ人の目か眠っている人の目であると思われないこともないと述べ，遮光器ではないとした（マンロー 1908）。江坂輝彌は抽象化が進んだ土偶に，突然具象的な遮光器表現が出現することを疑問としながら，眼そのものを極度に誇張した土偶特有の表現であると指摘していたが（江坂 1960），その後，初現期の遮光器土偶の類例の増加から，やはり眼部を次第に誇張したものであるという確信を得たと述べた（江坂 1990）。米田耕之助は，縄文土偶が当初，誕生の意味でつくられたが，時期を追うに従って死を意味するものへと変化したと述べ，遮光器土偶は死を意味する，より具体的な方法として目を閉じた状態を示し，異常なまでに大きく目を誇張したものと主張している（米田 1984）。我孫子昭二は宇

第５図　青森県つがる市亀ヶ岡出土遮光器土偶

第６図　藤沼邦彦による遮光器土偶の変遷

鉄出土土偶の観察から，遮光器端部の切り込みは耳ではなく，眼帯のような仮面であるとみて，大型遮光器土偶の正体とは仮面を被った土偶であると述べている（我孫子 1999）。ここで紹介した諸見解は一部に過ぎないが，遮光器土偶の目については定見がなく，百家争鳴状態であることがわかる。

なお，遮光器土偶のあまりの異形さゆえ，宇宙人がモデルとなっているという言説が人口に膾炙している。橋本順光の研究によると，カルトと化したUFO団体である宇宙友好協会（CBA）が提唱し，ソ連のSF作家Ａ．Π．カザンツェフが広めたということが明らかになっている（橋本 2009）。CBAの鷲尾功は宇宙服の開閉式大型遮光眼鏡とみており（鷲尾 1962），カザンツェフは眼が大きいことから地球より少ない光の場所の生物であるとみた（無記名 1962）（註２）。縄文時代の宇宙人についての存在は確認されていないので，可能性はまずないといってよい。

ところで，遮光器土偶の変遷については既に多くの研究がなされている（野口 1960，鈴木 1990，藤沼 1997，我孫子 1999，原田 2010ほか）。問題となるのは，遮光器状の目の成立過程であるが，鈴木克彦は縄文時代後期末の土偶に粘土を貼り付けた団子目の膨隆した眼部に横位に刻目状沈線を入れたものが祖形となったと述べている（鈴木 1990）。江坂輝彌も小さな目から大きな眼へ変遷したことを述べている（江坂 1990）。藤沼邦彦はⅠ段階（遮光器状の目が成立する前）→Ⅱ段階（遮光器状の目が成立）→Ⅲ段階（遮光器状の目がさらに型式化）→Ⅳ段階（遮光器状の目が衰退）という変遷を想定している（藤沼 1997）（**第６図**）。いずれの見解でも縄文時代晩期前半の遮光器土偶が縄文時代後期の土偶に系譜が求められることが示されている。

このような変遷観からみれば，マンロー以来，江坂らによって主張された目を大きく強調するようになったという見解が最も説得力があるように感じられる。藤沼の設定した段階の中で，新生児の目に最も類似しているのはⅡ段階とⅢ段階である。遮光器土偶の目が新生児の目をモチーフにしたとしても，そのモチーフは後から加味されたとせざるをえないのではないだろうか。

※　　※　　※

それでは，新生児または乳幼児をモチーフにしたことが確実にわかる土偶は存在するのであろうか。東北アジア全体を見渡してみると，妊婦像は遼西地域の紅山文化に属する東山嘴（郭大順・張克挙 1984）や牛河梁Ｎ５SCZ２堆積層（郭大順等 2012）などで確認されているが，新生児または乳幼児そのものを表現した例は（筆者が密かに考えるヴォズネセノフカ文化の一部の土偶を除外して）ほとんど確認されない。縄文文化では，妊婦像は非常に多く，中には，出産の場面をモチーフにした土偶も確認されているものの（小野 1987），このような事例では新生児は頭部のみ表現され，新生児をどのように把握していたのか理解するのは困難である。こうした状況下にあって，縄文文化では僅かではあるが，新生児または乳幼児をモチーフにしたことが確実な事例が数点知られている（江坂 1990，忽那 2009，山田 2013）。

東京都八王子市宮田Ａ－４号住居址（宮塚・椙田 1972，1978）では乳児を抱き抱えている土偶が

1宮田,2上山田,3沖中

第７図　乳幼児が表現された土偶

出土している（**第７図－１**）。時期は縄文時代中期前半である。単に乳児を抱いているのではなく授乳しており，乳児は手足の表現がなく何かに包まれているとみる見解（山田 2013）もある。乳児の顔面は刺突により眉，目，口を表現している。

石川県かほく市上山田貝塚出土土偶（江坂 1960，1990）は1920年代に発見された土偶である（**第７図－２**）。時期は縄文時代中期であるとみられる。乳幼児を背負っている土偶であるが，乳幼児は背をむけているので乳幼児の表情は窺えない。

青森県三戸郡三戸町沖中（三戸町教育委員会編 2000）では乳幼児単体の土偶が出土した（**第７図－３**）。時期は縄文時代晩期である。おくるみのようなもので包まれ，乳幼児の顔面は刺突により目や口が表現される。背面には入り組み文が施文される。

このように乳幼児を表現した土偶があるが，その表情は刺突により簡単に表現され，新生児や乳幼児に特有の様態を表現したとは言いがたいものである。特に，沖中例は遮光器土偶と地域的にも時期的にも関連があり，乳幼児が単体で表現され，宮田や上山田のように母体に付随する乳幼児ではない点で注目されるが，それでも目の表現も簡素なもので，遮光器土偶にみられるような腫れぼったく，むくんだ目は表現されていない。このような事例が存在するとなると，遮光器土偶の目は新生児の目とそっくりなのは事実であるが，新生児の目をモチーフとしたとみるのは難しいかもしれない。

もう一つ，興味深いことがある。コンドンなどのヴォズネセノフカ文化の土偶では，目だけでなく，口や後頭部の表現など，新生児を思わせる様態が複数の部分で認められる。一方で，遮光器土偶の場合は，新生児と共通するのは，目のみである。遮光器土偶の中には豊かな乳房が表現されているものもみられ，胴部は基本的に成人女性をモチーフにしたとみてよい。そうすると，仮に新生児の目をモチーフとした場合，顔面と胴部で年齢が異なるちぐはぐな表現ということになる。

ただし，顔面と胴部で年齢の異なるちぐはぐな土偶が存在しないとはいえない。ここで，想起されるのは，ヒトばなれした表情からみて，土偶は縄文人にも不可視の力のイメージ，精霊を表現したものであるという小林達雄の見解である（小林 1986，1988，1990ほか）。顔面と胴部でそれぞれ表現したい対象が異なるとすれば，現実の人物を写実したものとはみられないので，土偶精霊説も充分に可能性があることではある。

※　　※　　※

裕理ちゃん，準くん，生まれてくれてありがとう。どんなふうに成長するか楽しみですが，いつも元気で健康であれば，ほかに何も望むことはありません。そして，大変な出産を頑張って，元気な子どもを生んでくれた妻の潤姫に感謝します。ありがとう。出産のとき，男は何の役にも立たないといいますが，全くもってそのとおりです。土偶のことを考えていました。ごめんなさい。裕理ちゃん，準くん，潤姫，どうかこんな父・夫を許してください。

西海考古を主導されている古門雅高さんがこの３月で定年退職され，一つの節目を迎えられましたことをお慶び申し上げます。最初に配属された学芸文化課で大変，お世話になりました。当時の学芸文化課は凄惨な職場でしたが，時折，考古学のことについて古門さんと話したことは，何とか出勤する原動力となっていたと思います。これまでお疲れさまでした。今後ともよろしくお願いいたします。

（2016年３月31日脱稿）

【註】

註１　この出産には女児（５歳）も立ち会っていたが，やはり「ドグー，ドグー」と連呼していた。この女児は考古学の本をみたり，筆者の地表調査に同行するなど考古学に親しんでいるため，幼稚園園庭で採集した磁器片や煉瓦片を提出し，先生を困惑させたことがある。

註２　但し，カザンツェフが例示した土偶には関東地方縄文時代後期中葉に盛行した山形土偶が含まれる。

【引用・参考文献】

〈日文〉
安孫子昭二　1999「遮光器土偶の曙光」『土偶研究の地平３』勉誠出版
江坂輝彌　1960『土偶』校倉書房
江坂輝彌　1990『日本の土偶』六興出版
小野正文　1987「山梨県釈迦堂遺跡群出土の「誕生土偶」」『考古学ジャーナル』272
忽那敬三　2009「先史時代の“子ども”」『チャイルド・サイエンス』５
小林達雄　1986「縄文土偶の顔」『歴博』16
小林達雄　1988「男と女」『古代史復元３縄文人の道具』講談社
小林達雄　1990「縄文土偶の世界」『季刊考古学』30
三戸町教育委員会編　2000『沖中遺跡・沖中⑵遺跡発掘調査報告書』三戸町埋蔵文化財調査報告書第１集
鈴木克彦　1990「遮光器土偶」『季刊考古学』30
瀧口修造　1959「土のなかの生命」『日本の土偶』紀伊國屋書店
淡　　厓　1887「瓶ヶ岡土偶図解」『東京人類学雑誌』22
坪井正五郎　1890「ロンドン通信」『東京人類学会雑誌』52
坪井正五郎　1891「ロンドン通信」『東京人類学会雑誌』62
野口義麿　1960「いわゆる「遮光器土偶」の変遷」『MUSEUM』109
橋本順光　2009「デニケン・ブームと遮光器土偶＝宇宙人説」『オカルトの惑星』青弓社
原田昌幸　2010『日本の美術 No. 527土偶とその周辺Ⅱ』ぎょうせい
藤沼邦彦　1997『歴史発掘③縄文の土偶』講談社
古澤義久　2014「東北アジア先史時代偶像・動物形製品の変遷と地域性」『東アジア古文化論攷１』中国書店
マンロー，ヱヌ．ヂ．（水上久太郎訳）1908「コロボックルに就て」『東京人類学会雑誌』268
宮塚義人・椙田光明　1972「東京都八王子市宮田遺跡の調査⑴」『多摩考古』12
宮塚義人・椙田光明　1978「東京都八王子市宮田遺跡の調査⑵」『多摩考古』13
山田康弘　2013「子どもの考古学」『歴博』179
米田耕之助　1984『考古学ライブラリー21土偶』ニュー・サイエンス社
鷲尾　功　1962「古代日本にも機密服？じょうもんスーツの謎」『空飛ぶ円盤ニュース』1962-９
無記名　1962「宇宙人は日本に来たことがある」『週刊読売』1962-12-９
〈韓文〉
金用玗・徐国泰　1972「西浦項原始遺蹟発掘報告」『考古民俗論文集』４
金材胤　2008「先史時代의 極東 全身像 土偶와 環東海文化圏」『韓国上古史学報』60
《朝鮮遺蹟遺物図鑑》編纂委員会1988『朝鮮遺蹟遺物図鑑１　原始篇』
〈中文〉
郭大順・方殿春・魏凡・朱達・王来柱・呂学明2012『牛河梁』文物出版社
郭大順・張克挙1984「遼寧省喀左県東山嘴紅山文化建築群址発掘簡報」『文物』1984-11
〈露文〉
Дьяков, В. И. 1989 *Приморье в эпоху бронзы.* Владивосток.

Клюев, Н. А., Яншина, О. В. 2002 Финальный неолит Приморья：Новый взгляд на старую проблему. *Россия и АТР* 2002-3. Владивосток.

Крупянко, А. А., Перегудона, Е. В. 2001 Загадочные вещи из Узкого 1. *Произведения искусства и другие древности из памятников Тихоокеанского региона - от Китая до Гондураса.* Владивосток.

Окладников, А. П. 1983 *Древнее поселение Кондон (Приамурье).* Новосибирск

Окладников, А. П., Деревянко, А. П. 1973 *Далекое прошлое Приморья и Приамурья.* Владивосток.

〈英文〉

Okladnikov, A.P.1981 *Art of the Amur. Ancient Art of the Russian Far East.* New York-Leningrad.

【図版出典】

図1 Окладников 1983, **図2** Окладников 1983, **図3** Okladnikov 1981, **図4-1～4** Дьяков 1989, **-5，6** Крупянко, Перегудона 2001, **-7～10** 金用玕・徐国泰1972, **図5** 東京国立博物館ホームページ「情報アーカイブ」（http://webarchives.tnm.jp/archives/）, **図6** 藤沼1997改変, **図7-1，2** 江坂1990, **-3** 三戸町ホームページ「三戸町の歴史と文化財」（http://www.town.sannohe.aomori.jp/sannohe-history/sannohe-history-top.htm）

『西海考古』第10号執筆要綱

判　型：Ａ４版（幅210×長さ297㍉）　　**書　式**：横書き（45文字×40行）
余　白：上27㍉　下・左・右：各25㍉（多少，変動する可能性があります）
図　版：横160㍉×縦240㍉（多少の超過は可能です）

題　名：明朝15ポイント　　**副　題**：明朝12ポイント　　**筆者名**：明朝12.0ポイント
本　文：明朝10.5ポイント　　**註　**：明朝9.5ポイント　　**文　献**：明朝9.5ポイント
表・図版・写真などのキャプション：ゴシック11.0ポイント
内　容：論文・研究ノート・資料紹介・エッセー・近況報告など

※副題がある場合には題名の次行に記し，前後に罫線を付加します。筆者名と題名（副題がある場合は副題）の間には空行（１改行）を挿入してください。
　筆者名行の次には空行（１改行）を挿入してください。
　節の最終行と次節名との間には空行（１改行）を挿入してください。
※文献名は，①執筆者（または編集者），②発行年（西暦），③「題名」
　　④『所収書名』，⑤巻次（シリーズ名等），⑥発行者（発行機関）
　　⑦備考の順で記載してください。
※文中の記号や単位語は，原則として全角１文字での表記
　㍉　㌔　㎝　㍍　㌘　㌧　㎡　㌶　㍑　㌍　㌫　㌻などを用いてください。
※地名，遺跡名，型式名などで難解なものについては，ルビを付けてください。
※外字については印刷所に一任します(個人的に作成した外字は，原則として利用できません)
※図版作成は，番号・縮尺・方位・網掛けなど，執筆者側で可能な範囲でお願いします。

原稿は，できるだけデジタルデータとして提出してください。
※ワードや一太郎などで執筆された場合，文章（題名・副題・氏名・註・文献・謝辞等）のテキストファイル（*.txt）を添付していただけると助かります。
※図版に関しては，版下図版・データともに可ですが，挿入位置を原稿に明示してください。
※エクセルなどで作成したリスト・表・グラフも，できるだけ元データをテキストファイル（*.txt）か CSV ファイル（*.csv）として添付してください。
※イラストレーターで作図する場合，テキストはアウトライン化してください。また，イラストレーターのデータは CS３以下のバージョンで保存のうえ，添付していただきますようお願いします。
※文章・図面ともに打ち出し原稿を添付してください。

１．投稿先

西海考古同人会事務局

〒850-0874 長崎県長崎市魚の町６-15-902　古門雅高 方

２．投稿締め切り

平成28年12月末日（締切厳守）

３．校正

編集後，著者校正は原則１回とします。

４．註，引用・参考文献

⑴　註と引用・参考文献の区分

註と引用・参考文献は区別します。註は本文と関連する補助的事項を記し，引用参考文献は，他著者の見解等を引用する際に必ず明記してください。

⑵　註の書き方

当該箇所の文字に続けて括弧書きで示し，本文末に番号順に記載してください。

【例】

（本文中）……発見された（註１）。

（本文末）註１　このような発見例は長崎県で３例目である。

５．その他

・図表および写真については，原則モノクロとします。

・折り込み図版は原則使用しないでください。

不明な点は，事務局（cqe 07660@yahoo.co.jp）までメールでお問い合わせください。

執筆者一覧（五十音順）

伊　藤　敬太郎	国際文化財株式会社
大　坪　芳　典	株式会社　埋蔵文化財サポートシステム
柴　田　　亮	大村市教育委員会
土　岐　耕　司	国際文化財株式会社
古　澤　義　久	長崎県教育委員会
溝　上　隼　弘	佐世保市教育委員会
村　子　晴　奈	雲仙市教育委員会

西 海 考 古　第９号

2016年10月１日　発行

発　行　**西海考古同人会**

編　集　**西海考古同人会事務局**
〒850-0874
長崎県長崎市魚の町６-15-902
古門　雅高 方
E-mail：cqe07660@yahoo.co.jp
郵便振替：01770-5-75643

印　刷　**株式会社　昭 和 堂**